
君との日々

Toki.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君との日々

【Nコード】

N2160D

【作者名】

Toki.

【あらすじ】

不良高校生の池山大地が、三つ編みモードと美人モードの二つの顔を持つ優等生の池上雫に一目ぼれをした。自分と全く違う世界に住む彼女との恋愛に、苦しんでいく大地の日常を描いた学園ベタベタラブストーリー。

#01 君との出会い（前書き）

この小説は、一話一話が短くなっております。

そのため、できるだけ毎日更新ができるかと思っています。

では、短い前置きですが、「君との日々」をご覧ください。

#01 君との出会い

一人、丘の上で夕日を見ながら、タバコを吸う男、池山大地。この丘の上から、空を見るのが好きなのだ。

俺の周りには、綺麗な花や、素敵な女の子もいない。

ただ、俺は愛に飢えていた。

小学校4年生のときに、親が離婚。

俺は母親に引き取られ、双子の兄弟は父親に引き取られた。

それ以来、母子家庭で育ってきた俺は、ちよつとずつ性格も荒れてきて、今に至る。

神崎高校の池山といったら、このあたりじゃ結構有名。

まだ、少年院には入ったこと無いが、留置所になら…まあ多少。

警察官の人とも仲良くなり、警察内部でも結構有名な？ 存在なのです。

俺の携帯がブルルと鳴った。

「もしもし？」

『あ、大地君。あたしだよ。 今日なんだけど、そっちに遊びに行ってもいいかなあ?』

遊びに行く〓SEXをしよう。という話だ。

「別にいいよ。」

『じゃあ、7時にそっちにいくね!』

そのまま電話は切れた。

俺の母親である馬鹿女は、夜はどこかで働いていていない。

前の夫が金持ちだったせいか、家だけは大きいのだ。そのため、俺の不良仲間たちの宴会場になったり、乱交場所になったり色々。

家に帰り、7時になると家のチャイムがなり、俺は人を確認したあと、家のロックをはずした。

そして、また欲求発散の行為が始まる。

行為も終わり、そしてベッドに裸のまま横たわっている女がつぶやいた。

「大地君のSEX好きなんだよね」

「そっか。」

俺はそっけない返事を返し、またタバコを吸い始めた。

「大地君は、明日学校？」

「行くかはわかんないけどね」

自分で言つのもなんだが、俺の顔はいいほうだと思う。

だから、勝手に女が寄ってくる。

女なんてものは、抱く玩具。俺の欲求を発散させてくれればいい。

そんなもんだ。

女が帰ると、俺は眠りについた。

翌日、目が覚めると、学校に行く準備をした。

俺の家から、学校までは電車を使い、30分ほどかかる。

どっかのテレビや、映画や漫画みたいに、歩きで登校なんてのは夢のまた夢なのだ。

駅のホームで、電車を待ち、電車に乗り、電車を降りて、学校にむかう。

そんな当たり前の行動なのだが、今日はその行動の中に俺の心を動かされる事が起きた。

電車を降りて、改札口を出て、学校へとむかおうとしたとき、変な女が俺にぶつかってきた。

「いつてえな！」

俺が怒鳴りつけると、女は小さな声で「ごめん…」といって、立ち去ろうとした。

「ちょっとまってよ」

女の腕をつかむと女がこっちを向いた。

「あ、なんでもない…」

俺はそう言っ、女の腕を離し、俺は、その女の去っていく姿を知らぬ間に目で追っていた。

そのとき、ふと足元に何かがあるのが分かり、下へと目線を向けると、さっきの女が落としたであろう定期が落ちていた。

定期には『石上 雫』

「イシガミ…シズク」

俺は、頭に叩き込むように彼女の名前を呟いた。

「それにしても、とてつもなく可愛かった…。それにいい臭い…」

甘くて、俺の心を癒す香り…って、香りまでかいている俺は変態か。

ぼそつと呟くと、後ろから小学校からの幼馴染である安藤 明が俺の背中をぼんつと叩いた。

「おっはよ！ 今日学校に登校ですかい？」

「お、おう」

俺はようやく我に戻り、学校に向かった。

そういえば、俺と同じ高校の制服、しかも2年生のバッチをつけていたような気がする。

…って俺は、なんであの女の事をこんなに考えているんだ！

学校に着き、授業が始まった。

少し…あの子に会いたいな。

ち、違うんだぞ！　好きとか、そういうのじゃなくて…

もう一度だけ、顔がみたいな…なんて。

「…そうだ！！」

俺は授業中にもかかわらず大声をあげてしまった。

しかし、周りには俺を笑うものはいない。

いるとしたら、隣の席で爆睡している明ぐらいなのだが、寝ているので笑うことも無い。

昼休みにでも、石上雲に定期を返しに行けばいいのか。

これほど、心がドキドキしたのは久しぶりだ。

#01 君との出会い（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は、
net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#02 会いに行こう

これほど、昼休みを楽しみにしたのは小学校以来なのではないか。

いや、それ以上かもしれない。

4時間目の授業があと10分程度で終わる。

そう思うと、ドキドキが止まらない。

さっきの休み時間に、友達に聞いて『石上隼』は何組にいるのかを聞いておいた。

どうも、3組らしい。

あの子にもう一度会える…。

そう思うと、なぜだか笑みがこぼれた。

「きもちわりい」

そういうのは、隣の席で座っている明だ。

「うっせ」

「思い出し笑いか？ 思い出し笑いする奴はエロい人なんだぞ。」
「つて、大地はエロいかあ！」

きゃっきゃつと笑いながらそういう明の言葉は的外れだね。 うん。

俺は思い出し笑いじゃない。

「それとも、ニヤけてたのかな？」

そういわれると、俺の顔は熱くなった。

多分今は、『はい、図星ですよ』と言わんばかりの赤さだろう。

「お、大地ちゃんにも春が来たか。」

「ち、ちげえよ。別に好きとか、そんなんじゃ…」

ねーよな？ 俺。

「どんな子だ？ 可愛いか？ やっちゃったか？ 何歳だ？」

どうも、俺の反応を見ながら質問をしているらしい。

「ま、まさか、片想い…」

その言葉に、俺は無駄に反応をしてしまった。

「うつそおおおおおお！」

明の叫び声で教室全体をビクツとさせた。

「だから、そんなんじゃねえって」

俺はそういいながらも、自分の顔が赤くなっているのに気づいていない。

まさか、俺がもう女に惚れるなんてありえねえ。

ありえないんだ。

明は叫んだ後、少し呆然としていたが、少し落ち着いたのか、今度は笑い出した。

「な、なに笑ってんだよ。きもちわりい」

「いや、お前がそんな顔するの、久しぶりだからよ」

クククと笑いをこらえてるつもりなのか、俺に喧嘩を売っているのか分からない。

無性にむかついて、俺は明の頭を殴ってやった。

「いてえ」

そっついながらも、明はクククと笑っている。

付き合ってらんねえ。

そんなこんなで、昼休みまではあと2分ほど。

2分間がこんなにも長く感じたのはテスト以来ではないのだろうか。

じーっと時計をみて、チャイムが鳴った瞬間に教室を出た。

俺は、1組だから、池上雪がいると言う3組は2個横の教室。

「なんで俺は、あんな可愛い子を今まで知らなかったのだろう」

俺は後悔をした。

3組まで足を運ぶと、俺は大きく深呼吸を3回ほどして、3組の教室のドアを開けた。

俺のことをみんなは怖がっているのか、一瞬俺を見て、目をそらす。

3組の中をぐるりと見渡したが、池上雫がいる様子は無い。

その辺の男子の前に立って、池上雫の名前を出してみた。

「あ、池上雫ですか？」

何度も聞くな。

「そうだ」

俺の返事で、俺が怖くなったのか、彼は恐る恐る彼女の方に指を指した。

その先には、楽しそうに喋る女子2人組み。

一人は髪の毛を三つ編みに結んで、眼鏡をかけた大人しそうな子。

もう一人は、髪の毛がセミショートのストレートで、活発そうな女の子。

「え、どいつ？」

俺はもう一度、男子に聞いた。だした。

しかし、結果は同じ。

さきほどの二人のほうに指を指す。

その二人の後ろにいるのかと思ったが、やはりいない。

すると、俺の後ろから、

「石上さん、先生が呼んでたよ」

と、一人の女がそういった。

「わかった。ありがとう」

そして、石上が返事をする。

石上……？ 雫！？

『わかった。ありがとう』と言った子は、さきほどの2人組にいた…

あの…三つ編みで眼鏡をかけていた女の子だった。

#02 会いに行こう（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#03 お前が石上覃？

「え…」

俺はつい、声をもらしてしまった。

いや、だってさ、今朝あったときは超美人で、可愛くて、髪の毛は結んでいなかったし、目はくりくりしていて、眼鏡掛けてない子なのに…

結局、俺の思考の先には、別人という文字が浮かんた。

別人かよ。

そう思って、諦めて自分教室に帰ろうとしたとき、あの香りがした。

甘くて、俺の心を癒す。そんな香り。

あの、石上覃と同じ香り。

その臭いの元は、三つ編みの眼鏡の女の子からだった。

無意識に手が伸びる。

今朝同様、腕をつかんでしまった。

「いし…がみ？」

「は、はい？」

「君、石上雫か？」

「は、はあ」

彼女はおどおどしている様子。

恥ずかしいのか、まともに俺の顔を見れないようだ。

周りの視線を集めているのは嫌でも分かる。

「これ、お前のだろう？」

そういつて取り出したのは定期。

それを見て、彼女は俺を見てはっとした顔をした。

「あっ……」

俺は小さく声をもらしてしまった。

眼鏡のおくには、くりつとした目。

俺が捜し求めていた人に違いない。

「あ、あのさ」

「て、定期ありがとう」

そう言って、彼女は去っていった。

あの子だったのか。

教室がざわざわしていた。

それを無視して俺は自分の教室へと戻っていった。

「よっ、おかえり〜。飯食おうぜ」

明が待っていた。

「おう」

俺は、行きに買ってきたパンを取り出して、口へと運び始めた。

あの子は何で顔を隠すのだろう。

あんなに可愛いのに、本当にもったいない。

「……いち、だ…ち？ 大地きいてるか〜？」

「お、おう？」

「なんだよお。せつかく人が面白い話し、してやっているのに。好きな子のことでも、考えたのか？」

クククと再び笑い出す明。

「うっせ。あのさ……」

「ん？」

「あ、いや、なんでもない」

こいつに、石上雫のこと聞いたら、絶対馬鹿にされる。

また、色々聞かれるのが面倒だから、後で瑞樹にでも聞いておくか。

瑞樹のフルネームは、遠山瑞樹。俺と、明と同じ小学校出身の幼馴染だ。

俺は瑞樹を女と見たことないし、瑞樹も俺を男と見たことは無いだろう。

昔からの相談相手。特に俺が聞く側だが。

放課後、瑞樹の携帯にメールをして、一緒に帰ることにした。

「どうしたのよ？ 珍しい。何かあった？」

帰り道、瑞樹が俺に聞いてきた。

「いや、まあ、うん」

「どうしたのよ」

「まあ、たいしたことじゃないんだけどさ、3組の石上零って知ってるか？」

「石上…ああ、あの優等生？」

瑞樹はパンと手をあわせて、思い出したかのように言った。

「優等生？」

「そうそう、学年でいつも上位の成績をとっている子よ。確か、入学式のときは、挨拶をしてた気がする。入学生代表として」

「そ、そうなんだ」

俺とはかけ離れた存在か。

小さく、心の中でため息をついた。

#03 お前が石上零？（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#04 そして俺は問う

翌朝、昨日と同じ時間に登校した。

目的はもちろん、雫に会うため。

…はじめに言うておくがストーカーじゃないぞ。

電車を降りて、少し歩くと、三つ編み、眼鏡モードの池上雫を発見。

俺は、ドキドキしながら雫に近づいた。

「なあ」

俺が呼ぶと、雫は無視して歩いていく。

「石上さん」

そう呼ぶと、雫は止まって俺のほうを見た。

「昨日は定期ありがとう」

そう言つて、雫はまた歩き出した。

…その行動一つ一つが可愛く見えて仕方ない。

なんか胸が痛いや。

「ちょっと待ってって、一緒に学校行こうぜ？」

…無視。

「ちょ、待ってって」

…無視。

「おい、石上さん」

…無視。

「おいって！」

俺はイラついた声で叫び、彼女の方をつかんだ。

「何？」

「いや、なんでもないけど」

「なら、話しかけないで」

そう言って、再び歩き出す雫。

うわぁ、いきなり嫌われた俺…。

「あ、あのさ」

俺は彼女にもう一度声を掛けた。

無視されたけど。

それも覚悟の上だ！！

「なんで、仮面をかぶってんの？」

俺がそう問うと、彼女の動きが再び止まった。

「何が？」

「昨日、俺にぶつかったの石上さんでしょ？」

「私は、ぶつかってなんか…」

明らかに動揺してますが。

「あんなに可愛いのに、なんでそんな格好を？」

少し黙ってから、ため息を零ついた。

「…貴方なら分かるでしょ？ 顔がいいと損するのよ」

それだけを言っで、彼女は歩き出した。

損をするって？

まったくわかんねえよ。

「何で？」

俺がそう問いかけても、彼女は無視をして歩いていった。

昼休み、俺は暇だからと理由で、体育館裏へと煙草を吸いに行った。
体育館裏に着くと、女の声がした。

「先着がいましたか」

俺はぼそつと呟き、ほかの場所を離れようとしたとき、彼女の声が聞こえてきて、体育館裏を覗いた。

そこには、女3人に囲まれている男が立っていた。

どうも、何かを問いただされているらしい。

まあ、あの格好で、あの性格だ。

いじめられるのは目に見えている。

いつもなら、そんな面倒なのは放っておくのだが、今回は頭より先に体が動いてしまった。

「おい、お前等なにやってんだよ？」

俺がそういうと、びびったのか、女の子は退散して行った。

3人が去って行った後に取り残されたのは、俺と雫。

「…顔が悪すぎると、損する事だつてあるぜ？」

「いいよりはマシよ」

そう言つて、雫は去って行つた。

#04 そして俺は問う（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#05 雫の涙

今日も学校が終わり、暇な友達を誘ってゲーセンへと向かった。

いわゆる不良のたまり場だ。

特に何をするわけでもなく、ただ話している。

この前警察に誰々が捕まったとか、どっかの誰々が売春やってるとか、シャブやってるとか、どっかの暴走族に入ったとか。

俺にはまったく関係ない話。

それでも、周りにあわして俺は話をしていく。

話をしていると、いつもどおり女が話しかけてきた。

「大地君、今日あたしをお持ち帰りしない？」

ニコニコときもちわりい笑みを浮かべる女。

「あ、いい…」

いつもどおり、いいよと言おうとしたときだ。

どうしても、雫の顔が浮かんだ。

彼女は、俺がこういうことをしていると知ったらどう思うのだろう？

「ごめん、今日は気分が乗らないんだ」

俺がそういうと、彼女は「そっか」と言って、友達であろう女友達のところに戻っていった。

「どうしたよ？ 大地が女の誘い断るなんて珍しい」

俺の隣に座っている、男が言った。

確か、名前はカイトだった気がする。

「別に、気分が乗らないんだ」

そう言っていると、周りは「へえ」と言い、納得してくれたようだ。

…皆が納得したにも関わらず、俺の左隣に座っている明がきゅっきゅっと笑いながらみんなに言う。

「こいつ、好きな子が出来たらしいぜ」

俺は「馬鹿っ！」と言って、おもいきり腹部へパンチを入れた。

「ぐはっ」と明が痛がっていたが、ニヒヒと笑っている様子から反省はしていないらしい。

周りの連中は俺を見た。

「まじかよ！ あの大地が？」

「どんな子なんだろう」

「すっげえ気になる！」

色々言葉が飛び交う中、俺は呆れてこう言った。

「好きな奴なんていねえから」

しかし、こう話している中でも、思い浮かぶのは、雫の三つ編みモードでは無い方の姿。

それから、俺たちは色々と楽しみ、俺は8時ぐらいにゲーセンから立ち去った。

俺の家から、ゲーセンまでは約駅ひとつ分。

今日は電車には乗らず、なぜか歩いて帰った。

空はもう暗い。

川原の土手を歩いていると、ある男集団が目に入ってきた。

「喧嘩か？」

そう思い、近寄ってみると、ベタではあるが、四人ほどであろう男の集団に囲まれている見たことのある女が立っていた。

「石上…雫」

俺がボソツと呟くと、男集団の一人がこっちを向いた。

「お前、誰だよ？」

…どうも、俺のことを知らないらしい。

結構有名なんだがな。

「それより、俺の女に何やってんだ？ てめえら」

「こいつ、お前の女なのか。結構美人だから、俺たちが食べてあげようと思っとな」

男集団の一人がそういうと、周りの奴等も一緒になって笑っていた。

雫のほうに目を向けると、少し目が涙目になっている…気がする。

「とりあえず、その女をこっちに渡してほしいんだけど。」

俺は作りに作った最高の笑みをみせて男たちに言った。

「はあ？ お前は自分の女が食われているのを見ればいいんだよ」

男がそういう終わると、一人は雫を捕まえ、あとの三人は俺に襲い

掛かってきた。

どっかのアニメみたいに、一瞬で三人を滅多打ちに出来れば格好いいのだが、さすがにこれは厳しい。

しかし、負けるわけにはいかない。

多少、ボコボコにされたが、なんとか男たち三人を叩きのめしてやった。

最後は、雫を捕まえている男だが、俺が雫のほうに近寄っていくと、殴りかかってきた。

一人なら問題ない。

相手の拳を軽々とよけて、腹部に一発、顔面に一発パンチを入れて、KOしてやった。

「大丈夫かよ？」

俺がそう言っつて、雫に近寄っていくと、三つ編み、眼鏡っ子モードでは無い雫は、そっぽを向きながら泣いていた。

#05 雫の涙（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#06 感謝してる

あれから、どれぐらい経っただろうか？

そんなには経っていないのだろうけど、どうも雫と一緒に居ると時間が長く感じる。

とりあえず、さっきの場所から移動して、川原で雫と二人きりの俺。脈拍を今測ったら、1分間に100ぐらいは、いっちゃうんじゃないだろうか？

「大丈夫か？」

俺がそう聞いても返事は無い。

聞こえるのは、泣いている声。

やはり、怖かったのだろうか。

「もう安心しろよ」

少し落ち着いたので、彼女はようやく話し始めた。

「わっ、私は…あんたの女じゃない」

助けてやったのに、第一声がそれかよ。

もう少し、ありがとうとか、助けてくれて嬉しかったとか、怖かったよとか言っつて、抱きついてくるとか、何か無いのか？

「そうですね」

俺がそっけない返事をする、彼女は下を向いてしまった。

「たす…く…てかん…し…る」

「え？」

雫は大きく息を吐いてから、少し大きめな声で

「助けてくれて、感謝してる！」

と、言った。

「お、おうよ」

俺はなんだか恥ずかしくて、そっぱを向いて返事をしてしまった。

本当に可愛いと思ってしまふ俺は、馬鹿になってしまったのだろうか。

いや、元から馬鹿なのだが、そういう馬鹿じゃなくて、なんていうかその…

「…ねえ、聞してる？」

「へ？」

「やっぱり聞いてないか」

そう言つて、ため息をついた雫。

「わ、わりい！ もう一回言ってくれ」

「やだ」

「ごめんって！ 本当にごめん！ もう一度だけでいいから言ってくれ！」

俺が手を合わせて、本当に申し訳なさそうに謝った。

俺がそういうと、彼女はクククと言って、笑い出した。

「なんだ、笑えるじゃん」

俺がボソッと言ったのが駄目だったのだろうか、いきなり笑うのをやめて、そっぽを向き歩き出した。

「ごめん！ 本当にごめんなさい！ だから、もう一度言ってくれないでしょうか？」

敬語なんて、何年ぶりに使っただろうか。

彼女は、立ち止まり、こっちを向いた。

「名前は何て言うの？」

「俺の名前？」

俺が聞き返すと、呆れた顔をして雫は言った。

「あんたしか居ないじゃん」

内心、少しイラつときたが、そこは男。我慢だ、我慢。

「池山大地。2年1組の男子生徒だ。」

雫は少し驚いた顔をした。

「そう、あんたが、池山大地だったのね」

そついい終わると、彼女は再び歩き出した。

俺がもう一度、声をかけようとする、再び彼女は止まり振り向いた。

そして、俺の元へと一歩、一歩と近づいてきて、俺の目の前へ立つ。

「今日は、本当にありがとう。大地が来てくれなかったら、私危なかった」

雫が俺のことを大地と呼んでくれたことが嬉しかった。

「私に聞いたよね？」「なんでそんな格好を？」って。……私、ストーカーされたことがある

のよ」

そう、話し始めた彼女は悲しい顔をしていた。

「中学校の時だった。男子からは毎日喋りかけられたし、告白もされていた。中には、まったく知らない人から告白もされたりして。…そんな中、ある事件が起きたのよ」

雫の目から、一粒の涙が零れ落ちた。

「ある日、家の前にクマの人形が置いてあったの。そこには、ストーカー紛いの文章が書かれた手紙もあって。こういうのはたまにあったから許せたんだけど、その日から毎日、無言電話の日々が続いたし、盗撮もされて、ネットに乗せられたりしたの。なにより一番ショックだったのは…」

彼女が最後まで言う前に、俺の体は彼女を包んでいた。

強く抱きしめていた。

「分かった…もう言わなくていい。ごめん、そんな辛い過去を思いださせてしまって」

彼女は俺の腕の中で泣いていた。

俺は心から思った。彼女が愛しいと。

#06 感謝してる(後書き)

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#07 涙の後は

雫の話によると、あの後地元から引越しをして、ここに住み始めたらしい。

そのころから、三つ編みの眼鏡っ子にしたという話だ。

俺にすれば、それでも十分可愛いのだが。

腕の中で泣き止んだ雫は、はつとした様子を見せて、俺から離れていった。

俺は「危ないから」と言い、彼女を家まで送ることにした。

さつきは、買い物に行っていたという。

その買い物袋は、さつきの男たちに追われているときに、どこかに落としたらしい。

雫は「また買えばいいから」と言って、今日は断念した。

家まで送ると、ありがとう。と彼女は俺に囁いて家の中へと入っていった。

驚いたことに、俺の家から雫の家までは10分程度で行ける場所にあったのだ。

俺は少し、まだ腕に残っている雫の温もりを感じながら、家へと足を進めた。

帰る途中、メールアドレス聞いておけばよかった。と後悔したが後の祭り。

明日の朝にでも聞けばいいか。

俺は、誰もいない家のドアを開いた。

「ただいま」と言っても返事は無いこの家。

さっきまでの温もりが一気に冷えたように、少し…少しだけ感じたことの無い、寂しさが俺の心へと入り込んだ。

次の日の朝。

いつもの時間の電車に乗り、再び雫に会えることを期待して学校へと向かった。

すると今日は、電車の中で三つ編みモードの雫を見かけた。

俺が乗る、次の駅から乗ってきているらしい。

「よっ、栗」

俺が彼女のそばに寄り話しかけると、案の定無視をされた。

「おい、栗ちゃん？」

肩をポンポンと叩くと、ようやく俺のほうを向いてくれた。

「気安く名前で呼ばないで」

昨日は俺のことを名前で呼んだくせに。

「で、何？」

彼女は俺を睨み付けるように見てきて、俺はその視線に少しうろたえた。

ビビッたんじゃなくて、照れるほうで。

…睨まれて、照れるなんて俺はマゾっ気があるのか？

いや、殴られるのは好きじゃない。

…これが恋なのか？

「いや、おはようって言いに来ただけなんだけどね」

「そ、おはよう」

彼女はそれだけ言うと、再び俺を見なくなった。

そのまま少し沈黙の時間が過ぎたとき、昨日のメールアドレスを聞く事を俺は思い出した。

「石上、電話番号とメールアドレス教えてくれよ」

俺がそういうと、再び彼女の顔がこっちを向いた。

「な、なんであんたに教えなきゃいけないのよ」

少し驚いた様子の雫。

「俺と、石上の仲だろ？」

「どんな、仲よ」

雫は呆れた様子を見せてから、手をポケットに突っ込んだ。

そういう顔をされると、少し悲しくなるんですが。

「早く携帯出さないよ」

雫がそう言つと、俺はあわてて携帯を出した。

「私が受信するから、送つて」

俺は、赤外線送信できる機能を使って、俺のメールアドレスと電話番号を送った。

携帯をこうやって、向かい合わせにすると、少しドキドキする。

こんな事、今まで無かったのにな。

送信完了の文字が表示されると、彼女はちゃんと入っているか確認のため、携帯をいじっている。

「へえ、大地って私と同じ誕生日なんだ」

「まじか？」

俺が送った情報には、住所や、誕生日なども含まれている。

そうしていると、学校の最寄の駅についてしまった。

「それじゃあ、あとで私の送っておく」

それだけを言って、雫は電車を降りた。

去っていく彼女に俺は少しでも近づきたくなって、少し小走りをして追いついた。

雫と一緒に行く学校が何よりも幸せだった。

#07 涙の後は（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#08 メール

来ない。

何故だか来ない。

学校についてから、家に帰るまでには来るだろうと予想していたのに。

メールが来ない。

そう、メールが来ないのだ。

「メールが来ない！」

俺は学校から家に帰ると、一人で叫んでいた。

学校での俺の行動や言動は明らかにおかしかった。

授業中も、携帯をずっと机の上に出して、雲からのメールを待っていたし、何度もセンター問い合わせをした。

そんな姿を明に見られて爆笑された。

「お前って、分かりやすいなあ！」

「何が？」

「お前、好きな子からのメール待ってるんだろ？ 分かりやすすぎて、腹イテエって。」

ぎやははと、授業中にも関わらず笑い続ける明の頭を殴ってやった。

「いつてえ！」

頭をさすりながら、明は笑うのをやめた。

「でもさ、友達として嬉しいんだぜ？ 友人に好きな子が出ると」

かすかに笑みを浮かべながら、明は俺に言ってきた。

明も、性格はともかく、容姿は悪くない。

服のセンスもあるし、話もうまい。

ただ、性格が少しゃっかいなだけで、一緒に居ると楽しい奴だ。

そんな、明だから結構女からも人気がある。

「なんで、嬉しいんだよ。意味わからねえ」

俺は苦笑いしながら、明に問うと明はさっきと変わらない笑みをこぼしてこう答えた。

「こんな純粋な恋をして、こんな顔をしてると、やっぱり大地は心を持った人間なんだな、って。今まで冷血とまで呼ばれた大地がだぜ？ そう考えると、やっぱり嬉しいんだよ」

俺は「そっか」と答えると、「そうそう」と明が答えた。

「そういえば、どんな子なんだ？ お前の好きな子っていうのは。」

「…秘密だよ。秘密」

「教えるよ」

そんな話をしていると、授業の終わりを示すチャイムが鳴った。

それから一日中、明から質問の嵐だ。

こんなのが、ずっと続いたら、俺は不登校になるかもしれない。

それぐらい、心に悪かった。

家で一人ベッドで横たわりながら、彼女のメールを待った。

夜になっても、来ない。

来ないではないか。

「来なあああい!!」

本日、何度目であろうその言葉を発すると、俺の携帯が鳴った。

携帯の画面を覗くと、そこには明の文字が。

大きいため息をひとつついて、電話に出た。

「なんだよ……」

「うわっ、お前テンション低いぞ」

「…なんだよ?」

「合コンが、今からあるんだけどさ…その様子じゃ来れないよな」

行けるわけが無い。

「ごめんな」

俺がそういうと、明が元気よく「いいてー!」と言ってくれた。

そのまま電話が終わると、俺は枕元に携帯を置いた。

今日は来ないかな。

はぁ…とため息をつく。再び携帯がなった。

「雫か!？」

そう叫んで、携帯を覗くと見知らぬアドレスからのメール。

メールを開くと、メルマガからのメールだった。

「…ぶっ殺すぞ。何度も期待させてやがって」

携帯を折ってやろうかと思ったけど、さすがに出来ない。

「雫…」

俺がそう呟いたとき、再び携帯がなった。

少し期待していたが、内心「来ないだろう」という気持ちが大きかった。

ため息をつきながらメールを開くと、題名の部分に「石上雫」という文字が表示された。

嬉しさのあまり、ベッドで横たわっていた俺の体は、いつきに起き上がる。

メールをあけると、そこには雫のと思われる電話番号と文章が一文だけ表示されていた。

呼び方、雫でいいよ。

と。

#08 メール（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#09 デートの誘い

あのと、俺は雫にメールを返した。

返したところで、メールが返ってくるとは思っていなかったが。

メールを送ってから一時間、少し期待をして待っていたが案の定返ってこない。

諦めて、明日のために寝ることにした。

次の日、俺はいつもどおり彼女に会うために学校へ向かった。

毎日同じ電車に乗っていると言うことも分かったから、毎日学校に登校するのが楽しくて仕方が無い。

今日も、次の駅から乗ってきた彼女を発見した。

「おっはよ」

「おはよ」

今日は無視をしないで、しっかりと返事をしてくれた。

これも、恋成立のための第一歩なのか！？

そんな淡い期待とは裏腹に、そのあとの会話が進まない。

「し、し、し、し、」

改めて、雫と呼ぼうとすると恥ずかしさのあまり、言葉が詰まってしまった。

こんな気持ちになっていることを雫は知らないのだろうか。

そう思うと、少し悲しくなった。

「し、雫？」

名前を呼ぶと、かすかに反応があった。

「何よ？」

「えっと、あのさ」

さて、何を言おう。

計画も無いのに、名前を呼んでしまったではないか。

少し沈黙が続く。

相変わらず、雫は俺のほうを見ない。

「あのさ、今度の日曜日…」

俺は何を言おうとしてるんだ。

5秒ほど時間を置いた後、言葉の続きを言った。

「暇…かな？」

…デートに誘ってしまった。

「何で？」

そこで、何で？ と、きましたか！？

「いや、遊べるかなって」

「何で、大地と！？」

少し驚いた様子の彼女。

それがおかしくて、笑いそうになった。

ここで笑うと、多分機嫌を損ねるんだろうな。

そう思い、笑うのは我慢した。

「いいだろ？ この前助けてあげたよね？」

俺がちよつとした悪戯の笑みをこめて彼女に送ると、雫は少しうろたえていた。

「だ、だから？」

「そのお礼として、俺とデートをしてほしい」

ニヤリと笑う俺に、雫は落胆の表情を見せた。

そこまで落ち込まなくてもいいのに。

「…いいわよ」

「本当に!？」

「嘘…といっても、大地は連れて行くんでしょう?」

そうですよ。

そうですとも。

「まあ、いいわ。日時と集合場所はそっちできめてね」

そういうと、彼女は電車を降りた。

今日は、いつも長く感じる電車が、とてつもなく一瞬に感じた。

改札口を出て、彼女の後ろをついていくと、車はいきなり止まり、俺のほうを向いた。

そして一言。

「この前のお礼だからね!？」

それだけを言って、再び学校へと向かっていった彼女だった。

日曜日は明後日。

大地がこの2日間がとてつもなく長く感じたことは、言うまでもない。

#09 デートの誘い（後書き）

今回は本当に短くて、申し訳ございません。

。。。（泣、）。。。。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq

84 s / mailbox form /
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#10 守ってくれる(前書き)

最近、零のキャラ設定が俺の中で少し変わってきてますorz

#10 守ってくれる

日曜日。

11時に零の家前に集合。

土曜日に俺はそうメールを送った。

とうとう明日か。

そう思うと、今日はなかなか寝付けない。

羊を1300まで数えた所で意識が無くなった。

…やばい。

ただいまの時間、午前10時半。

俺は起床した。

「やっべ！」

時間が無い。

あと20分ほどで家を出発しなければならないのだ。

「なんで、マナーモードになってんだよ！」

俺は自分の携帯にイラついた。

髪の毛を即行でセットし、服を着替え、歯磨きをして、出発。

朝飯なんか食べてられるか。

走って雫の家の前まで行くと、雫はまだ出てきては居なかった。

「…間に合った」

雫の家に着いたときには、11時5分前だった。

息を整えてから、雫にメールをする。

『着いたよ』

それから5分後、11時ジャストに彼女は出てきた。

「…へ？」

俺のどっから出たか分からないような声とともに。

「何よ？」

「何よ…じゃないって、それ…どうした？」

「ど、どうしたって聞かれても…」

俺がどうした、と聞いたわけは雫に原因があった。

だって、ほら、あれ…。

「な、なんで三つ編みモードじゃないんだ？」

そう、今の雫は俺が最初に彼女にあった姿だったのだ。

髪の毛を下ろして、眼鏡をはずし、とっても美人モードの雫。

「なんでって…あんだ、自分が有名って事を忘れてない？」

「へ？」

彼女は意味不明なことを言い出すと、面倒くさそうに答えた。

「私が、学校に行く格好で大地とデートしたら、私目立っちゃうじゃない」

つまり、雫は目立つのが嫌なのだ。

「この姿だったら、学校に行っても誰も私だつてわからないからね。石上大地と何か関係あるのか？ って、最近朋子に聞かれて困ってるんだから」

不貞腐れた表情の雫もまた可愛かった。

朋子というのは、どうも仲のいい友達のことらしい。

俺が定期を渡しに行ったときに一緒に居た人だと説明してくれた。

「まあ、俺だつて最初分からなかったからな。雫のあの変貌振りは」

分かったら駄目なのよ。と彼女は言った。

「でも、大丈夫か？　その姿で外に出るの、嫌がってたじゃないか」

俺がそう言つと彼女は少し俯いて何かを言つた。

それを何か聞き取れない俺は、聞き返すと雫は俺の目を見て今度ははつきりと

「大地が…守ってくれるんでしょ？」

と言つてくれた。

予想もしていなかったその言葉に、俺はかなり戸惑つたが、「当たり前だろ」と答えておいた。

「それじゃあ、行きますか」

俺がそう言つて駅へと足を運ぶと、素直に雫はついてきてくれた。

なんか俺たちカップルみたいだな。と俺が言うと、馬鹿じゃないの？ と素っ気無く言われ

て、ショックを受けたまま目的地である遊園地まで行った。

#10 守ってくれる(後書き)

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#11 初デートの行方1

自慢の彼女…いや、現在は彼女ではないが、女の子を引き連れて、俺は遊園地に着いた。

みんなが、雫を見ているのが嫌でも分かる。

『見るな!』とか言っただけだ。

けど、雫が怒るんだろうなあ。

「どうしたの?」

周りの連中を”無意識”に睨んでいると、雫から声をかけられた。

「いや、なんでもない。早速入るか」

遊園地の中に入ると、懐かしい雰囲気俺を包んだ。

「お〜」

無意識にこぼれた言葉に雫はいちいちつつこんでくる。

「遊園地ぐらいで驚くんじゃないわよ」

そう言い捨てて、彼女はテクテクと歩き出した。

「どこに行くんだ？」

と、俺が声をかけても無視する雫。

「無視されると傷つくのですが。」

率直な意見を述べると、あっさり雫がこっちを向いてくれた。

しかしその目は俺を睨んでいる。

「な、なんだよ」

「何でもない」

再び雫は前を向いて歩き出した。

俺は少し小走りをして、彼女の横へと着く。

こうやって二人で歩いていると、本当に彼氏、彼女みたい…。

マジで嬉しい。

そんなこと言うと、雫はさっきみたいに「馬鹿じゃないの?」と俺を否定してくるだろうが。

それ以前に、雫は俺が雫に恋心を抱いていると言っことに気付いてくれているのだろうか?

「おっ、これ乗ろうぜ!」

俺はそう言って雫の肩をポンと叩き、目の前のジェットコースターを指差した。

「…」

沈黙の雫。

その様子は…まさか…

「ジェットコースター乗れない…?」

俺がそういうと、彼女の顔がギョツとした。

「の、乗れないわけ無いでしょ!」

そう言つて、雫は無意識なのか、意識してなのか分からないが俺の手を掴んでジェットコースター入場口へと歩いていった。

雫の手は暖かくて、やわらかくて、気持ちよかった…と、言えば変態扱いされるのかな。

日曜日と言うのに、あまり人は多くなく、ジェットコースターの順番も2、3度待てば順番がやってきた。

「だ、大丈夫か?」

あきらかに、雫の顔色が尋常じゃない。

やめるなら、今のうちだぞ?

「だ、じゃいじょーぶなの!」

…思いつきり言葉を囁んでいます。

『安全バーをしっかり下ろし、固定してください』

アナウンスが流れると、俺は自分の前にある安全バーを下ろした。
もう一度、雫のほうを見ると、緊張しているのかアナウンスが耳に入っていない模様。

「安全バー」

「…。」

反応が無いので、俺が仕方なく彼女の安全バーを下ろしてあげると、彼女は意識を取り戻したようだ。

こんな様子で大丈夫なのかよ…。

『出発します…』

アナウンスが流れると、ジェットコースターはゆっくりと動き始めた。

初めは坂を上って、落下していくと言う仕組みのジェットコースターだ。

この遊園地ではベスト5に入るような怖さのジェットコースターだろう。

俺は、まったく怖くは無いのだが。

どんとと頂上に近づいていくと、雫の顔が恐怖であふれていた。

降りる3秒前なのか、5秒前なのか分からない。

雫が俺の手をとったのだ。

「し、雫?」

俺がそう問いかけると、ジェットコースターは落下していった。

「怖いなら、言えばよかったのに」

あのジェットコースターも終わり、俺たちは近くのベンチに腰掛け
ていた。

雫の顔は、真っ青だ。

「い、言いたくなかったのよ」

ふっ、強がりやがって。可愛いやつめ。

「はいはい、冷たいジュース買ってきてやるから待ってるよ」

俺はベンチから立ち、自動販売機へと向かった。

#11 初デートの行方1（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#12 初デートの行方2

「えっと、何を買おうかな…」

俺は今、自動販売機である難題と立ち向かっている。

雫の好みも知らないし、何が嫌いなのかも知らない。

炭酸は飲めるだろうか？

ミルクティは飲めるだろうか？

お茶より、オレンジジュースの方が好きなのか。

俺：結局雫のこと何も知らないよな。

1分ほど悩んだ挙句、結局ミルクティとオレンジジュースにした。

どっちも飲めない奴なんていないだろう、という考えだ。

少し遅れたため、少し小走りで雫の元へと向かうと、男子3人組に囲まれていた。

これだから、可愛い奴は可愛そうなんだ。

俺は雫の下へと走った。

「おい！ 俺の女に何の用かな？」

そう言つて、雫と男子どもの間へ入った。

「「「「…へ？」「」「」」

すると、俺と男子3人組の声が重なった。

「え、こんなところで何しているんだよ…？」

「大地こそ…これ、噂の…？」

一番出会いたくない相手と言えば分かるだろうか。

相手はそう…明達である。

「こ、こんな可愛い子だったのかよ」

「うっせ…」

俺の後ろでポカンという顔をしている雫に説明をした。

「えっと…こいつは俺の友達で、明って言うんだ。」

「そっ」

雫は少し不機嫌そうに返事をする。

「じゃ、俺たちは退散するのでしょうか。ごめんね〜！ 大地の彼女さん！」

明は手をフリフリと振りながら立ち去ってくれた。

俺は雫の隣に座り、買ってきたジュースを見せて「どっちがいい？」と聞くと、彼女は即座にミルクティを選んだ。

「だから、私は大地の彼女じゃなくて」

ボソツと聞こえるように言ってきた雫を、悪魔と思った俺はおかしな人間だろうか。

「そうですね」

雫は無言でミルクティを飲み続ける。

「震って、ミルクティ好きなの？」

彼女は正面を向きながら頷いた。

「何で？」

少し考えた素振りの後、彼女は少し微笑んで言った。

「なんか、ほわわんってするじゃない？」

「ほわわん？」

「うん。ほわわん。」

彼女の少し真剣な顔を見ると、俺の心もほわわんとした気がした。

「ほわわん…ね」

分かる気がする。

俺は心の中でそう思った。

「ジェットコースターは駄目なんだよな、とりあえず回る系に乗るか？」

そういうと、彼女の顔がギョツとした。

「無理なのね」

「む、無理じゃないもん！」

「正直に言いなさい」

俺はつよがる雲を抑えるかのように言った。

「雲が楽しんでくれなきゃ、面白くないだろ？ 嫌いなものは嫌いて言ってくれ」

俺は本日最高の笑顔と思われる笑顔で彼女に言った。

「じゃあ、遊園地なんか嫌い。」

そこまで否定しますか。

「…OK」

そう答えるしかなかった俺の心境を誰か受け取ってください。

その後は、適当に時間をつぶすために、飲食店で昼食を取ったり、アーケードゲームなどで遊んだ。

#12 初デートの行方2（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#13 初デートの行方3

「観覧車は…乗れるよな？」

本日の最大のイベント（俺が勝手にきめたけど）の観覧車に乗れるか聞いてみた。

「うん、観覧車は大丈夫」

「じゃあ、乗ろうぜ」

今の時間は、6時を回っている。

彼女は無言で頷き、俺の後ろの服を掴んでついてくる。

あれから、昼を過ぎると、一向に遊園地の人口密度が増え、交差点では彼女を見失ってしまうのではないかと心配になるほどだ。

観覧車の入場口で10分程度待っていると、順番がやってきた。

係員の人に案内をされ、観覧車内へと乗りこむ。

雫と俺は向かい合わせになるように乗合わせた。

本当は、雫の隣に座りたいんだけどな。

観覧車に乗ってから、最初の5分間くらい、沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは、なんと雫だったのだ。

「今日は…」

雫はそこまで言って、言葉を詰まらせた。

「ん？」

「…なんでもない」

そういえば、さっきから外が見たいだけなのか、よく分からないが俺の顔は見ない。

「そんな途中までだと、気になるだろうが…。」

俺は雫の顔をじっと見てみると「そんなに睨むな。」と怒ってきた。

睨んでないのに…。

「わ、私となんかと、デートして何が楽しいの?」

やっと、俺の顔を見てくれた。

「そりゃ、… 雫が面白いから」

俺は笑いながら言うと、ため息をつく雫。

なんでため息をつく必要があるんだ。

「雫は？」

「今日は、災難だったね」

そりゃそうだ。

明に絡まれるし、ジェットコースターに乗らされるし、雫にとって
災難の日だっただろうな。

「…ごめんな」

俺が謝ると、雫は驚いた顔で俺の顔を見てきた。

「な、なんだよ…」

雫は俺から視線をはずし、外を見ながら「別に」と答えた。

観覧車を降りたら、帰宅することにした俺たち二人。

人が多いから彼女は相変わらず俺の後ろの服を掴んでいる。

誰かこの状態を、写真でも、絵でもいい、残してくれないか！

俺自身、さっきから後ろを振り返りたくて仕方ないんだ。

…めちゃくちゃ可愛いんだろうな。

雫の…そんな姿は。

帰りの電車に乗り、雫の家の最寄り駅で降りて、俺は彼女を家まで送ってあげた。

その途中は、さすがに俺の服を掴んでくれなかったけど。

無言のまま歩いてると、彼女の家が見えてきた。

家の目の前に来ると、彼女は大きく深呼吸して、俺の服をちょんちよんと引っ張った。

その行動がとてつもなく可愛くて、抱きしめたくなった…。

「ど、どうした？」

抱きしめたい気持ちを抑えて俺は静かに聞いた。

「…」

なぜか黙っている。

数秒後、もう一度大きく息を吸って吐いたかと思うと、何か言い出した。

「か、観覧車の中では、さ、災難とか…言っただけど、本当は……」

た、た、たのしかったよ」

雫はそう言って、俺の言葉を待たないまま、家へと入って行ってしまった。

「そ、そうか…」

俺がそう呟いたときには、家のドアは閉まっていた。

#13 初デートの行方3（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#14 初デートの行方4

し…心臓に悪いって…。

デートの帰り道。

10分ぐらいの道のりなんだけど、その帰り道は今日あったことで、頭がいっぱいだった。

雫と出会い、雫と語り、雫と喋る。

そんな一日を振り返っていると、ニヤニヤがとまらなかった。

特に…最後の…

あの、恥ずかしがり方は、俺の心臓に悪すぎる。

あと数秒、雫が家に戻らなければ、俺の理性はふっとんでいただろう。

今より仲を悪くしたくないからな…。

「けど…あれは、可愛かったなあ…えへっ…えへへ」

独り言を言ってしまった。

気持ち悪い…俺。

あれこれ、考えていると、自分の家を通り越していることに気づいた。

「…馬鹿か俺は」

ため息を大きくひとつついて、自分の家へと足を運んだ。

翌朝。

今日も、いつもどおりに彼女が乗るであろう、電車の時間に間に合った。

最近、学校に行くのが、楽しくて仕方ない。

前までは、あれだけ行くのを嫌がって居たのに。

…恋って、素晴らしいね。

「何を、馬鹿なことを呟いてるんだろうか、俺は」

「何が？」

後ろから、ふと声がかかった。

「お、おはよう。今日もいい天気だね」

三つ編みモードの雫だ。

「…私の質問は？」

「え？ あゝ…最近学校に行くのが楽しいなって、心の中で呟いたのさ」

「何で、学校が楽しいの？」

「何でって…そりゃ…」

雫と会えるからに決まってるじゃん。

けど、さすがにそんなこと言えないよなあ…。

「そりゃ？」

そんなに、問い詰めないでくださいませ、雫様…。

「…無視する気？」

「いやいや、そういうわけじゃないけど…」

俺の顔をめったに見ない雫が、今日はやたら見つめて…いや、これは睨んでくるといった方が正しいか。

「言えないような事なの？」

「えっと…」

そりゃ、そくに決まってるだろ！

この鈍感女。

「…勉強が楽しいの？」

「…は？」

「それとも好きな子が居るとか？」

…もしかして、俺が雫のこと好きなのを知ってて、それを俺に言わせようとしてるのか？

いや、そうに違いない。雫も俺が好きで、それで告白してほしいんだ。

俺に鎌を掛けてるにちがいないだ。

「そ、それは…」

俺が、『雫が好きだから!』と言おうとした瞬間、雫は言葉を挟んだ。

「あんたでも、好きな子いるんだね。」

そう言って、彼女は俺から視線をはずし、再び黙った。

…一瞬でも期待した俺が馬鹿だった。

そうですね。この雫がそんな回りくどいことをする訳がないよね。

はは…はは…泣きたくなるよ。

「乗り過ぎしたいの?」

雫の声で、我に戻してみると、電車は学校の最寄り駅についていた。

「あ、降りる」

そう言って、俺は雫の下へと歩み寄った。

…もちろんのように、雫は俺のことを無視するかのように、歩いていったが。

#14 初デートの行方4（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#15 学校での俺たち

「おい、大地。あのチヨオオオオオ可愛い子は誰なんだ」

学校に着くと、明にいきなり質問をされた。

まあ、予想はしていたが。

「誰って、噂のあの子って言っただろ」

そんな恥ずかしいことを何回も言わせるな。

「どこの学校の子だよー!」

「…秘密。」

俺と関わってるって事を知られたくないから、あのばれない格好にしたんだからな。

学校名まで言ったら、絶対明のことだから、名前まで聞いてくるだろう。

明のしつこさは、天下一品だからな。

学校でも結構有名な俺の昨日の出来事は、学校中に知れ渡ることになった。

話に聞くと、写メまで出回っているらしい。

…あの雫の本当の姿を知っているのは俺だけで十分なのに。

みんなが知っていると、少し嫉妬心が沸いてきた。

「だ、大地先輩…」

廊下を歩いていると、下級生と思われる女の子に話しかけられた。

「どうした？」

俺は優しい声で聞いてあげると、女の子は少しびくびくしながら

「き、昨日の人は、彼女なんですか？」

と、聞いてきた。

恥ずかしがっていると言うより、怖がっている様子。

この様子からすると、脅されたか、何らかの手段で、どっかのケバイ女から聞けと言われたんだろっな。

「…違うよ。友達さ」

俺は、優しく微笑んで答えてあげると、彼女はそそくさと立ち去ってしまった。

「可愛そうに」

そう呟き、再び歩き出した。

俺が、今向かっている場所は、2年職員室。

先生に呼ばれたのだ。

…別に悪いことはしてないぞ。

職員室の前まで来て、ドアを開けようと手を掛ける前にドアが開いた。

俺の目の前には、雫が居た。

「し、雫」

ビックリして名前を呼ぶと、目で『何?』と訴えているようだ。

「何かやらかしたのか?」

「あんたとは、違うから」

「…そっか」

俺は、雫の横を通り抜けて、職員室へと入ると、後ろで教師と雫がなにか話し始めた。

「池山なんかと関わっているのか? 石上は優等生なんだから、あんな池山なんかとは関わりなんか持たないほうがいいぞ。変なことをしているんじゃないかって、他の先生に疑われるからな。」

ハハッと笑いながら言う先生のその言葉に、俺の頭の中にある何か、プチッと音をたてる音が聞こえた。

「デメエ…」

俺が、その先生に近寄ろうとしたとき…

「…先生は大地の何を知って、そう言っているのでしょうか？ 私は、貴方なみたいなお人にはなりたくありません。先生を見損ないました」

雫が先生にそう言ったのだ。

先生も驚いたのだろう、目が点になっている。

「僕は、石上のことを思ってた…」

何かをいい続けようとする先生を思いつき雫は睨んだ。

そのまま、その場から立ち去ったのだ。

「し、雫…」

雫の言葉で少し心が安らいだ。

しかし、先生の言う事は間違っていない。

分かっているんだ。

俺は、雫には相応しくないと。

毎回成績上位を取り続けている優等生の雫と、ここまで落ちこぼれた俺とは不釣り合いなのだと。

分かっていたんだ。

だからこそ今まで雫には何も言っていなかった。

分かっているけど……離れられたかったんだ。

だって、俺……雫の……事が……好きだから。

愛しているから。

#15 学校での俺たち（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#16 大地の心の揺れ

あのと、職員室で先生の説教をくらった。

どつかのおばさんが、ゲームセンターで俺が他校の不良と喧嘩をしているところを見て、学校へ通報があったらしい。

余計なことしやがって。

謹慎は免れて、厳重注意だけとなった。

しかし、その説教も、俺の頭を素通りしていった。

さっきの、あの事が頭から離れないために。

教室での俺も自分でも分かるくらいおかしかったのだ。

自分の席を間違えたり、明の呼びかけも耳に入らなかったり。

あんな些細なことで…俺がこんなふうになるなんて。

そこまで、俺の中で雫の存在は大きくなっていた。

「馬鹿みてえ…」

家に着き、ベッドの上で一人、腕で目を隠しながら横たわっていた。

むしゃくしゃする。

心が騒がしい。

ベッドから飛び起きると、明に電話をしてゲームセンターへと足が向かった。

時代遅れの商店街の中に、ポツンとある古びたゲームセンター。

周りにはイチャイチャしているカップルや、不良が煙草を吸っている。

こういうときは、ぱつと遊ぶのが一番だ。

そんなことを考えていると、明たちがやってきた。

「よっ！ 明」

「どうしたんだよ？ お前から遊びに誘うとか珍しいな」

「ちょっとな」

俺は満面の笑みを向けて、明と会話をした。

楽しもうとした。

しかし、その雰囲気に加える男が俺に近寄ってきたのだ。

「よお、大地じゃないか」

そこに居たのは、俺が今日先生に説教をくらう原因になった喧嘩でボコボコにした男と、仲間であろう3人の不良だった。

俺がボコボコにしてやった奴の名前は山井隆一。俺に恨みを持っている不良の一人だ。

「どけよ。気分が悪くなる」

俺はそう言っ、隆一の隣を通り抜けようとした。

「そっいえば、お前の女見たぞ」

その言葉で、俺はビクツツと体が反応し、歩くのをやめた。

「可愛いなあ、お前の女。…探して俺が食ってやろうか?」

俺はケケケと笑いながら言う隆一の胸倉を掴んだ。

「てめえ、そんなことしやがったらぶつ殺す。」

隆一を睨んでいると、後ろから明の声が。

「大地やめろ！」

多分、数的不利だから、手を出すんじゃない。という意味だろう。

「あの池上大地も、あの女が絡むと、ただの男か。これで食うのが楽しみになっただぜ」

大声をあげて、笑う隆一に俺の怒りが頂点へと達し、ドン！という音と共に、隆一は吹っ飛んでいった。

「いつてえなあ！」

隆一は、体を起こし俺に殴りかかってきた。

それをまともに食らう俺。

4対2の喧嘩が始まった。

周りには、野次を飛ばす高校生。

俺は無我夢中で、隆一達に殴りかかった。

相手は喧嘩慣れしてるだけあって、この前のレイプ未遂野郎なんかよりよっぽど強い。

そして数10分後、俺たちの喧嘩は終わった。

「ぐはっ」

冷たいコンクリートの上に倒れる俺。

その隣には明が居た。

隆一と、その仲間は、俺らの少し向こうで同じように横たわっている。

ははは…身体中いてえ。けど、骨折はしてないみたい。

「あき…ら」

はあ、はあ、と少し息の荒い明の下に体を起こして近寄った。

「大丈夫か？」

俺がそう聞くと、明はエヘへと笑いながら頷いた。

「骨折はしてないか？」

「大丈夫だと思う…。」

そついいながら、体のあちこちを確かめる明。

「ごめんな…」

俺が下を向いて謝ると、明はいつもの元気な声で

「なんで、謝るんだよ。俺たちは心友だろ？ お前がムカつく事を言われたときは、おれだってムカつく。俺がお前の立場でも、あいつを殴ってたと思うよ。だから…泣きそうな顔して謝るなよ。神崎高校の池上大地だろが」

「そうだな…」

分かればよろしい。と言って、エヘへと笑う明に俺は肩を貸した。

#16 大地の心の揺れ（後書き）

心友という言葉を使ってみました。
友達がよく『心友』という言葉を使うので…。

特に深い意味はありません。
親友とってもらっていいです。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#17 自宅謹慎

あのあと、俺は学校から一週間の自宅謹慎と告げられた。

明はどうかやら嚴重注意だけですんだらしい。

「はあ……」

そして、今日は謹慎最終日。

俺はベッドの上で寝転んでいた。

今回の唯一の救いは、退学にならなかったこと。

あれだけ、派手な喧嘩をすれば退学になってもおかしくないのだが、今回は“リンチ”された

と言うことになっていたらしい。

それでも、喧嘩は喧嘩と言うことで、俺には一週間の自宅謹慎ですんだのだ。

朝8時ごろにおきて、毎日2回学校から電話に、面倒ながらも応答する。

そんな毎日の中、俺にある一通のメールが届いた。

「お、誰だ？」

どうも、こんな生活をしていると、独り言が多くなるらしい。

携帯を手に取り、メールを開いてみると、そこには『石上雫』の文字が。

「…雫！」

俺は嬉しさのあまり、ベッドから飛び起きて、その辺をつろつろしながらメールを読んだ。

『家どこ？』

雫からのメールはずいぶん短かった。

なんで、雫は俺の家なんか知りたいんだ？

まさか、見舞い！？

それとも夜這い？

いや、後者は無いな。前者も…ないけど。

俺は自分の住所と、分かりやすい説明文を加えて、返信をした。

それから20分後、メールが返ってきた。

『今日、行くから』

…何で？

もしかして、喧嘩でボコボコにされたのを知って見舞いに来てくれるのか？

まさか…あの雫が？

いや、もしかしたら雫は…。

色々妄想を膨らませ、俺はたまらず、雫の今までのメールを保護した。

それにしても、あの雫に会えるのが楽しみで仕方が無い。

俺は、自分の部屋から出て、髪の毛、服装、その他身なりを雫に会っても恥ずかしくないようにセットをした。

夕方4時ごろ。

そろそろ学校も終わり、雫が家に着く時間帯だろう。

そこから10分程度だから…

結局俺は3時過ぎから玄関で雫が来るのを待っていた。

学校が終わるのが3時半と言いつのに、馬鹿か俺は。

そして、4時17分。家のインターフォンがなった。

俺は、何も言わずに、玄関のドアをあけると、そこには美人モードの雫が居た。

「し、雫…」

7日ぶりに雫に会った俺は、彼女を抱きしめたい衝動に襲われた。

「大地が自宅謹慎になったって聞いたから」

「とりあえず…入る？」

「いや、いい」

速攻断られましたとも。

「えっと…今日はどうしたの？」

俺はビクビクしながら聞くと、雫はかばんに手を伸ばし、何かを取り出そうとしている。

「この前さ…学校に行くのが楽しいって言ってたじゃない？」

「うん」

それは、雫が居るから。

すると雫のかばんから出てきたものは、なんと…

「はい、自宅謹慎だと、まともに勉強できないでしょ？ だから、ノートをコピーしてきてあげたの」

ノートのコピー用紙だったのだ。

「…なんでこれ？」

「何でって、勉強が好きなんでしょ？」

至ってまじめな顔だ。

もしかして、この子は本気でそう思っていたのだろうか。

「この前、言ってたじゃん」

本当に彼女はまじめな顔だ。

確か、この前の電車ときは『好きな子が居る』でまとまった気がするのだが。

とりあえず、雫に反論するのは面倒そうなので…

「え、あ…うん。ありがとう」

そういつて、コピー用紙に手を伸ばした。

雫の文字は、綺麗と言うより、可愛かった。

「字、読めなくても文句言わないでね」

そう言つて、彼女は俺家を後にした。

このコピー用紙が、俺の宝物になったことは言わなくても分かるだろう。

#17 自宅謹慎（後書き）

自宅謹慎というものは、自分も回りもなったことがないので…。

半分以上というか、ほとんどが想像です。

ハイ。

先生に聞くのもなんだと思ったので、想像で許してください。。。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailboxform/

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しく願います。

#18 守れなかった（前書き）

暴力シーンが含まれて居ます。

苦手な人は、ご遠慮ください。

…よく考えてみるとそんなに入ってないか。

#18 守れなかった

雫が帰って、俺はベッドの上で雫の文字と睨めっこをしていた。

これが、雫の文字か。

「可愛いなあ……」

雫のことを思い浮かべると、笑みが勝手にこぼれる。

重症だな、こりゃ。

エヘへと笑っていると、携帯がなった。

画面には『石上雫』の文字が。

どうしたんだろう？　　と思い、電話に出る。

「もしもし。何かあった？」

雫から電話がかかってくるとか、もう人生に無いことだろう。

しかし、俺のその気持ちとは裏腹に、予想もしていなかった声が聞こえた。

『大地』

その声の持ち主は、最近聞いたことある。

「…隆一」

何故、この電話番号から、隆一の声が…。

…最悪だ。

あの隆一に、雫が拉致されたのか。

『女を助けてほしかったら、今すぐ高杉工場に來い』

そういうと、電話はプープーと音を立てて切れた。

「くそっ！」

俺は携帯をポケットに入れて、家を飛び出した。

原付バイクにまたがり、高杉工場へと向かう。

確か、あそこは廃工場だったはず…。

雫の安否が気になり、スピードをあげた。

高杉工場に着くと、俺は原付バイクを適当に駐車して、入り口を探した。

すると、人が4人ほど並んで通れそうな大きなドアがあった。

その奥に、隆一が居ると思われる。

意を決して、ドアをあけると、そこには予想通り隆一と大勢の不良集団が。

「おい、雫は？」

そう問いかけると、隆一はニヤリとしながら指差した。

その先には、雫が柱に縄で縛られている。

あの様子だと、まだ何もされていないようだ。

俺は無意識のうちに、雫のほうへと走り出そうとしていた。

「待てよ」

隆一のその声で、我に戻る。

「あれは、後のお楽しみだ。お前をボコボコにしてから、あの女をお前の前で犯してやるよ。」

「テメエ…ぶつ殺す」

ざっと見る限り、相手は10人以上。

こんなの、俺一人じゃどうにもできない…。

けど…けど…雫を見捨てるわけにはいかないだろ。

隆一の合図とともに、十数名の中の4人が俺に殴りかかってきた。

最初の一発、二発、三発はよけたものの、攻撃が出来ない。

すると、四発目で俺の腹部を、相手の蹴りが直撃した。

「ぐはっ」

俺は、倒れそうになったその体を、無理やり立て直す。

「デメエら…ぶっ殺す…」

容赦なく4人からの攻撃が。

反撃をするものの、4対1という数的不利はなんとも否めない。

くそっ。

守るって…約束したのに。

俺はそれでも、殴り続けた。

ボコボコにされながらも、4人を倒し、前へと進んだ。

「大地…もうやめて…」

泣きながら訴える雫。

泣かしたのは俺なのか。

雫を…泣かしたのは俺…？

「雫…泣くな。大丈夫だから…」

強がってみても、どうしようもないのは分かっている。

「テメエ…殺す！」

俺が隆一の方へと走って行っても、その前に居る野郎どもに殴られてしまう。

くそ…くそっつ…！

「雫…は…おれ…が…ぐはっ！」

倒れたところに蹴りを食らわされた。

もう…駄目なのか？

「大地…」

涙を流している雫を俺は守れないのか…。

そう思ったとき、工場入り口付近で、声が聞こえた。

「…あ…きら」

明と、その他大勢の俺の知り合いが、工場の中へと入ってきたのだ。

「大地、大丈夫かよ。電話に出ないと思ったら、先回りされていたのかあ」

いつもの笑みで俺に話しかけてくる明。

「明…」

「まあ、あとは任せとけてー!」

そう言って、明グループと隆一グループの喧嘩が始まった。

俺は、なんとか立ち上がり、雫の下へとフラフラになりながらも歩いていった。

「雫…」

雫の下へと行くと、俺はまず縄を解こうとしたが縄が外れない。

握力が無い…。

早く、ここから逃がしてあげたいと思っただけなのに、焦って何も出来なくなる。

「ごめん…雫…ごめんな。俺の…せいで…怖かっただろ…ごめんな…」

涙を流しながら訴える俺に、雫は何か言葉を掛けた。

それを何かは覚えていない。

俺の記憶は、ここで無くなっていたから。

#18 守れなかった（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|toki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#19 彼女の正体、俺の過去

気がついたら、俺は自分の家のベッドの上に居た。

「し…雫!」

俺はそう叫んで、飛び起きた。

「痛え…」

体中にビビビと何かが走ったのだ。

「大地、体を起こすな」

そういったのは、明。

どうやら、看病をしてくれているらしい。

「…雫は?」

「そこで寝てるよ」

明が指差したのは俺の足元。

そこにはベッドの横にある椅子に座り、ベッドの上に置いた腕を枕にするように寝ている雫の姿が。

その寝姿が、可愛くて愛しくて…

「彼女、お前の傍から離れなかったんだぜ」

明がボソツという言葉に、俺の顔はハツとした。

雫が…。

心配してくれたのか？

そういえば、あの後どうなったんだ？

体中痛いながらも、雫下へと歩み寄ったのは覚えているのだが、そのあとの記憶が…。

「あのあと…どうなった？」

俺は自分の記憶が整理できないまま、明に喧嘩の事を聞いた。

明の話によると、隆一グループは明グループにボコボコにされたら

しい。

「まあ、あいつ等もレイプまではいかなかったが、女の子を拉致したから、俺たちにやられたなんて警察には言えないだろう」

との事。

「大丈夫。俺たちが何か責任を負うようなことは無いよ」

ニヒツと笑いながら言う明に俺は素直に「ありがとう」と答えた。

明たちが何故、高杉工場に明たちが現れたかという、俺達の知り合いが、写メの子を隆一に拉致されたのを見て、明に報告したということだ。

明が俺に電話しても繋がらないことで、状況がヤバイということに気付き、隆一グループのたまり場である高杉工場へと集団をつれて向かってくれたと言う話だ。

あと少し遅かったら、本気で危なかった。

「ありがとう…明…」

泣きながら明に言うと、頭をポコンと叩かれた。

「俺たち、心友って言っただろ。な？」

明の優しさに触れて、涙が止まらなくなった。

何より、雫が無事でいてくれて、嬉しかった。

「…なあ、大地。この子の名前って確か…」

そこまで言って、言葉に詰まる様子を見せる明。

明になら言ってもいいかもしれない。彼女の本当の姿。

正体を。

「石上雫って言うんだ。 3組の…」

「やっぱり。あの、天才少女だろ？」

天才少女…そこまで言われてるのが、雫は。

「らしいね。」

「まさか、あの地味な子がこんな…可愛かったなんて。」

じつと明は俺の足元で寝ている雫を見つめる。

「おい、惚れんなよ?」

容姿では勿論、性格でも明には勝ち目が無いからな。

「それにしても、変貌って言うのは怖いな。眼鏡をはずしたら、かわい子ちゃんでした! って、いうのはアニメの中だけの話だ…。まあ大丈夫だって、友人の彼女に手を出すような事はしませんよ」

「か、彼女じゃないって!」

俺がちよつと大きめな声で言うと、明の表情が固まった。

「え…まだ片思いなのか?」

明のその言葉に顔がカアと赤くなるのが分かった。

「大地が、そんな風になるのは、由梨先輩以来だよなあ」

そこまで言って、明の顔がハツとなった。

「うん、ごめん…」

明は俺に謝り、俺は気にするなと声をかけた。

由梨先輩。

谷口 由梨と言って、俺の中学校のときの彼女だ。

俺が中2、由梨は中3だった。

愛を味わって、心が満たされていた。

由梨がいれば何もいらないうほに彼女を愛していた。

一緒に涙し、一緒に愛を育み、一緒に笑いあい…。

あの日、由梨が居なくなるまでは…

俺は本当に幸せだった。

#19 彼女の正体、俺の過去（後書き）

元力ノ出現ですね。

これもベタな展開です。

今回は、由梨と大地のお話。

…次回題名が「由梨と大地」です…。

そのまんまじゃんとか思いました？

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しく願います。

#20 由梨と大地

由梨に会うまでの俺は、荒れ果てていた。

喧嘩の毎日。

他校の不良や、高校生に絡まれては、ボコボコにして警察沙汰に何度もなったりしていた。

そんな毎日だったのに。

由梨に出会うまでは…。

あの日は確か、中学1年の時だった。

俺は金髪だったために、学校の先輩の反感を買い、先輩達に体育館裏に連れて行かれて、集団リンチにあい、地べたに倒れていたときの話。

「君、怪我してるよ！？ 大丈夫？」

女の声が、空のほうから聞こえた。

「ほら、早く保健室に行こう！」

俺は女の伸ばす手をはらい、自分で立とうとした。

「いてて…」

結構痛めつけられていたので、身体中が痛い。

「ほら、無理しないで。保健室行こう。」

そう言う彼女に、強引に保健室へと連れて行かされたのだ。

「センセイ！」

彼女の呼びかけに答える声は、保健室にはなかった。

「あれ、いないのかあ…仕方ないな」

そう言って、保健室の奥においてある椅子に座らされた。

「大丈夫、安心してね」

彼女は少し緊張した面持ちで、消毒液などを取り出し、俺の傷口にあててきた。

「いてっ！」

俺がそう言つと、おきまりの「男の子でしょ？ 我慢なさい」と共に、優しく微笑んでくれたのだ。

その微笑に、俺は不意にも恋に落ちた。

これが、俺と由梨の出会い。

俺の心動かす出来事だった。

その日からというもの、俺は金色だった髪の毛を校則通りの黒髪に戻し、優等生となった。

そして、彼女を見つけると声を掛けるといふ、恋真最中の俺だったのだ。

名前を聞いたのは、初めて会ってから1ヶ月も後だったっけ。

由梨は毎日話しかけてくる俺に嫌な顔をひとつせず、優しく接してくれた。

周りの評判が落ちようが関係なく、一緒の時間をすごしてくれたのだ。

中学校2年生になり、彼女を初のデートに誘った。

いいよ。と返事がきた時の俺の喜びようは、周りから馬鹿呼ばわりされるほどだったのだ。

そして、初デートにて、人生初の告白。

由梨とはじめてあった時から好きだったことを述べると、「私もあの時好きになったよ」と笑って答えてくれたのだ。

心の高鳴りは、今までの人生にないほどに高まって、『もう死んでもいい!』って言う奴の気持ちに初めて分かった気がした。

俺の由梨への愛の大きさは、学校でも『バカカップル』と有名になるほどだった。

毎日、由梨にヒョコヒョコついているペットみたい。と、由梨の友達に言われたもんだ。

「由梨大好き!」と俺が言えば、彼女も「大地大好きだよ」とギョッ抱きしめてくれる。

そんなバカカップルの毎日が、俺にとっては幸せだった。

愛を知らなかった俺には、初めて感じた愛だったのだ。

なのに…どうして…。

あんなに大事なことを…俺に言わなかったんだ。

あれは…12月31日の真夜中。

由梨と一緒に初詣に行くために準備をしていると、俺の携帯に着信が入った。

その着信音は、彼女から電話がかかってきたときの音楽。

俺は携帯を手に取り、電話に出た。

「由梨どうした〜！ 少しでも遅れたって構わないぞ？」

俺は笑いながらそう言う。

しかし、いつもの楽しそうな返事は返ってこなかった。

むしろ、俺の耳には由梨の泣き声が耳に届いた。

初めて聞いた、彼女の泣き声。

俺は、その時背中に何か冷たいものを感じた。

「ど、どうした…んだよ」

言葉に詰まりながら俺が聞くと、少し時間が経った後、彼女はエヘへと笑ってやっと喋りだした。

「大地ごめんね〜！ 今日さあ、いけそうにない…」

その声は、自分の感情を押し殺しているような声だった。

「由梨…何かあったのか？」

「大地い…私のこと、忘れてね」

由梨はいままで溜まっていた感情が、あふれ出すかのように泣き出した。

「お、おい…どうしたんだよ。」

「だ…だいぢい…ごめんね…わ、私の事忘れてね…。大地い…大好きだよ」

その後携帯には、プープーと言う音が鳴り響いていた。

忘れてって…？

どうしたんだよ…由梨！

俺はたまらず家から飛び出して、由梨の家へと向かった。

その間、何度も由梨の携帯に電話をかけているが、電源が入っていないみたいだ。

約5分で着く彼女の家には、人影が見当たらない。

庭に侵入し、家の中を覗くが誰も居ないみたいだ。

由梨の家の外を探索していると、後ろから声をかけられた。

「ぼっちゃん、ここの家の人と知り合いなのかい？」

黒いスーツで身をまとっているヤクザ風の男の人が2名ほど。

「は、はい」

そう答えると、彼等はフツと笑って、由梨の家の人たちの話を話し始めたのだ。

「この家の人はね、うちに１０００万の借金があつて、返せなくなつて夜逃げしたんだよ」

よ、夜逃げ？

１０００万？

状況を把握できていない顔を見たのか、彼等は言葉を続けた。

「だから、ぼっちゃん。この家の人はもう戻つてこないんだ」

ハハハと笑いながら、彼等は去つていつてしまった。

…そんな馬鹿な。

もう、戻つてこない…だと？

由梨が？

俺の下へ？

戻つてこない？

俺の抑えきれない感情は、由梨が俺を置いていったという憎しみ、怒りへと変わってしまった。

冬休み明けの始業式にはやはり……由梨の姿は無かった。

#20 由梨と大地（後書き）

とうとう、大地の元力ノ登場です。

（・・。）（- -。）（・・。）（- -。）うんうんw

もっと早い段階で出したかったです…。

まあ、この段階で来ました。

けど、この話は俺の文章能力の無さを表す回になってしまいました。よろしければ、もっとこうしたほうがいい。などの意見を募集しています。

net|toki|net@yahoo.co.jp

のメールか、評価等をお願いします。

#21 大地と雫

「だ…いち？」

その声で、俺は過去の記憶の瞑想から、現在へと引き戻された。

どうやら足元に居る、雫が起きたようだ。

「雫…起きた？」

雫は、目をゴシゴシしながら「寝ちゃったのか」と呟く。

「雫、ごめんな…」

俺のせいで、雫にあんな危ない目をあわせてしまった。

俺なんか…雫の傍に居る権利なんか無いんじゃないのか？

雫と関わってはいけなかったんじゃないのか？

俺は…人を…好きになっではいけなかったのではないだろうか。

下を向いて落ち込んでいると、足に衝撃な痛みが走った。

「いつてえ！」

足をさすっていると、雫は笑いながら

「こ、これで許してあげる！」

そして、雫はまた顔をそらす。

どうやら、雫が俺の脚に自分の手を振り下ろしたようだ。

「…うん」

俺は素直にうなずき、雫はその場に立ち上がった。

そのまま立ち尽くしている。

どうしたのだろうか？ と見ていると、彼女はこっちを振り向いて「あ、歩けないのか…。」と下を向いて呟いた。

…あゝ、家に帰るから送っていけと。

分かりにくいアピールの仕方だなあ。

「送っていくよ。ちょっと待ってて、着替えるから」

そう言っ、俺は自分の服に手を伸ばす。

さすがにボロボロの服で行くわけにもいかない。

時間を見ると、もう8時を回っていた。

服を手に取りながら、俺は少しの間雫のほうを見て少し止まってみる。

雫は俺と目があうと、『何?』みたいな顔をしている。

気付いてないのか…。

俺はおかしくなっ、雫の顔を見てフツと笑ってしまった。

「何よ?」

雫は本当に分かっていないみたいだ。

俺が、服を持っ、着替えると言っのに、この空間に居る事の意味が。

俺はおもむろに服を脱ぎだした。

すると、彼女はハッとして後ろを向いた。

やっと気付いたか。

俺は服を着替え終え、雫に「行くぞ」と言うと、彼女はこっちを振り向いて俺についてきた。

明は、気を利かせたのか、俺たちと一緒に家を出て、一人で帰っていった。

10分程度の道のりで着く雫の家。

その間、無言のままで隣同士歩く俺たち。

沈黙をやぶったのは俺のほうだった。

「俺……」

このまま、雫の傍に居ていいのかな？

そう聞こうとして、やめてしまった。

「何？」

案の定、雫は俺の中途半端な言葉に、問いをかけてくる。

「いや、なんでもない。」

「気になるから、言いなさい」

「なんでもないって。」

「なんでもないなら、言えるでしょ？」

「言いたくない」

「怒るよ？」

「…ごめん」

「何が」

「今日」

「それは、さっき許したでしょ。いつまで引きずっているのよ。馬鹿じゃないの？」

うつ、好きな人に馬鹿じゃないの？　って、言われると傷つくのですが。

「…俺さ、雫の傍に居ていいのになって」

「はあ？　何それ」

「また、今日みたいなことがあるかもしれない」

俺は、雫に相応しくないから。

雫は言葉を返せないまま黙ったままだった。

…と言うか、俺ってあっけらかんとすごいことを言ってしまったのではないのか？

『傍に居る』とか…。

そう思うと、顔が赤くなってきたのが分かる。

外が暗くて本当によかった。

雫の家の前まで行くと、雫は家へと入っていきこうとした。

…が、そのまま俺の方へと振り向き、こう言ったのだ。

「あ、あ、明日…いつもより三本早い電車に乗っていくからね！」

俯きながら言う雫は、本当に可愛かったのだ。

その言葉は、傍に居てもいいと言う意味なのだろうか。

それとも、気まぐれで言っただけなのか。

俺は「わかった」と呟いて、「おやすみ」と雫に手を振った。

雫も「おやすみ」と言って、家に入ってしまったのだ。

俺の足は来た道へと進みだした。

10歩ぐらい歩いたところだろうか、後ろからガチャっという音が聞こえて、何かがこっちへと走ってきた。

雫だ。

「どうした？ 忘れ物か？」

俺は、雫を見ながらそういうと、雫は首をブンブンと振った。

「ち、違っの…その…えっとな」

雫は何かを言おうとして、詰まっている様子。

そのときも、俺の顔を一度も見ようとはしない。

俺は、雫が何か言うのをじっと待っていると、「なんでもない！」と言って、彼女の家へと戻っていきこうとした。

「なんだよ！ 気になるだろ」

俺は雫の腕をつかみ、戻るのをとめた。

そうすると、雫は下を向きながら言葉を発した。

「だ、だ、大地が…ま、ま、ま、守ってくれる…んでしょ？」

その雫がとても愛しくて、離したくなくて…ギュッと、抱きしめてしまった。

「だ、だい…ち」

その言葉で我に戻った俺は、雫をパッと離れた。

「ごめん…」

俺は謝り、彼女は下を向いたままだった。

『バイバイ』も言わず去って行った彼女を、俺は追いかけることができなかった。

#21 大地と雫（後書き）

大地と雫の…（。、・、・）ンーw

雫は、大地の名前を呼ぶのは恥ずかしい…という表現の仕方w

ちょっとばかり、雫はツンデレ希望です（、・、・、）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailboxform/

で、匿名でのメッセージもできます。

どうぞ宜しくお願いします。

#22 テスト勉強1

帰り道は、雫の温もりを感じながら歩いた。

しかし、雫にあんな事をしてしまったから、明日は何を言われるか……いや、もう話してくれないかもしれない。

そんなの嫌だ。

後悔なんてしたくないけど……今回はかりはやっちまった。

家に着いて、ベッドにもぐりこみどうしようかと考えていると、そのまま寝てしまっていた。

次の日の朝、何故か目覚めがよく、目覚まし時計をかけていないのに、いつもより三本早い電車に乗るには、十分な時間だった。

学校の支度をして、今日は雫に無視される覚悟で学校へと向かった。

三本早い電車は、同じ学校の人が全くと言っていいほどいなくて、神埼高校の制服を着た三つ編みモードの雫を見つけるのは容易かった。

「お、おはよう」

俺が声をかけると、やはり無視された。

「昨日は…その…抱きしめたりしてごめん」

俺は素直に謝ると、雫はこっちを向いて

「あんなの私が気にするほどでもない」

と言った。

『あんなの』と言われると、少しショックだったが、話をしてくれたのでよしとしよう。

「そつえば、今日はなんでこんなに早いのか？」

家の学校は都会とはお世辞でもいえない場所にあるために、電車三本という1時間以上時間が違ってくるのだ。

「知らないのか？ 今日から期末テストなのよ」

「え、マジか」

テストと言う悪魔が、今日からだったとは。

自宅謹慎が解けて、初日にテストとは…やってくれるな、あの先生。

「私は、勉強しなきゃいけないからね。そういえば、大地はテスト
どうなのよ？」

そういえば、この前の中間テストのときに、4科目赤点だから期末
のテスト頑張らないと留年…とか言われたな。

そのことを雫に話すと『なにこいつ、馬鹿じゃないの？』みたいな
顔をしていた。

「…はあ、一緒に勉強しようか」

そんな顔をした雫から飛び出した言葉は、世界がひっくり返っても
出てこないような言葉だった。

俺はその言葉に素直にうなずき、嬉しくて押さえ切れないニヤニヤ
が表へと現れてしまった。

学校に着くと、雫は誰もいないのを確認して、トイレへと入っていった。

俺はトイレの横で彼女を待ち、1分ほどで出てきた雫を見て俺は驚いた。

いや、ありえないだろ。と心の中で呟くほどに。

「…何よ」

ボソツと呟く雫は、俺の驚きの表情にイライラしているみたいだ。

彼女の姿は、三つ編みモードではなく、美人モードへと変身していたのだ。

驚かないほうが、どうかしてる。

「し、仕方ないじゃない！ 大地は有名人なんだから、一緒に居るところを見られると、私が友達に追及されるんだからね！ この姿なら、誰にも『石上雫』って分からないし」

それはそうだけど、それはいくらなんでも大胆すぎじゃないのか？

しかし…制服を着ている美人バージョンの雫を見るのは、初めて会ったとき以来だよな。

「そ、そうだよなあ」

一応、雫の言葉を肯定しておく。

「早く図書室行くわよ。あまり時間がないんだから」

図書室に着くと、雫の個人レッスンが始まった。

分かりやすく、丁寧に教えてくれる雫のおかげで、苦手だった数学もポンポン解けていく。

今日のテストは、話に聞くとこころ数学と、世界史らしい。

『世界史は渡されたプリントを頭に詰め込むだけでいいから』

と言われ、世界史は後回しにされた。

「そ、それにしても…大地呑み込みが早いわね」

30分も経たないうちに、数学の範囲が終わってしまったらしい。

「雫のおかげだろ」

雫と一緒に居ると、何故かやる気が出るんだよな。

もしかすると同じ教室だったら、俺は先生に優等生扱いされるかもしれない。

「それでも早いわよ…」

そういわれてみれば、絶対無理と言われていた、ここの高校にも一ヶ月勉強しただけで入れたっけ。

この高校にした理由も、結構近いし、明が行くから。で決めたんだよな。

「次は世界史か？」

俺が質問すると、雫は戸惑いながらも、「う、うん」と返事をして、世界史のプリントを俺に渡した。

プリントも分かりやすく書いてあり、15分で全部覚えきった。

その後、彼女と交互で問題を出したりして、時間をすごした。

その間、図書室の男子と、可愛い女の子がいるという噂を聞きつけて、駆けつけた男子たちの視線が雫に向けられていることは、言わなくても分かっただろう。

勉強も終わり、雫は図書室を出て、雫目当てで来た男子たちを俺は睨んだ後、図書室を出て雫の後を追った。

「どこか、人が居ない場所ないかな？」と聞かれ、「特別棟の最上階になら、カップルしかないから、女の子一人だと気にもされないよ」と答えた。

俺が雫と一緒に行くのはさすがにまずいと言うことで、彼女一人行かせ俺は教室へと足を運んだ。

雫目当ての男子が居ることは、どうせ気付いてないであろう雫にはあえて言わなかった。

多分俺が睨みつけたことにより、雫の後をつけるようなことはしないだろうから。

まあ、そんなことしやがったら、ボコボコにして喋れなくしてやるけどな。

#22 テスト勉強1（後書き）

勉強タイムでした。

正直、俺は学習能力が無いために

覚えたことをすぐに忘れます（つゝ。スンスン

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#23 テスト勉強2

『別にいいよ』

俺は、今日のテスト終了後にあるメールを雫送った。

さきほどの、『別にいいよ』は、その俺のメールに対する返信メールである。

朝、雫と別れた後、教室に入ると、数名の男子の視線を感じた。

その視線を無視し、俺の席である窓際の一番後ろにつくと、隣の席の明が俺の前までやってきた。

「なんで、しず…噂のあの子と、一緒に図書室なんかで勉強しているんだよ!？」

わざと教室全体に聞こえるように、明は言ってきたのだ。

「ちょ、お前、少し静かに喋れ！」

明は俺にだけに見えるようにニヤリと笑ってきた。

この状況をどうやら明は楽しんでいるらしい。

今度は、俺にしか聞こえないように話し始めた。

「それで、なんで雫ちゃんがあの格好で？」

「…えっと、俺って有名じゃん？」

俺の質問で明は頭の上にクエシユチョンマークを浮かべている。

「まあ、そりゃな。有名だろ」

「雫の友達に、俺と一緒にいる理由を聞かれて、雫は説明するのが面倒らしい」

なるほど！　と言わんばかりに、手をポンと叩いた。

そこで、チャイムが鳴った。

昼前にはテストが終わり、「案外簡単だったな…」と呟くと、俺の隣に居る明が「はあ!？」と反論してきた。

どうやら、明は出来が悪かったらしい。

さっきのお返しも含めて、明の肩に手を置き、ドンマイと笑みを見せてやった。

そして、俺が次にとる行動は、雫にメールを送ることである。

それはテストが始まる前から決めていた事。

カチカチと携帯を打っていると、横から明の顔がスッと伸びてきて、俺の画面を覗いてきた。

「へえ、大地君も可愛い所あるんですね」

メールの内容を見てやったと言わんばかりに、ニヤリと笑ってくる。

「み、見たな」

俺は明から携帯を遠ざけた。

「見てないよぉ」

ニヒヒと笑う明の様子からして、90%メールの内容を見たに違い

ない。

そして、残りの10%を増やし、俺が100%の確信を得たのは、明のこの言葉からだった。

「俺も、今日大地の家に行こうかな」

「ちょ、お前！ やっぱり見たんじゃないか！」

俺はそう言って、明の腹を殴る。

痛そうにしながら、「嘘に決まってんだろ…」と呟いた。

俺はそのまま家へと足を運んだ。

雫は家に帰ってご飯を食べてから、俺の家に来るという。

少し、部屋を片付けて、ご飯を食べて、雫がくるのを待つ。

何を期待しているのか、布団のしわをしっかりと伸ばして、綺麗にしたのは秘密だ。

「…一応、コンドームは持っておくか」

俺の部屋のベッドの脇においてある、引き出しの中へと隠しておいた。

それから間もなくの事、家のインターフォンが鳴り、「はい」と俺は声をあげて、玄関のドアを開けた。

「よっ」

そう言ったのは俺じゃない。

無言のまま、俺はドアを閉めた。

「閉めんなよ！」

「…うっせ、帰れ」

「俺だって、雫ちゃんを見たいんだよ！」

そこにいたのは雫ではなく、明だった。

「帰れ、殺されたくなければ、今すぐに！」

俺は怒鳴りながら、ドアの向こう側に居るであろう、明に怒鳴った。
諦めて「分かったよ。」と呟いて帰っていった。

明悪いな。今日だけは、俺に夢を見させてくれ！

そんなことを考えていると、再び家のインターフォンが鳴った。
玄関のドアを開けると、そこには美人モードの雫が立っていた。

「勉強道具は持ち帰ってきた？」

雫の言葉に俺は首を横に振る。

「俺は学校に、一切勉強道具を持っていない」

雫は一瞬驚いた顔をして、フツと鼻で笑い「大地らしい」と呟いて、俺の家の敷地を跨いだ。

そう、俺が雲に送ったメールとは、

『今日、俺の家で勉強を覚えてくれないか？』と言う、優等生振りを
を見せるメールだったのだ。

#23 テスト勉強2（後書き）

…分りにくい文章の仕方だったかもしれませんが（っ　；。　）ス
ンسن

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#24 テスト勉強3

雫が家に来て、すぐに勉強が始まった。

とにかく、明日の英語と、化学を教えてもらうことにした。

俺の驚異的な覚えの速さと、わかりやすい雫の教え方がマッチし、2時間後にはすべてが終わっていた。

「終わったあ！」

俺はグッと背筋を伸ばし、ベッドへと倒れこんだ。

「大地って、本当は頭いいんだね…」

俺のノートを見ながら、雫は呟く。

雫から出された問題は、90%以上は正解だったのだ。

「まあ、天才ってやつですかね」

ニシシと笑ってやると、呆れた顔をしていた。

「それじゃ、すること無くなったし、私帰るね」

そういつて、かばんを持って帰ろうとする雫の腕を俺はつかんだ。

「…何？」

「その…もう少し、喋っていかない？」

「…別にいいけど」

雫はそういつて、かばんを置き、さっき座っていた場所へ場所へ戻り腰をおろした。

そして、少しの間沈黙が続く。

喋ろうといったものの、何を話そうか…。

一緒にいたいだけで、何も考えていなかった。

自分の計画性の無さに、半ば呆れている俺。

「そ、そういえばさ、今日図書館で雫、注目の的だったんだぜ？」

…何言っているんだよ、俺。

「そうだったの？」

雫は本当に何も気付かなかっただらしい。

「これで、また告白の日々が続くんじゃないの？」

俺はニヤッと笑って、雫に言つと馬鹿にされた。

「大地つて、そういうところ馬鹿だよね。違う姿をしていたんだから、告白も何も無いに決まってるじゃない。分かっても学年と性別ぐらいよ」

性別は、確実にバレているのですが。

「まあ、これで、迂闊にその姿にはなれなくなったな」

「だね」

「もし、バレたらどうする？」

俺の質問に、彼女は少し悩んだ様子を見せて、こう答えた。

「そのときは、諦めるしかないわね。もう一度ストーカーが出てきたら、即警察に通報するわ。」

もし、栗に分からないようにしていたら、どうするんだ。

誰が守ってやれるんだ。

俺しか…いないだろう。

「栗…」

俺はベッドの上でうつ伏せになりながら、栗の名前を呼んだ。

「何よ」

「そのときは…俺が守ってやるよ」

うわっ、恥ずかしいこと言ってしまった。

「な、な、何をいきなり…言い出すのよ」

「いや、その…なんでもない」

気まずい沈黙が流れる。

「や、やっぱり私帰るね」

そう言つて、再びかばんを持って立ち上がった。

嫌だ。

まだ、一緒に居たい。

帰らないで。

雫が愛しい。

勝手に俺の中から声が漏れた。

「お願い…帰らないで」

雫は俺の言葉で振り向き、立ち止まっていた。

#24 テスト勉強3（後書き）

今日更新する2つは結構短いですね。
…ハイ。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#25 告白

「お願い…帰らないで」

「…え？」

雫は驚いた表情を見せている。

「ど、どうしたのよ、急に」

戸惑いの表情に変わった。

「その…もう少し、勉強を教えてもらおうかと」

「大地に教えることがないんですが」

「まあ、そうだけど…」

…苦し紛れのいい訳だったな。

「何かあったの？」

俺の傍に寄ってきて、顔をうかがってくる。

「何もないよ」

ただ、一緒に居たいだけなんだ。

雫と同じ空間に居たいんだ。

顔を上げると、俺の目の前には、世界一可愛くて、愛しい雫の顔があった。

くつきりとした目、眉毛は細くて、輪郭もすつきりとしていて、髪の毛は少し肩より下にある。

触ったら離れなさそうな肌に、少し小さくて柔らかかそうな唇。

…柔らかかそうな唇。

そこに俺の目線は釘付けになり、少しずつ近づいていった。

唇に雫の柔らかい唇の感触を感じた瞬間に、自分がしてしまった過ちに気付いた。

「ご、ごめん！」

俺は雫から離れ、ベッドから降りた。

「本当にごめん」

雫は、状況を把握できていないのか、その場で固まっている。

「し、雫？」

「へ？」

どっから声が出たのか分からない声で、返事をしてきた。

「やっぱり、家まで…送っていくよ」

俺はそう言っ、雫のかばんを手を取った。

中には教材が入っているのか、少し重さを感じる。

「う、うん」

帰り道は、二人とも何も話さなかった。

気まずい雰囲気になってしまった。

それもこれも、俺のせいなのだ。

キスをしてしまった事によって、俺の気持ちはバレてしまっただろう。

してしまったことは、後悔してももう遅い。

遅い…。

「雫…」

俺が名前を呼びかけても、雫は俯きながら歩くだけ。

「さっきのは…」

何でもないわけが無い。

何も言えないまま、俺の発言は終わった。

もしかすると、このまま雫は何も話してくれないかもしれない。

もしかすると、この前みたいに、何も無かったかのように接してくれるかもしれない。

もしかすると、雫に嫌われてしまったのかもしれない。

嫌だよ…雫ともう話せなくなるなんて。

嫌われてしまうなんて。

大好きだから、雫のことが。

愛しているから、雫のことを。

これ以上、大好きな人が、いなくなるのは嫌なんだ。

そう思うと、過去の過ちを学習できないまま、俺は雫の身体を抱きしめていた。

「キスしてごめん…雫。けど俺…雫のことが…」

彼女は抵抗をしようとしな

誰かが通るかも知れない通路の真ん中で、俺に抱きしめられながら、ただ黙って聞いていた。

彼女の表情は伺えないが。

俺は大きく息を吸い、覚悟を決めた。

「俺…雫のことが、好きなんだ」

そう、好きなんだ。

会ったときからずっと。

この数日間で、雫を心から好きになってしまった。

俺に無くてはならない存在へと変わってしまった。

「…大好きなんだ」

#25 告白（後書き）

やっとの思いで…大地乙です。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq

84s/mailboxform/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#26 告白、その後は

「だから、俺を嫌わなくてくれ…」

雫を抱きしめ、涙を流しながら俺は呟く。

やはり、その腕をほどこうとはせず、ただ困惑しているようだった。

「わ、私…」

彼女は俺の腕の中で口を開いた。

「だ、だ、大地の事は嫌いじゃ…ないよ」

「本当か!？」

俺の腕は、雫の背中から肩へと移り、雫を少しだけ離れた。

「で、でも…」

彼女は俺の顔を見ないように、下を向いたまま話を続ける。

「す、好きとか、そういうのは…ない」

俺の顔を見ない雫を俺はもう一度抱きしめた。

『好きではない』と言われたショックより、『嫌いじゃない』と言われた嬉しさのほうが大きかったから。

俺の心は、全くと言っていいほどに、その時傷はついていなかった。

「それでもいい…嫌ってないのなら、それでいい…」

本当に、それでいいんだ。

よかった。

嫌われてなくて。

大好きな雫に、嫌われなくて本当によかった。

涙もいつの間にか止まっており、俺は少しずつ雫を離れた。

俺は雫の手をとって、再び雫の家へと歩く。

2分もしないうちに、雫の家が見えてきた。

その気まずい2分の間、俺たちは一言も喋れなかった。

…もうすぐで、今日はさようならしなくてはいけない。

「明日：今日と一緒の電車に乗るから」

雫はボソツと言うと、走って家へと行ってしまった。

俺の手から雫の温もりが消えると、電池がなくなったかのように、俺はその場に立ち尽くしてしまった。

『明日：今日と一緒の電車に乗るから』と言う言葉は、これからも傍に居てもいいという意味だろう。

そういう分かりにくい表現をするところが、雫らしくて愛しい。

そして、俺…

とうとう言ってしまった。

雫に…言ってしまった。

好きだと。

大好きだと。

…人というものは恐ろしい。

死んでもいえないと思ったその言葉を、あっさりと言ってしまっ

だから。

愛する人を目の前にすると、頭より、心に従ってしまう。

「…帰るか」

俺は一人残された道で呟き、とりあえず家に向かうことにした。

その道のりで俺は、さっきあったことを思い出そうと、頭の中は必死に働きかけている。

しかし、その半分もの事が、緊張と興奮で忘れてしまっているようだ。

「俺：雫が好きなんだよな」

その感情は由梨以来。

少し、暑さを感じる7月の出来事だった。

家に着くと、ベッドに直行。

さっきまで、ここに雫が居たんだと思うと、なんだか鼻が敏感になった。

雫の臭いは俺を癒す。

今日はなんだか疲れた。

雫の癒しの臭いのおかげか、慣れない勉強をした疲れか、俺はそのまま深い眠りについた。

その後、起きたのはAM5時。

もう一度寝たら起きられないのではと思い、俺は教科書を片手に取り勉強を始めた。

それは人生でそう何度もない事である。

俺が自主的に勉強するなんて、明が聞いたら笑っただろうな。

そう思うと、心のどこかがくすぐったくなって、一人部屋で笑ってしまった。

「あはは…馬つ鹿みてえ」

そう言って、俺はベッドに横になり天井を向いた。

神様…。

少しでも早く時間が過ぎますように。

雫と一秒でも長く一緒に居られますように。

雫が俺の事を愛してくれますように。

今になって、『好きではない』と言われたショックが心へとやってきた。

#26 告白、その後は（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|toki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#27 告白、その後の

「目覚し時計君、今日もいい朝だね」

今日も一日始まった。

昨日と同じように、電車に乗るには十分の時間。

と言うか、ただ単に寝ていないのだ。

あんなことがあり、そんな簡単に寝れるほど、俺の心はタフではない。

むしろガラスのハートなのだ。

「...どうしよう、目覚まし時計君」

俺は、頭がおかしくなったのだろうか。

一人が寂しくなり、昨日の夜から目覚まし時計と会話をしている。

会話と言うより、一方的に話しているだけだが。

「雫に…どんな顔をすればいいだろう」

女に振られたのは二回目だ。

かといって、男に振られたことも無いぞ。むしろ告白なんてしたくない。俺はそっち系の趣味は無いから。

前の一回…由梨の場合は、顔を合わせなくて済んだから、こういう迷いには至らなかった。

まあ…一方的にいなくなっただけだ。

しかし、今回は訳が違う。

昨日、俺が告白した相手と一緒に登校するのだ。

…振られた相手と。

雫はそれでもいいから、俺にどの電車に乗るか教えたのだろうけど。

俺は違う。

顔を合わせられない。

恥ずかしすぎて…。

色々考えていると、目覚まし時計君がいきなり喋りだした。

シリシリシリと。

この音は、家を出る時間の合図。

「それじゃあ行ってくるよ」

俺は目覚まし時計君をベッドの上へと放り投げて、家を飛び出した。

「よし、あれこれ考えてもなにも進まない。とりあえずは、いつもと一緒のようにすればいいんだ。…ポーカーフェイスだ！ 俺！」

パンパンと顔を二度ほど叩いて、電車へと乗り込んだ。

周りの視線が少し痛いのは気にしない。

次の駅へと着くと、俺は雫の姿を探した。

ポーカーフェイス、ポーカーフェイス。

ぶつぶつ心の中で呟きながら、雫の姿を見つけようと、俺の目はあちこちに向いている。

『ドアが閉まります』

アナウンスが流れて、ドアは閉まってしまった。

…あれ。

雫が…いない。

昨日のあの言葉は、デマだったのか！？

そう思うと、悲しみが押し上げてきて、今にも眠気で倒れそうになった。

その瞬間、俺のふとももにブルルと何かが震える感触が。

…雫からメールだ。

『寝坊した。ごめん』

このパターンは会えないパターンか！？

…会えないのは嫌です。

『会えないのかよ！』

携帯にそう打ち込むと、俺の手は止まった。

なんか、厚かましいな。

『寝坊か、分かった』

…冷たすぎじゃないか？ 俺って。

『駅で待ってるから』

いや、あいつのことだろう。俺が駅で待っていても、無視して進んでいくに違いない。

メールの文章を悩んでいると、いつの間にか学校の最寄り駅についてしまった。

結局、『おう。今日のテスト頑張ろうな』と打ち、メールを送った。

「会えないのか…」

そう呟き、学校へと足を向かわせた。

#27 告白、その後の（後書き）

少し、頭の壊れた大地を紹介ですw

前回の話と題名が少し似ています。

お間違えの無いように（、、；A

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#28 勝負しないか？

「珍しいよな」

次の日の朝、俺は昨日と同じ時間の電車に乗り、雫を見つけた。
今日は、寝坊をしなかったらしい。

「何が？」

「寝坊」

俺がグサツと言ってやると、雫の顔は少し険しくなった。

「い、色々…あつたのよ」

「そうなのか」

雫にも寝坊するほどの悩みがあるんだな。

そして、雫は横目でちらつと俺を見て、ため息をついた。

「ため息をつく、幸せが逃げてしまえますよ」

「馬鹿、死ね」

「な、なんだと！」

俺は人が居るにもかかわらず、大きな声をあげてしまった。

相変わらず、雫は知らん振り。

それにしても、死ねというのはあまりにもひど過ぎじゃないのか！？

昨日の夜、『明日はちゃんと乗るから』というメールが届いた。

顔を合わせるのが恥ずかしいと思っていた俺は、次の日、つまり今だが、案外会ってみるとなんてことはない。

変わったことがあるとすれば、今まで見たいに雫をずっと直視することができなくなったことだろうか。

唇にどうも目が行ってしまって、一昨日のことを思い出してしまっから。

今日のテストの勉強なんだが、雫にあんな事をしてしまったから、俺の部屋で…というか、二

人きりになり、勉強を教えてもらうのは申し訳なくて、昨日は家で自主的に勉強した。

雫からは何も連絡が無かったので、それでいいということだろう。

…多分俺がそう思いたいだけで、連絡が無かったことについては、さほど深い意図は無いと思う。

そして、ここでも発見がひとつあったのだ。

案外、一人で勉強しても頭に入っていく。

雫と一緒にしていたほうが、やる気、勉強の進み具合は全くもって異次元だが、2時間程度で勉強が終わってしまった。

もしかすると、俺は本当に頭がいいのかも知れない。

「なあ、雫」

俺のほうを全く見ようともしない雫に話しかけた。

「何？」

「俺と、勝負しないか？」

「は？」

「テストだよ、テスト」

一瞬こっちを向いた。

俺はにやりと笑う。

雫はパツとすぐ顔を戻し、ふたたび知らん振りモードに入る。

「俺が雫に合計点数勝ったら、ひとつ言うことを聞いてよ」

「いいけど」

案外すんなりと、俺の勝負に乗ってくれた。

学校にまともに通っていなかった俺が勝つなんて、無理に決まっていると思うのだろうか。

ここだけの話、一昨日と、昨日のテストは手ごたえがあったのだ。

もしかすると、100点かもしれない。

「じゃあ、私が勝ったら何をしてくれるの？」

「え？」

「そういうものでしょう。勝負というものは」

「そ、そりゃそうだけど……」

こいつ、確信犯か。

負けない自信があつて、勝負もくそもあるか。

俺から持ちかけた話なんだけど。

「私が勝つたら、大地は私の言うことを聞いてくれるんだよね？」

「……いいよ」

俺が、勝てばいい話。

雫は油断しているのだから。

これからの、四教科頑張ればいいのだ。

学校に着くと、まず今日持ってきた教科書を開いて、勉強を始めた。

俺のその姿を見ると、明が笑い出したのは言うまでも無い。

そして、その日のテストが始まった。

明に笑われたっていい。

馬鹿にされたっていい。

俺が柄にも無く勉強しているのは、勝負のためだけじゃない。

心のどこかで思っているのだろう。

少しでもいい、雲に相応しい男になれるようにと。少しでも、雲の世界に入っていけるようにと…。

#28 勝負しないか？（後書き）

すみません。

本日からもしかすると一日一話更新の可能性が…。

（、；AW

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#29 勝負の行方はナポリタン

テスト終了後、土日をはさんで結果が出た。

俺たちの学校は、今の時代、遅れているであろうが、テストの点数の100位までが掲示されるようになっており、今回は俺の名前も掲示されていた。

今までサボっていたから、こんな所に名前を載せたことは一度も無かった。

…けど、今回の俺の名前はというと、

「だ、大地が…学年2位!? どんな裏技使ったんだよ! バグか? チートか? カンニングか? それともなんだ、ドラ江門の暗記パンを使ったのか!？」

そう、2位だったのである。

明の驚きようは異常だったが、先生たちにも、不正行為があったのではないかと疑われたほどだ。

「そこまで、驚くことじゃないだろう?」

「驚くに決まってるだろ!」

明は驚きを隠せずに、掲示板へばりついていた。

そして、俺のひとつ上にある名前、つまり学年1位の名前はもちろんこの人。

石上雫。

点数は、俺が8教科779点で、雫が781点と言う、たった2点差で敗北を味わうことになった。

あの一問さえなければ!!

：俺は世界史のテストの時間に、とてつもなくお腹が減っていたのだろう。

『ナポレオン』と書かなくてはいけない場所に『ナポリタン』と書いたのだ。

とてつもなくダサすぎるぜ…。

そんな俺が落ち込んでいるときに携帯が鳴った。

「あ、雫からだ」

ぼそつと呟くと、掲示板に張り付いていた明の顔が、ニコオと明るくなり、俺の下へと歩み寄ってきた。

嫌な予感がする。

俺は直感で感じ、その場から走って逃げ去った。

校舎裏にいき、周りを見渡すと誰も居ない。どうやら、明を巻けたようだ。

そして、もう一度携帯を開き、メールを開いた。

『2位おめでとう。しかし結果は私の勝ちね。もう少し余裕で勝てると思ったのに』

嫌味ですか。

このメールはわざわざ嫌味を言うために送られてきたのですか。

『1位おめでとう。…勝負は負けた。約束どおり雲の言うこと何でも聞いてやる』

そう打ってメールを送り返すと、タイミングを見計らったかのように明に見つかってしまった。

そのまま教室へと連行されていき、『噂のあの人』の話で明とは盛り上がった。

いや、明だけ盛り上がった。にしておこう。

俺は、決して盛り上がったてはいない。盛り下がってもいない。ごめん、意味が分からないな。

雫の願い事は何なんだろうか。

どうせくだらないことだろうと思う。

雫は少しS気があるから『土下座しなさい』とか『私の足の指をなめなさいとか』

…絶対無いよな。

もし俺が勝っていたら『笑って』とか『キスして』とか『一発ヤラセテ』とか『結婚しよう』とか色々決めていたのに……！

なんで…ナポリタンって書いてしまったんだ。

あ、願い事がどんどんグレートアップしていることは気にしないで。

そして、かなり不本意だが、先生に放課後職員室へと呼ばれた。

今回は説教なんかじゃなく、お褒めの言葉をもらいに。

ダルそうに歩きながら、俺は職員室へと向かっていく。

お褒めの言葉なんか要らないのに…。

職員室の前までいき、ドアに手をのばそうとしたら、勝手にドアが開いてしまった。

このパターンは、前に一度あった気が…

同じ映像がもう一度繰り返されたかのように、雫は俺の前に立っていた。

「し、雫」

すると、以前同様『何?』みたいな目をしてくる。

「お褒めの言葉をもらいにきたのか?」

雫は少し黙って、コクつと頷いた。その姿が小動物みたいに可愛くて…。

って、ヤバイヤバイ。

学校と言つのに、まだ抱きしめそうになった。

俺は雫の横を通っていくと後ろで、前回俺の悪口を言った先生と雫がなにやら話し始めた。

この展開も、前と同じ。

俺の耳の神経がするどくなり、なにやら聞こえてきた。どうも先生がこの前の事を謝っているらしい。

『池上大地の事を何も知らないで、あんなことを言ってしまったすまない』と。

雫は、『なんで私に謝るのですか？』と不思議そうな顔をしていた。

先生は『前、怒っていたじゃないか！ 彼氏のことを…その』

と言葉が詰まっている模様。

どうやら、先生は俺と雫が付き合っていると勘違いしているらしい。

俺はそれでもぜんぜんいいのだが…。

「な、何言っているんですか！？ あんな馬鹿な池山君と付き合っているわけ無いじゃないですか！！」

…貴方はこの前、先生が俺の事を『あんな池山なんか』と言った事を怒ってくれた人ではないのですか？

俺は落ち込みながら、お褒めの言葉をさっさともらう為に、担任の前までとテクテク歩いていった。

「おめでとう。こういつて気分を損ねてしまったら悪いが、お前が

…その…頭がいいとは思っていなかった。今までとは違う全うな道を歩んでほしいと先生は思っている。きっと池山の前には、大きな道がたくさん広がっているはずだから」

先生、全うとは何でしょうか。

その質問を俺はあえて先生には問わなかった。

どうせ答えられないだろう。そう思ったから。

#29 勝負の行方はナポリタン（後書き）

はい。

言っておきます。

このテストのミスは、事実です！！

盗鬼がテストのとき、ナポレオンと書かなくてはいけない場所にナポリタンと書いて…職員室で話題になったそうです。

…（っゝゝ。）スンスン

この前は、メンデルをヘンデルって書いたしね。。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#30 二人のお見舞い

あれから数日後。

いまだに雫は何も『願い事』を言っていない。

しかも、今日はなんと…

「え、休み？」

電車の中で一人ボソツと呟いた。

その原因は、雫が学校を風邪で休んだからだ。

『今日は学校休む。夏風邪に…』

メールが届いたときの俺の顔は多分すごいものだったのだろう。

とてつもなくショックだったからな。

そのまま久しぶりに一人で学校に行き、教室の中でひたすら考えていたのは、勉強の事なんかじゃなくて、雫の見舞いに行くかどうかだ。

いや、むしろ行くのは決定している。

と言つか、俺自身がただ単に雫の部屋に行ってみたいからだ。

何を買っていいこう。

教室で唸っていると、明に「腹でも痛いのか？」と心配された。

「そんなんじゃないよ」

…さあ、どうしよう。

放課後、結局俺はミカンを買っていくことにした。

ミカンを手にとると、店の人の視線が痛いほど分かる。

『万引きなんかしねえよ』

そう目で訴えても、信じる様子は無かった。

その前に、俺のテレパシーさえ受け取ってくれはしなかっただろう。

ミカンを買った後、俺はそそくさと雫の家へと足を向かわせた。

家の人が居たらどうしよう。

何と言って、家の中に入れてもらおうか。

まさか、「彼氏です」なんていえないからな。

実際、彼氏じゃないけど…。

色々頭の中で考えていると、俺の足は雫の家の前へと到着していた。

「と、とりあえず…インターホン鳴らしてみるかな。」

右手がスツと伸びて、その途中で止まった。

なんでこんなに緊張しているんだ？

好きな人の家だからか？ いや、待て。由梨のときは…こんなことなかったぞ。

片思いだからか？

訳わかんねえよ俺。

大きく深呼吸を吸い、インターホンへと指を向かわした。

勢いよく押すと、家の中でピンポンと鳴っているのがわかる。

その後、ガチャガチャと家のドアが開く音。

そしてドアが開くと、美人モードの驚いた雫が立っていた。

「ようっ」

俺はミカンを上に向けて、挨拶をする。

「何できたのよ」

「心配だったからに決まっているじゃないか」

紳士っぽく言う俺に、雫は引いたのだろうか、かなり顔が引きつっている。

しかし、視線は俺には向いていない。

…？

俺は頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、雫の視線を追いそのまま俺の右斜め後ろを振り向いた。

そこには雫がバレたくなかったと言っていた、あのときの友達、朋子が立っていたのだ。

「し、雫…見舞いに来たんだけど…」

相当戸惑っている様子。

やばいな、やつちまったか？

雫の方を向くと、いつもの表情に戻っており、「朋子、中に入って」と手招きしていた。

俺は！

俺はどうなるの！

…やっぱ迷惑だよな。

そう思って、帰ろうとしたとき雫の声が聞こえた。

「大地、何しているの。早くおいで」

そう呼ばれたときは、天にまで登ってもいい！と心の底から思っていた。

「お、おう」

俺は、小走りで雫の家の中へと入っていった。

雫の家の様子は、至って普通といったところだろうか。

雫の部屋は、どうやら二階にあるらしい。

俺はぞくぞくしながら、朋子と雫の後を追った。

「へえ…ここが雫の部屋か」

あまりにも感心してしまい、つい声に出してしまった。

雫の部屋は、性格とは逆に…と言ったら怒るだろうが、女の子らしい部屋だ。

かわいらしい人形も置いてあって、とりあえず明るい色で部屋をそろえていると言う感じ。

「あまりジロジロ見ない」

俺は「ごめんなさい」と謝り、下を向いた。

朋子は、美人モードの雫をどうやら知っているらしい。

…女に隠しても意味ないからか。

それとは別に、朋子は俺に恐怖感を抱いているようには見えないのだが、どうもさっきからビクビクしている。

「朋子…」

雫が悪そうに、朋子の声を出すと、朋子はなにかを言い始めた。

「し、雫…その…やっぱり付き合っていたの!？」

「…は?」「」

朋子の発言で、俺と雫の声が重なった。

#30 二人のお見舞い（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|toki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#31 朋子の勘違い

俺たちの声が重なった後、雫は朋子に問い詰めた。

「『やっぱり』っていうことは、私と大地と一緒に居るっていうか……その、友達だったのを知ってたの？」

恐る恐る聞いてみると、朋子は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「し、雫……あんた、池山君と美人な子……雫と一緒に居るところの写メが流通していることを知らなかったの？」

「え？」

雫は本当に知らなかったらしい。

「私があれだけ、雫に見てよおって言ってたのに、断固拒否してたから知っているものだと思ってたよ」

「あ、あの写真が、私と大地のだったの？」

朋子は「そうそう」といいながら頷いた。

「大地は知ってたの？」

雫は朋子と喋るときとはまた違う声の低さで俺に問いかけてきた。

「あ、うん。知ってると思ってて」

「なんで教えてくれなかったの！？ 馬鹿死ね！」

やはり貴方は言いすぎですよ。

俺だって、そんなに言われたら傷つくって。

『なんで教えてくれないかなあ』なんて、ぶつぶつ呟きながら、俺が勝ってきたミカンに手が伸びる。

それを上手に向いて、ひとつ。またひとつへと口の中へ運んでいった。

3つ目を食べようと差し掛かったとき、朋子が喋りだした。

「それで、雫と池山君はいつから付き合っていたの？」

「付き合っていない！」

地球の誰よりも先に即答で答えた雫。

まあ、事実は事実でも、ここまで仲良くして……と思っているのは俺だけか。

ため息を心の中でついて、朋子に俺は話しはじめる。

「雫とはこの前、落とした定期を渡しに行ったときから、ちょっとした仲になって話し始めるようになったんだよ。ね？ 雫」

俺が雫に問いかけると、カクンと首を下に下げた。

あゝやっぱり可愛いよ。雫……って俺は変態か！？

「あの時！ ……そうだったんだあ。あの後、雫に問いかけても何も答えてくれなかったからなあ」

「黙っててごめんね？」

雫が悲しそうに謝ると、朋子は両手を広げて『いいよ！ いいよ！ 気にしてないから』とジェスチャーを加えていった。

雫は『ありがとう朋子！』と感謝をしながら、朋子にギュッと抱きついた。

俺には、抱きついてくれないくせに。

心の中で拗ねていた俺に気付いたのか、朋子がこっちを向いてニコツと笑ってきた朋子に対し、俺はニコツとやり返してやったが、そのときにはもう俺のほうは見えていなかった。

…おいおい。

けど、その朋子と、雫の姿が微笑ましくて、俺もあんなふうになれたらなって…少し思ったことは事実である。

その後、俺と雫と朋子の3人で過去話や、俺と雫の間で何があったかを話し合って楽しんだ。

見舞いに行ったのに、そんなのでいいのかよ。とか思ったが、思ったより雫は元気で安心した。

そこまでは楽しかったのだ。…帰り、そう問題は帰りであった。

俺と雫の家は10分程度と近い割りに、中学校は別なのだ。

そのため、二人の家の間には、学校の地区境界線というものがある。ある大通りで、俺の中学校側か、雫の中学校側なのか別れてしまうのだ。

話に聞くと、朋子は雫と同じ中学校であり、この境目の大通り付近らしい。

すると、帰りの何分かは必然的に俺と同じ道を歩むことになる。

雫にバイバイと言った後、案の定俺と朋子の足の方は同じ方向を向いて歩いていった。

「ねえ、大地君」

雫が見えなくなると、朋子はいきなり俺に話しかけてきた。

「…はい？」

「大地君は、雫のことが好きなんですよね？」

直球！！

直球過ぎて、一瞬俺はうろたえてしまったが…大丈夫。

俺は意を決して頷いた。

「やっぱり。恋している目だと思った」

「分かります？」

「だいぶね」。大地君ってそんなに分かりやすいんだ」

ニヒヒと勝ち誇ったかのような声を出すと、朋子は少ししんみりと

した顔になった。

「栗が、こことは違う前の中学校で…」

言いたくなさそうにする彼女に、俺は言葉を上乘せした。

「ストーカー？」

「…知ってたんだ」

「無理やり聞き出した…っばい感じだけどね」

そのまま少し沈黙のまま、大通りへとたどり着いてしまった。

「じゃあ、私はここで」

「うん。気をつけて」

俺が手を振ると、朋子は少し大きめな声で言った。

「雫を…守ってあげてね！」

当たり前だよ。

雫は…俺が守って見せるから。

#31 朋子の勘違い（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#32 夏休みの禁断症状

夏だ、海だ、青い空だ、水着だ！

「って、全然面白くねえ！！」

ベッドの上でバタバタしていると、明に笑われた。

「雫ちゃんに会えない禁断症状か？」

「うつせえよ」

明は、俺と雫の事は結構熟知しているほうである。

俺がまだ片思いと言うことも、雫が俺にあまりにも興味がないことも知っているのだ。

メールを送っても、一日に返ってくるメールは10件もない。

これほど寂しいことはあるだろうか。

「夏休みなんだから、もう少し女遊びしようぜえ？」

「一人でギャルゲーでもして勝手にやってろ」

そう、今は夏休みなのだ。

夏休みということは、雫と唯一会えた学校の登校もないわけで。

自分で言うは恥ずかしいが、人生初、禁断症状というものにかかってしまったようだ。

雫に会いたい。

声だけでもいい…聞きたい。

あの温もりを感じたいのに…なんで夏休みと言う、片思い者反対運同様なものがあるんだ！

これじゃあ拷問だ！ 体罰反対！

今までは夏休みなんて天国のように感じていたのに！

恋って恐ろしすぎる。

「なあ大地、そんなに好きなら遊びに誘っちゃえばいいじゃん。祭りとかさ」

それが出来たらこんなに苦労しないって。

祭りかあ…。

携帯を片手に持ち、メールを打った。

『土曜日暇？ 遊びに行かないか？』

送信ボタンを押すと、俺はポイツと携帯を枕元へと投げて、明と話しはじめた。

10分後、俺の携帯がなり出した。

携帯のサブ画面をみると受信完了となっており、メールが届いたようだ。

メールを開くと、『いいよ！ 久しぶりに遊ぶねえ！』と元気がいいメールが来ていた。

『じゃあ、土曜日の5時に駅前集合で！』

それだけ打って、メールを送ると、俺は再び携帯を枕元に戻す。

「なあ、明。今週の土曜日暇だな？ 遊ぼうぜ」

「用事があるといつても、大地は連れて行くんだろお？」

「瑞樹も呼んだから、久しぶりに祭りでも行くか」

「お、行く行く！」

さっきのメール相手は、残念ながら雫ではありませんでした。ハイ。瑞樹とはこのところ、遊んでいなかったからな。

久しぶりに、このメンツで遊んでみるのも面白い。

小学校、中学校と、この時期になると俺たちは3人でよく祭りに行っていたのだ。

高校生になると、俺たちはなかなか会うことも無く、去年の祭りは不良仲間を連れて行ったもんだ。

なので、今度行く祭りは、俺たちの思い出の場所でもある。

「懐かしいよな。小学校のときは…空がいたんだよな」

「お前、そんな昔のことをよく覚えてるなあ」

…空とは、俺の双子の弟である。親の離婚時に父親に引き取られたのだ。

俺は今の母親に引き取られたのだが。

「空は元気にしているのか？」

明は俺に聞いてくるが、俺がそんなことを知る由も無い。

小学校4年生のときに別れた以来、話した事も連絡を取ったことも無いのだから。

「わかんねえよ」

俺はボソツと呟き、携帯に目を向けた。

鳴らない携帯。

最近は玩具にしていた女からの連絡も無に等しくなった。俺が、一人の女にベタ惚れだという噂を流している奴が居るらしい。

…多分それは明だと思うが。

まあ、いちいち断るのも面倒くさいと思っていたから、明にはそのところ感謝だ。

俺はふと気がつくと、片手に携帯を持ち、送信者の名前だけが書いてある、新規メールを作っていた。

『今何してる？ 暇だああああ』

本文にそうつけて、メールを送ってみた。

…送信相手である、雫からはその日メールが返ってくることは無かった。

#32 夏休みの禁断症状（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価等で言にくい人は、
net|toki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#31 お祭りの出来事1

「遅いよ！」

そういわれたのは、俺じゃなく明。

「わりい！ 可愛い女の子に捕まってさあ。モテ男と言うのは、辛いんだよ。瑞樹ちゃん」

「瑞樹ちゃんって呼ぶな！ 気持ち悪い」

瑞樹は一言入れて、明の頭をポコンと殴った。

このやり取りは、昔から変わらない。明が冗談言って、瑞樹が明をけなして笑いを取るというのは。

俺は、瑞樹の隣で笑っているだけの存在である。

ただいまの時刻、5時半。

30分の遅刻。

昔から明は遅刻癖があり、中学校のときなんて、学校に行った日の5分の4は遅刻だったという伝説を持つほどだ。

俺たちが遊ぶときには必ずと言っていいほど、30分ほど遅刻をし

てくるし。

そのため、俺も瑞樹も、明と遊ぶときは15分ほど遅れて集合場所へとやってくるのだ。

「まあ、とりあえず、祭りに行こうぜ！」

俺がいまだに馬鹿なやり取りをしている瑞樹と明に言った。

明は「おっけえ！」と言って、一番初めに改札口をくぐっていった。いつの間に切符を買っていたんだ。

祭りまでは駅4つほど先のところにある。

毎年祭りの時期になると、駅はどっかの都会の通勤ラッシュ並に人がいっぱい居るのだ。

人ごみはあまり好きではないので、少々人を殴りたくなってくる。

これは、カルシウム摂取不足の症状か？

電車に乗り、目的地まで行くと、そこには、毎年見る風景が。

何故か毎年来ているのに懐かしく感じた。

この3人で出かけるのは、久しぶりだからだろうか？

「最初は、もちろん金魚すくいだよね！」

瑞樹はハキハキと言うと、明はフツと鼻で笑った。

「な、何よ」

「瑞樹ちゃんはお子様だなんて」

「明に言われたくないですう！」

「まあ、瑞樹の場合は、金魚を救うじゃなくて、金魚を食っちゃいそうだけど」

ギャハハと笑い出す明に、瑞樹は問答無用で右ストレートをかました。

あ、ちなみに、瑞樹は小学校のころから、合気道、空手を習っています。

ブンっと言う音と共に、バン！　と言う音が鳴り響き、明は数メートル先まで吹っ飛んでいった。

『痛そお…』といったのは、明を殴った本人である。

『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』と唱えているのは俺。

「ば、馬鹿！　そんなの冗談に決まってるだろ！　思いっきり殴ること無いだろおが！　いってえ」

自分の左頬を痛そうにさすっているが、音と、飛距離の割にはさほどダメージを受けていない様子。

…昔から殴られているから、打たれ強くなったのだろうか。

「明が悪いんだからね！」

「ごめんって」

そう言っただけで瑞樹を明は宥める。

傍から見たら付き合っているのではないだろうか？　という光景だ。…こいつらが、もし付き合っていたら、天と地がひっくり返って、天国へいつも上るはずの天使が地獄に落ちてしまうことになりかねない。

その様な感じで俺たちは祭りを楽しんだ。

祭りの名物である、叫び太鼓。

名前のとおり叫びまくって、太鼓を叩くだけである。

…これを名物と言っているのか分からないが。

そして、祭りの最後のほうには花火が打ち上げられる。

俺が思うに、花火こそがこの祭りの本当の名物といえるだろう。

俺たちが笑いあっていると、射的を頑張ってやっている三つ編みモ
ードの雫の姿を見つけた。

しかも、なんと浴衣なのだ。

か、か、可愛すぎる…。

この大人数の中、雫を見つけた俺はすごいとは思わないか？ 俺の
特技に『雫を見つけること』とでも書いておこうか。

俺がボーっと見ていると、明がちよこちよこつとやってきて、俺の

視線をたどった。

「雫ちゃんか」

「な、何だよ」

ニヤニヤする明の顔を俺は睨む。

それでも、明のニヤニヤが納まらないので、俺は腹部に一発入れてやった。

「ぐはっ！」

その場で少し痛そうにする明に『自業自得だ』と言い捨ててやった。

「そういえば、前に大地が石上雫の事を聞いてきたよねえ。どうして？」

「まあ、色々あつてさ」

「好きなの？」

瑞樹のその言葉に俺の顔は赤くなったのだろう。瑞樹は驚きの顔を隠せていなかった。

「そ、そんなんじゃ…」

なくはないけど…。

「だって、噂の写メ見たけど大地の今の彼女って…超美人じゃん！」

「…彼女じゃないけどな」

俺は笑いながらそう答えた。

瑞樹は、一瞬顔を曇らせた後、『大地でも捕まえきれない女なんているんだねえ』と笑っていた。

「で、その超美人女の子と、石上雫とどっちが本命なの？」

「どっちと言っか…」

同一人物なんですけど。

…これは言っているのか？ それとも言わないほうがいいのか？

そんな単純な質問が俺の頭の中でぐるぐる回っていた。

「私たち友達でしょ！ 隠し事は駄目！ 分かった？」

説教くさく言ってくる瑞樹の顔は相変わらず笑顔だった。

その言葉と、笑顔を見ると言っしかないかと、俺の心は決まった。

「絶対誰にも言っなよ！ 絶対だぞ？」

俺は念のため、瑞樹の『秘密』の約束をすると、快く頷いてくれた。
意を決して、俺は少し俯きながら口を開く。

「その…瑞樹の言う超美人女の子と、あそこに居る石上雫…実は同一人物なんだ」

俺はそういい終えると、瑞樹の顔を見た。

明が見たら『ばっかじゃねえの！？』と言っぐらい口が開いていて、目もいつも以上にぱっちり開いている。

簡単に言っつと、ひどい顔をしている。

やっつのことで、思考回路が正常に戻ったのか、顔は少し普通に戻り、少しは納得した様子だ。

まあ、驚くのは分かる。

俺も、初めは信じられなかったから。

#31 お祭りの出来事1（後書き）

久しぶりの、瑞樹ちゃん登場です。

瑞樹ちゃんはいっぱい出したいのだけれども、
出す機会がないというか、なんというか。

出来るだけ、出して行きたいです（っゝ。）スンスン

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、
net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#34 お祭りの出来事2

瑞樹との話も終え、俺は再び浴衣姿三つ編みモードの雫を見た。

いまだに射的で苦戦している。

そんなに欲しいものがあるのか？

話しかけたい。

こうやって偶然だが、雫に会うと運命だと思ってしまう。

それに、夏休みが始まってから、一度も声を聞いてないし、顔も見
ていなかった。

近寄りたいと思う俺の気持ちは間違っているのだろうか。

友達と一緒に居るみたいだし、話しかけるのは雫のためにも我慢し
なければいけない。

俺は大きいため息を着いて、明と瑞樹に『行くぞ』と答えた。

この道は一本道だから、来た道を戻るか、雫たちの後ろを横切って
いくしかない。

出来れば、我慢するのが辛いから、横切りたくは無い。かといって、
戻っていくのも忍びない。

俺は意を決して、横切る決断をしたのだ。

なのに…なのに…あの女は!!

「あれ、大地君じゃない！ 久しぶり〜」

そう言っつて、ブンブンと手を振るのは朋子。

あの馬鹿！

心の中で思ったときにはすでに遅く、雫と他に一緒に来た友達である2人が『あの池山くんと仲がいいの!？』なんて朋子に問いただしている。

俺は我慢をして無視をしようとした。

雫のためと思っつて。

よし、行く…っておい！

俺の心でつつこみを入れた相手は、あの馬鹿男、安藤明であつた。

あろうことに、あの4人集団に近寄つていったのだ。

「やつほお！ 君たち、女の子だけで行動してるの？ 女の子だけだと危ないから、僕たちと一緒に行動しない？」

…紳士ぶりやがって。

どうせ明は、俺が困るのを楽しんでいるのだ。

隣の瑞樹はと言うと、呆れた顔をしているし。

明の言葉に朋子と雫以外の二人が『どうする？　一緒に行動する？』などと話しているのが分かる。

肝心の雫はと言うと、いまだに射的と遊んでいるようだ。

女の子たちの会話が終わったと思ったら「いいですよぉ！」なんて言い出した。

…嬉しいけど、一緒にいると我慢するのが本当に辛い。

俺は仕方なく明の下へと寄って行って、女の子2人に挨拶をした。

挨拶が終わるとまず、俺の目は射的を頑張っている浴衣姿の雫へと行った。

なんか幼さが残っていて、可愛い…。

決して俺はロリ系じゃないが。

朋子は雫のほうを向いて、「雫も挨拶しなよぉ！　池山君たちがいるよぉ！」と叫ぶと、びっくりしたのか、雫は銃を一発暴発した。

その姿に、俺の我慢がとうとう切れて、雫の下へと寄っていった。

「欲しいものでもあるんですか？」

俺は周りの2人に怪しまれないように、他人行儀で雫に接した。

雫はとりあえず無視をする。

とりあえず、雫を見てみると、いつになっても弾が発射されない。

よくよく見てみると、横にある銃のバーが降りていない。

「バー下ろさない」と

俺がそういうと、慌てて雫はバーを下ろそうとした。

10秒ほどかけて下ろし終えると、再び構え始めた。

俺は何を狙っているのか気になり、視線の先を見てもう少しで落ちそうな赤色の缶があった。

どうやらその缶を落とすと、イルカの人形が手に入るらしい。

雫は一発打つと、その赤い缶とはかけ離れたところに弾が飛んでいった。

顔を覗いてみると、落ち込んでいる様子。

弾が無くなったようだ。

そして雫は俺を無視してまま、朋子の下へと戻っていった。

その様子を少し眺めた後、俺は射的のおばちゃんに300円を渡したのだった。

「おい！ 大地行くぞ！」

俺の後ろのほうで明の声がした。

「おう、今行く！」

俺はおばちゃんから手渡されたイルカの人形を手にとって、明の下へと軽く走っていった。

男子2人、女子5人と言うなんともハーレム状態の俺たちは、うまい具合に3：2：2で分かれたのである。

一番先頭には、明とさっきの女子2人。

その後ろには、さっきから話があるのか分からないが、結構楽しそうに話す瑞樹と朋子。

その後ろには…残り物？ の俺と雫。

雫の顔を見ると、少し落ち込んでいるようにも見えた。

さっきのイルカが相当欲しかったのか？

俺は前の5人が見ていないのを確認した後、さっきのイルカを雫の顔の前に出現させた。

「僕、イルカちゃんでしゅ。雫ちゃんは元気が無いでしゅね！」

イルカの人形をリズムよく動かし、俺は赤ちゃん言葉で腹話術らしきものをした。

すると、雫は可笑しかったのか、クククと笑い出した。

「わ、笑うなよ…」

「笑ってなんか無い。それより、それ何？」

俺はイルカの人形を雫の頭に乘せながら、ニヒヒと笑い「雫のために取ったあ。あげる」と言った。

雫は「ば、馬鹿じゃないの？」と照れている様子。

俺って、雫の前だと性格が変わる気がするんだけど。

「まあ受け取れって。俺がこれ持ってたら恥ずかしいだろ？」

雫は何かを考えたように下を向いた後、俺のほうをジロっを見てきた。

「……し、仕方ないわね。貰ってあげるわよ」

そう言っ、雫は俺の手からイルカの人形を奪っていった。

雫はイルカの人形を見るとニヘッと笑みをこぼすと、じっと見ていた俺に気付き「何よ？」と言い、いつもの無表情の雫に戻ってしまった。

そんな姿の雫もまた可愛いと思ってしまふ俺は、完全に雫にはまってしまった事を再び自覚するのであった。

#34 お祭りの出来事2（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価等で言にくい人は、
net|toki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#35 お祭りの出来事3

俺が前を向くと、さっきからチラッチラツと瑞樹が俺等のほつを見ているのが分かった。

何か言いたいことでもあるのだろうか。

「どうした瑞樹？」

「え、いや、なんでもないよ！」

そう言つて、再び朋子と楽しそうに喋りだした。

もしかして、さっきの雫の話が気になってるのか？ そりゃ別人だからな。あの美人モードの雫と、三つ編みモードの雫は。

俺がチラツと雫の方を見ると、未だに俺が取ってあげたイルカと遊んでいる。

そんなに嬉しかったのか。

けど、そんな顔されると、また体が勝手に抱きついてしまいそうだし。
…。

一度目をそらし、雫をもう一度見ると、目が合ってしまった。

「な、何？」

「いや、なんでもないよ。雫は？」

「わ、私もなんでもないよ」

そして、雫は前を向いてイルカの人形と再び遊び始めた。

こいつは子供か。

その様子を見てみると、どうも笑いがこみ上げてくる。

とうとう我慢が出来ずに、クククと笑ってしまった。

「な、何なのよ！ やっぱり言いたいことあるの！？」

「いや、そのお、可愛いなって」

俺がそういうと、顔を真っ赤にする雫。

その姿になってから、他人に『可愛い』と言われることに聞きなれてないのか？

「浴衣姿も…似合ってるし」

雫はとうとう、俺を無視して下を向いた。

怒らせるようなことを言ってしまったか…。

「う、ごめん」

俺が謝ると、雫は「な、何で謝るのよ！」と、余計怒り出した。

謝るのは、逆効果だったらしい。

「えっと、その…あ！　そういえば、もうすぐ花火やるじゃん」

時計を見ると、19時40分となっていた。

花火は毎年、20時から打ち上げ開始なのだ。

1時間ほど終わってしまいが、毎回多くの人がこの祭りに見に来ている。

年々、その花火のおかげで、祭りの参加者が増えていると言っ話だ。

そのため、小学生の高学年のころから花火を見る場所がどんどんと無くなっていき、俺たちはあの頃、よりよい場所を探すために色々探索していたっけ。

そして、中学校に入った年の祭りのとき、俺たちはある秘密の場所を見つけた。

林の少し奥へ歩いていったところなのだが、崖の上となっており、花火を一望できる。毎年、三人で行くときはそこで見るって決めていたのだ。

そして、多分…今日も行くのだろう。

「お、本当だ。どこで見ようか？」

そう言ったのは、あの秘密の場所を知っている明だ。

「そりゃ、もちろん…」

俺が『あの秘密の場所でもいいだろ。』と言おうとしたとき、明が俺の言葉をに重ねてきた。

「川原行く？ あそこ少々人いるけど、そこまで悪い場所じゃないし。賛成の人は挙手！」

そういうと、俺と雫以外は手を挙げた。

雫は、明のテンションについていけないような顔をしている。

「あれ、お前たちは賛成しないの？　じゃあ、反対もの同士二人で
どっか行ってるか？」

「ばっか！　別にそこでいいって！」

そついに終わると、ニヤニヤしている明は俺の耳元でボソッと呟いた。

「あそこは3人の秘密の場所だから」と。

俺は啞然とした顔をしていた。

明がそんなことまで考えていたなんて。

「じゃあ行きますか！」

元気よく明が先頭を歩き出した。

それにつられて、みんなが歩き出す。

10分ほどすると、その川原へと着いた。

川原にはカップルらしき人たちが5組ぐらいと、高校生グループがちょこつといただけだった。

上は少し林で見にくいが、そこまで悪い場所ではなかった。俺たちの秘密の場所ほどではないが。

川原は結構暗くて、後ろのほうにある祭りにある出店の明かりで少し足場が見える程度だ。

そして、時間が8時になると、一発目の花火が上にあがり、パンツとはじく音が聞こえると、空の一部は綺麗なオレンジ色で染まった。

俺の前方数メートル先には、女の子2人とイチャイチャしながら花火を見ている明。

その後ろには、朋子と話をしながら空を見上げている瑞樹、その少し後ろには俺がいる。

そして、俺の隣には少し大きめの石に座りながら、空を見上げている雫がいた。

花火が上がって空で舞い散ると、一瞬だけ雫が見える。

この一瞬がなんだか嬉しくて、俺は花火より雫の顔を見てしまうのだ。

そのうち、雫は俺の視線に気付いて、「何よ？」と怒り出し、ひっ

そりと「雫を見ていい?」と聞くと「駄目に決まってるでしょ!」
と俺の頭をコツンと叩いてきた。

俺は雫に気付かれないように、少し近くに寄ってみると、今度はギ
口つと俺を睨んできたのだ。

「今度は何?」

俺は何も言わず、雫の膝の上に置いてある雫の手をとった。

「な、何するのよ!」

周りに聞こえないようにひっそりと雫は俺に少し顔を寄せて言う。

そして俺は、もっと顔を近づけてそつとつぶやいた。

「少しだけ」

雫は離そうとブンブン振っているが、俺の力に勝てるはずもなく、
4回ぐらいふってから諦めたようだ。

俺がニヤリと笑うと、雫は俺の顔を一切見なくなった。

#35 お祭りの出来事3（後書き）

今年最後のUPです。

今のところ目標である毎日更新できている模様。

しかし、文章能力の無さに泣けてきますw

来年の目標は文章能力UPUPw

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#36 お祭りの出来事4

「だ、誰かに見られたらどうするのよ…」

花火がすべて打ちあがったと同時に、雫の手は俺の手から離れていった。

…ところで俺は、花火中に花火を見るところではなかった。

あれから40分以上、手を繋いでいたんだぞ？

自分から繋いだにもかかわらず、心臓がバクバクしているのがわかる。

それもそのはず、雫がそつと手を握り返してくれたのだ。

その時、雫は花火に夢中だったから、無意識に手に力が入っただけだろうけど…。

「まあ、そのときはその時だろ。しかもあの暗さ。絶対見えやしないよ」

「もう、今日だけだからね…」

はあ、と大きくため息をついた雫は、ゆっくりと立ち上がった。

前の5人はと言うと、まだ花火の余韻を浴びていたらしい。座ったまま、空を見続けている。

「おい、明そろそろ行くぞ？」

俺が声をかけると、「わかったあ」と言っ、立ち上がる。

それにつられるかのように、周りの女子もぞくぞくと立ち上がった。

そして再び、明が先頭に立って歩き出す。

何故か俺はいつも最後尾となり、雫と隣同士で歩く形になってしまふのだ。

夜9時半を過ぎたところで『女の子は夜遅いと危ないから！』と明が言い、解散と言う形になった。

方向が同じと言うこともあり、俺と瑞樹と朋子と雫は一緒に電車に乗って帰ることになった。明はと言うと、他の女の子を家まで送っていくことになったらしい。

『帰りに狼になるかもしれないから、気をつけてね』と女の子2人に言う、片方が『それでもいいかも…』と呟いたように思えたのは、気にしないようにした。

そして、明と2人の女の子を抜いた俺たち4人は電車に乗った。

雫の手には、俺がとってあげたイルカの人形を大事そうに持っている。

その様子が何故か俺には嬉しくて、勝手に笑みがこぼれてしまった。

電車の中では、今日あったことや、楽しかったことを話したり、朋子と瑞樹のメールアドレス交換で時間は過ぎていった。

そして雫が降りる駅へと着く。

雫は電車を降りて、俺は雫を見送っていくために電車を降りようとしたが、後ろの二人はどうも降りる雰囲気が無い。

「降りないのか？」

俺がそう聞くと、彼女たちは『お気になさらずに』と言って、ニコッと笑ってきた。

どうやら、俺と雫を二人きりにしたいらしい…。

そんな気遣いなんかいらないうつに。

「じゃあ、雫と大地君バイバイ！」

と、朋子が言うと、電車のドアは閉まってしまった。

雫はあまり状況が分かっていない様子。

俺が『行くぞ』と雫を催促すると、雫は俺の後をついてきた。

駅のホームから出て、5分もすると雫の家が見えてくる。

その5分間は無言で過ごした。

車はあまり通らない道らしい。俺たちの歩く音だけが無性に響く。

雫の家まで20歩ぐらいのところで、いきなり雫の足音が無くなった。

振り返るとそこには立ち止まった浴衣姿の雫。

「どうした？」

「あつ、あの…イルカちゃんが、私の所に来たがっていたらしいの」

「お、おう？」

何が言いたいんだ、この子は。

「そ、それで、イルカちゃんが…ありがとって」

「うん。どういたしまして、イルカちゃん」

俺は人形のイルカにナデナデしてやると、雫は俺の顔をじっと見てきた。

きつと、『ありがとう』って素直に言うのが恥ずかしいんだろうな。そういうところも…可愛いんだけど。

イルカをナデナデしていると、いきなり俺の両肩に重みがかかったと思ったら、今度は頬に何かが当たる感触がした。

「しっ、雫？」

俺は動揺して、雫の名前を声に出すと雫は恥ずかしそうに下を向いた。

「イツ、イルカちゃんがお礼したいって言っから！ 私が変わりに…その…してあげたの！ ありがたく思え馬鹿！ おやすみ！！！！」

そう言って、雫は家へと走っていった。

「頬にキスなんて…反則すぎるって…」

…もう、頬は洗えないな。

#36 お祭りの出来事4（後書き）

あけましておめでとうございます!!

さて、去年は色々とありました。

今年は、この「君との日々」完結をまず目指します。

新年に「雫のほつぺにチュー」を公開できたのは

なんとも嬉しいw

（。。。）ノあいw

では、今年よろしくおねがいします。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しく願います。

#37 転校生

やっと…雫に会える…。

あの祭りが終わってからと言うものの、俺の禁断症状は激しくなった。

家の中では『面白くない！』と連呼するようになったし、散歩しているときは、雫がいないかキョロキョロし始めるし…。

わかっていたけど俺は、もう雫にベタ惚れ状態です。

そして本日、その最悪な夏休みともおさらば！

昨日は雫に会えるのが嬉しくて、なかなか寝付けなかったほどだ。

俺は鼻歌交じりで、髪の毛をビシッと決めて、学校に行く準備を始める。

このときは思いもしなかっただろう、大変な出来事が今日二つも起こるなんて。

「雫！」

と心の中で大きく叫んだ俺は、今雫を電車の中で発見した。

嬉しくて、抱きしめたくて、人目を気にせず雫の下へと軽く小走りで寄っていった。

その間、電車の揺れで転びそうにもなったが。

「おはよー！」

雫の顔を見ると、いつもどおり。

挨拶を無視するのもしいつもどおり。

俺が話しかけると、素っ気無く返事をするのもしいつもどおり。

…そう、『いつもどおり』でよかったのに。

学校に着き教室へと向かうと、なにやら教室がざわざわとしている。

「どっした？」

近くにいた明に聞くと、どうやら二人転校生がやってくるらしい。

「その転校生を見た奴の話だと、女が一人、男が一人らしい。そして、ここからが問題なのだ！」

「問題？」

「女の方がとてつもなく可愛いらしい」

…そんなことかよ。

どうせ明のことだから、次に口を開くときは『その子は俺が落とす！』とでも言うのだろう。

「本当に可愛かったら、俺が落とす！」

ニヒヒと笑いながら明は右手を上突き上げてきた。

俺にそう言う事を予知されていたとも知らずに。

…予知していたからって、何かが変わる訳じゃないけど。

「そして、まだまだビックニュースが飛び込むぞ！ 聞いて驚け。その女は俺たちのクラスにくるらしいんだ。俺の席の隣に作られた席こそがその証拠！」

「お、それは、よかったね」

俺が素っ気無く返事をすると『なんだよ』大地には雫ちゃんがいるからって』と拗ねた様子を見せた。

そのとおりだ。俺には雫がいる。

「それで、男子のほうはどうなんだ？」

「男子？ あゝ転校生か」

その話しかしていないだろうが。

「えっとね、眼鏡をかけているが、格好男前らしい。俺様ほどではないが」

「そうですか」

「そうそう、先生から聞いた話だが、頭がいいらしいぞ。何のとりえも無いこの高校に入ってきた意味が先生たちにも分からないらしい」

何のとりえも無いって、先生たちが決めちゃっていいのか。

「男子は雫ちゃんのいるクラスに行くらしいぜ」

「そっか」

あとで、どんな子が雫に聞いてみよう。

どうせ、無視されるだろうが。

「それにしても驚きだよな。高校にもなって兄弟でもない二人が同じ時期に転校してくるなんて。よっぽどの事情があるのだろうか」

…俺には、お前の情報網のほうに驚きだ。

今日転校してくる奴の情報をそこまで聞き出すなんて、明以外の人物に出来ないだろう。

そして、学校が始まる合図のチャイムが鳴った。

皆、転校生がやってくることを知っているのだろうか、いつも以上にざわざわとしている。

そこに、先生が一人で教室に入ってきた。

「みんな座れ。このざわめきを見たところ、ほとんどの人が知っているだろうが、本日転校生がやってきた」

先生がそう言うと、教室全体に「お〜」という声。

「入っていいぞ」

先生がドアの方に呼びかけると、ガラスとドアが開く。

そこには、少しお嬢様のような雰囲気をかもし出した女の子が…。

って、あれは…

「お、おい大地…あれは…」

隣の明は俺に話しかけてきたのだろうけど、俺の頭には入ってこなかった。

転校生に見とれていたわけじゃない。

眠すぎて、気絶したわけじゃない。

ただ、そこにいる人物は、俺の傍から泣きながら離れていった相手だったから。

「谷口由梨です。皆さんとは学年が一緒ですが、訳があつてひとつ年上です。しかしタメ語で全然いいですので、どうぞ宜しくお願いします」

転校生の自己紹介が終わると、俺と明以外の人たちが拍手を浴びせた。

なんで由梨がいるんだ。

俺の思考回路は今にも止まりそうだった。

#37 転校生（後書き）

久々の由梨登場です。

さて、これからどうなるのでしょうか…
作者にも分かりませんw

評価で言にくい人は、

net|toki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/miq
84s/mailboxform/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#38 由梨そしてもう一人の転校生

「由梨…。な、何で…ここにいるんだよ」

無意識に口に出ていた言葉だった。

俺は由梨から視線を外すことが出来なかった。

あの日、泣きながらの電話を最後にして、俺の下から立ち去った彼女から。

雫は明の隣に作られた席に座る。

かばんをそつと机の横にかけて、隣の明を見ると「明君、久しぶりと呟いた。

明は「由梨さん…」と呟くだけ。

相当明もびっくりしているのだろう。

朝の挨拶の時間も終わり、休憩時間となった。

案の定、由梨の周りには生徒たちが集まる。

教室の外には噂を聞きつけた、他の生徒たちがやってきた。

『かわいいじゃん』とか、『結構美人だな』など、由梨をほめる言葉が耳に入ってくる。

注目の的である、由梨はすくっと立ち上がって、俺の方へと体を向けた。

こっちにくるのか？

…やめろ。

話なんかしたくない。

「大地…久しぶりだね」

俺の声を呼ぶ、懐かしい声は俺の心に響いた。

苦しい。

もう、見たくない。

ガタンと音を立てて、俺はその場から離れようとした。

「大地！」

後ろで由梨の音がする。

なんて…悲しい声なんだろうか。

由梨は俺の下へと走ってきて、腕をつかんだ。

俺はその腕を振りほどいて、由梨のほうへと目を向けた。

あの日の事が一瞬にして頭によみがえり、味わった憎悪が心から沸いてきたのに。

何故…こんなに苦しいのだろう。

「俺に話しかけるな…」

「大地…ごめんね」

由梨のその声は、今にも泣きそうだった。

俺の心は少し…いや、とてつもなく、この状況に耐えられるような状況じゃない。

何かを吐き出さなきゃやっていけない。

「何で…何で帰ってきたんだ！ 忘れてと言ったのは由梨だろうが

！
」

なにかが頬を流れていく。

嘘…馬鹿じゃないのか。

学校で泣くなんて、この俺が…。

「大地…」

隣にいる明が俺の名前を呼んだ。

こんな場所、居たくない。

とりあえず、気持ちの整理をしたい。

「その手を離してくれ…」

そう呟いたら、腕の重みも無くなり、再び歩き始めることが出来た。

向かう先なんて考えていない。

明も俺が心配になったのか、ついてきてくれた。

…あとで、話でも聞いてもらおうか。

そんなことを思っていると、目の前の3組の教室がガラッと開いたのが分かった。

音につられて、顔をあげると雫がいた。

「だ…大地？」

雫は心配になったのか、学校と言っのに俺の名前を呼んでくれた。

けど、ごめん雫。今…まともに雫と話が出来る気がしない。

俺は下を見て歩き出した。

すると、ドンッと誰かにぶつかってしまった。

「わりい」

声をかけると、その人は俺の肩を掴んだ。

「池山…大地」

見知らぬ声から呼ばれた俺は、再び顔をあげた。

その顔はどこかで見たことある顔だった。

「空……？」

#38 由梨そしてもう一人の転校生（後書き）

はい。

タイトルが、めちゃ長いですw
そこらへんは、気になさらずに！！
さて、今度は空が登場です。

波乱万丈の臭いが…

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、
net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#39 弟参上、涙と友に

「大地！」

そう言つて、空は俺に抱きついてきた。

これだけを見るとホモっ子に見えるのだろうか。

それとも、感動の再開で感動する場面なのだろうか。

今の俺には…感動している余裕は無いのだろうか。

「久しぶり…」

「大地…？」

久しぶりだと言つのに、空に心配されてしまう。

けど、今の俺にはどうしようもない。

「そ、空！ 久しぶり！」

この場で唯一俺の状況を分かっている明が助け舟を出してくれた。

「明！ 久しぶりだなあ！ 男前になったじゃん！」

空は俺から離れて、明の下へと歩いていった。

その隙に、俺は空に『またな』と呟いて、歩き去っていく。

明は空と別れを告げたあと、俺の下へと再び来てくれた。

数分歩いて、着いた先は屋上だった。

屋上へ行く階段には手作り感いっぱいの木の下アがあり、本当はそこに錠がかかっているのだが、少し強く引っ張れば錠はあっさりと外れてくれるようになってるのだ。

屋上のドアを開けると、この時期特有の暑さが襲ってくる。

後ろには、何も言わずについて来てくれた明。

俺は、近くの壁にもたれかかり、屋上の地面へと腰を下ろした。

明は俺の隣に座り、話し始めた。

「空が…帰ってきたな。あと…由梨先輩も」

気まずそうに言う明は、俺のこの痛い気持ちが分かっているのだろうか。

「…大地は、由梨先輩のこと…その、好き…なのか？」

「好きなわけねえ。あんな女」

好きなわけが無い。

俺を見捨てていったあんな女。

忘れろと言ったのはどこのどいつだ。

もう俺を苦しめるな。

そんな言葉が、さつきから頭の中で飛び交っている。

「俺は、大地の気持ちを100%分かってあげることができない。出来てもせいぜい40%ぐらいなんだろう。でも、俺はお前のことでひとつだけ100%分かっていることがあるんだ」

「…なんだよ？」

俺は明のほうを見た。

明は、空を見てから俺の顔を見ていつものようにニコツと笑った。

「雫ちゃんがいるだろう？」

…雫。

あの俺を心配するように呼びかけた声が俺の頭の中で木霊のように反響する。

『大地』

そして、ひとつ、俺の頭の中で違う声が聞こえた。

由梨の…呼ぶ声が。

「もう、訳わかんねえ。…どうすればいいんだ！」

その場で泣き崩れてしまった。

理由は定かでは無い。

ただ、何故か涙がこぼれてきた。

雨が降ったかのように、洪水が起きたかのように、俺の目からは涙

があふれ出てきて、屋上の地面をぬらした。

「明」

少し気持ちが落ち着くと、俺は明の名前を呼んだ。

「何？」

「俺さ、由梨にどういう顔して会えばいいだろう？」

「いつもどおり接すればいいよ」

俺は『ありがとう』と明に言つと、いつものように笑ってくれた。

#39 弟参上、涙と友に（後書き）

弟参上です。

空はかわいいです。

…すみません。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、

net|touki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#40 いつもどおり

屋上で明と話しながら、1限目をすごした。

休み時間になると、明が「教室に戻るか」と言ったので、俺たちはその場に立つ。

屋上を出て階段を下りていくと、偶然にも雫に会った。

「雫！」

明と俺と雫以外、誰もいないのを確認して、雫の名前を呼ぶ。

心配そうな顔をした雫が向いた。

「大地、何かあったの？」

「何も無いよ」

雫に心配されるなんて、どれだけ嬉しいか。

「ところで、どうしたの？ こんなところで一人でうろついて」

俺が質問すると、雫はあたふたしながらこう答えた。

「べ、別に大地を探しに来たんじゃなくて、ただ…その、図書室に行こうとしたの！」

「そっか」

心配して、探しに来てくれたんだ！

こんな幸せ味わえるなら、少しいやなことがあるのもいいかもしれない。

そんな雫が可愛くなって、ギュッと抱きしめてみた。

「…何するのよ」

「ハグってやつ？ 誰も見てないから」

ニシシと笑うと、雫は呆れた顔をして、俺の腕からスッと抜けた。

「私、教室に戻るから」

そう言って、歩き出す雫の後姿をじっと見ながら俺は気が少し晴れ

たことに気がついた。

『雫ちゃんがいるだろう？』

明のあの言葉は間違ってなんかいない。

俺には今、雫がいる。

「図書室はいいのか？」

俺が雫に声を掛けると、パツと後ろを向いてきて「馬鹿っ！」と叫んできた。

そして俺たちも教室へと戻ることに。

3組の前を通るときに、再び空と会った。

「空！」

「大地、さっきはどうしたんだよ。いきなり居なくなっちゃって」

「お前こそ、男前になっちゃって。その眼鏡はファッションか？
それとも、勉強のしすぎか？ すっげえ久しぶりじゃん！」

「眼鏡かけてたほうが、優等生に見えるだろ？ だからつけてるんだよ」

久しぶりに双子の弟と話した俺は、懐かしい気分を味わった。

由梨と会ったときはまた違う、懐かしさを。

「立花君！」

そう呼ぶのは、3組の学級委員長っぽい人だ。

明らかに、優等生と言う雰囲気をかもし出している。

立花とは、空の苗字である。離婚して父親に引き取られた空と母親に引き取られた俺の苗字は違ってくるのだ。

「なんだよ。委員長くあまり怒ると可愛い顔が台無しですよ」

今日、転校してきたと言うのに、空は妙にこの学校の雰囲気に溶け込んでいるようだ。

「な…何を言うんですか！ 次は移動教室なんです！ 実験室の場所が分からないでしょうから、教えてあげようと思ったのに」

「あ、本当に？ ありがとう！」

空は俺に「じゃあな！」と言うと、学級委員長の下へ行った。

俺と明は教室へと再び向かった。

教室へと入ると、みんなの視線が俺へと向けられた。

さっき、あんな悲劇？ ドラマチックなことがあったから当然だろう。

俺は教室に入ると、真っ先に由梨と目があつた。

「さっきは悪かったな」

「ううん。大丈夫だよ」

俺は少し生徒に囲まれている由梨に謝った。

うん。

いつもどおり出来ている。

「昼休み、話せるかな？」

「…うん」

由梨に聞かれ俺は、少し間を置いてから返事を返した。

#40 いつもどおり（後書き）

空君の本名は立花 空です。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

4 1 今に至った理由

「あの夜、私は家族と共に夜逃げしたのは…知っているよね？」

昼休み、俺は由梨に誘われて、中庭にあるベンチへと向かった。

「ああ」

「夜逃げのことを知ったのは、あの日…大地に電話をする数分前だったの…信じて。決して、大地を騙そうなんて思っていなかったの」

『信じてやる』とか、『分かってる』とか、肯定の言葉を入れてあげべきなのだろう。だけど、今の俺には言えない。

あの時の苦しみ…怒りが完全に消えたわけじゃないから。

「…それで、その後は？」

「私のお父さんは、ひっそりと企業を立ち上げて、死ぬ気で働いたの。そうしたらとんとん拍子で会社の株価も上がり、2年でそこそこの地位を手に入れることが出来たの。借金もしっかり返した。そこで、私は1年遅れで高校へ入学することを決めたの」

「色々大変だったな。」と返事をする、由梨はコクツと頷いき、再び話し始めた。

「……………私は大地に心残りがあったの」

「え？」

俺はびっくりして、返事を返すと由梨は笑っていた。

「私が忘れてって言ったのにね…一番、大地との日々を忘れられなかったのは私なんだよね。」

俺は何も言えず、下を向いてしまった。

「けど、お父さんは大地と同じ高校に行くことを反対したの。無理に勉強させられて有名進学校に入学させられて…辛かった」

由梨は俺と同じように下を向いてしまった。

俺は顔をあげて、何でこの学校に入れたのかと聞くことにした。

「この高校に来たってことは…お父さんの許しを得られたからだろ

う?」

由梨は俺の目を見て頷く。

「説得するのに、約1年半もかかるなんて…私も思っていなかったわ。有名進学校で学年10位以内よ? 到底無理だと思っていんだけど、大地のためなら…って思ってた。そうしたら、なんと3位とれちゃったのよ。」

エヘへと笑う由梨はやはり昔の面影がある。

懐かしい…。

「やっとお父さんも諦めてくれて、私は今日この学校に転入することが出来た。大地の下へ帰ってこられた…」

由梨はしっかりと俺の目を見ている。だけど…俺にはその目を見返してあげることが出来ない。

なんと言えいいんだろう。なんと言い返せばいいんだろう。

結局、何もいえないまま時間だけが過ぎていった。

「大地は…」

数分間の沈黙をやぶったのは、やはり由梨のほうだった。

「大地は、今でも私の事…好きかな？」

好き？

そんなわけが…ない…だろう。

ない…だろう。

そうすると、俺は由梨のことを今どう思っている？

ただの元カノか？

俺が何も言えず下を向いていると、慌てて由梨は俺の肩を掴んできた。

「い、いいの！ 私の事をもう好きじゃないのは、百も承知。私から忘れてって言ったんだもんね。大地は…忘れてくれたんだよね」

「…忘れられるわけが無いだろうが！ 何が…何が私の事忘れてだよ…」

「ごめんね。」

「何で謝るんだよ。由梨が悪くないって、あの出来事は仕方が無い事だって分かってる。でも…今の俺には、喜んで由梨を迎えることは出来ない。」

俺がそういうと、由梨は「うん…だよな。ごめん。変なこと言い出して」と言って、去って行ってしまった。

俺はそれを追いかけることも出来ず、ただその場にじっと座っているだけだった。

心のどこから、あふれ出そうになる涙を抑えて。

#41 今に至った理由（後書き）

さあ、由梨の告白です。。。

どうなるか…零と大地はどうなるでしょうか？

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、
net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#42 マイハウス

「…へ？ ダンボール？」

俺は、あの後午後の授業をサボって家へと帰っていった。

なんとなく、由梨と会いたくなかったから。

下校中は、由梨の言葉が頭の中でぐるぐる回っていた。

『今でも私のこと好きかな？』

嫌いじゃない。怒りもさっきの会話で消えた。

だからと言って、この変な気持ちを『好き』と例えていいのだろうか？

否、俺はもう雫を忘れることは出来ない。

そう…雫が好きなんだ。

色々考えながら家のドアを開けると、そこには今朝、学校出てきたときとは違う光景があったのだ。

そこで、この話の冒頭に戻る。

ダンボールが複数並べられていたのだ。

あて先を見ると、俺の母親宛になっている。住所もここで間違いない。

…で、この複数のダンボールは何のためにおいてある？ という所にぶち当たる。

「ひとつ…覗いてみるか」

一番左側に置いてあるダンボールのガムテープを外して、ふたをあけた。

「これって…どっかで見たような」

そこには、少し色に変色したと思われる人形があつたのだ。

どこかで見たことがある気がする。

どこだろう。

他にも色々さぐっていると、さっきのような気持ちになる物ばかり

だ。

デジャビュか？

俺の脳の底からある記憶を拾い出した決定的な物がそこにはあった。

「あのときの…キーホルダーじゃないか」

そこにあったのは、小学校4年生のときに空に渡した星型のキーホルダーがあった。

『これは俺と空だけの物だから。』

そう言っただけ俺は、空が父親と引越しをしていくときに、あの当時俺の宝物だったこのキーホルダーを渡したのだ。

「空の…荷物か？」

ダンボールの中の物を見てよく思い出してみると、昔、空が使っていた物だった。

…ここに空の荷物が入ったダンボールがあるのは何故だ？

この家に住む？

すると、父親はどうなった？

もしかして、あの母親と再婚したのか？

いや、ありえない。

だって…あの母親他の男と寝ていたし！

色々考えていると、家のドアが勢いよく開いた。

「ただいま」。大地、もう帰ってたんだあ」

そこにいたのは、のんきな顔をした空だった。

「お、おかえり？　でいいのか…な？」

ウンウンと頷く空。

「そ、それより、なんでこの家にダンボールが？　と言うか、なんで空がここにいるんだ？　今日色々ありすぎて、頭がおかしくなっているから、分かりやすく説明してくれ。」

俺は息を整えて、聞く準備をした。

「あれ、聞いてないの？ 糞親父がどつかの馬鹿女との間に子供が出来ちゃって、俺は追い出されたっていうわけさ。一人暮らしは無駄に金がかかるからって言われてえ」

「俺が最後に見たとき、親父は確か38歳だったよな？ 今は46歳か？ そんな年で、よく子を孕ましたよな。」

「そんな年で、よく子を孕ましたよな。って、思っただろお？ 俺もそう思ったあ！」

「お前はエスパーか？」

空は、俺達と離れてから、喋り方と性格が変わって…ない！！

昔からエスパー気味っぽい所があって、のほほんとした性格だったからな。

「まあこれからこの家に住むのだろう？ 余っている部屋があるから、そこにダンボール運ぼうか」

俺はひとつダンボールを持って、歩き出した。

空も俺の後に続き、ダンボールを持ってきた。

部屋を少し掃除して、荷物を全部出して、整理するのは夜9時まで
かった。

ベッドやクローゼットなどの家具は、どうやら明日届くらしい。

俺は晩ご飯を空に作ってあげて、思い出話をしながら久しぶりに誰
かと食べる食事を楽しく終わらした。

#42 マイハウス（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、
net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

4 3 修学旅行前

あれから何日経ったが、3人で登校することが多くなった。

俺と空は…格好いい男子の部類に入るのだろう。

傍から見れば、雫が両手に花だ。

そういえば、早々と空のファンクラブ？ というものが出来ているらしい。

俺と違って、人当たりもいいし、顔もいい。頭もよくて、スポーツ万能。

どちらかというと、俺よりも空の方が主人公に向いている設定なのではないのだろうか？

登校中、後ろのほうから声がかかった。

「お、おはよう」

由梨だ。

あの話をして以来…というか、由梨がここに来てからは、昔みたいには接することは出来なくなったが、案外普通…ぎこちなさは残っているけど。

「由梨…おはよう」

しかし、やっぱり少し抵抗があるのは仕方が無い。

あんなことがあったのだから。

それはそうと、俺達がこんなにも気まずく挨拶をしているというのに、俺の横に居る空はというと、雫に一方的に話しかけている。

雫の返答は、「うん」「そう」など、10文字にも満たないほどの短さ。

それでも話しかけるといいう空の根性を俺は褒め称えよう。

…けど、俺の心のどこかでやはり、嫉妬？　というものがある。

「雫ちゃんはさあ、今度の修学旅行のイベント何にしたの？」

「カヌー」

しかも、いつの間にか空が雫の事を『池上さん』から『雫ちゃん』に変わっているし。

なんてこったい。

ちなみに、俺達は明日に修学旅行を迎えている。

イベントというのは、その修学旅行の中で普段味わえない事をするのだ。

選択肢は確か…カヌーとマウンテンバイクとか。

他にも多数あるのだが、俺はどうしても雫と一緒にしたかったから、メールで『カヌーにしよう!』と送ったのだ。

特に決まっていなかったらしく、『OK』の返事返ってきた。

あの時、家の中で喜んでたら、空に「大地…どうかしたの?」と心配されたっけ。

修学旅行には自由時間というものがある。

明と朋子の計らいで、その自由時間に雫と一緒に行動できるのだ。

修学旅行っていい!!

妄想に浸っていると、いつの間にか俺の体は学校についていた。

3組の教室の前では、雫とバイバイしなくてはならない。

一緒に帰るわけにも行かず、ここ最近はずっと2人きりという状況

が無いのだ。

なんとも悲しい状況。

メールをしていることが、俺のこの寂しさを紛らわしている。

電話をかけてもいいのだが、俺は空と違って話すのが得意ではない。

だから、雫と電話しても10分ともたないのだ。

『雫の声が聞きたくて電話した』なんて、恥ずかしくて死んでも言えねえ。

そんな事をいった日には、雫に絶交されたり…して。

いや…！

そんなことを考えただけで、胸が痛くなる。

熱くなる…。

学校では、ずっと雫の事ばかり考えていた。

隣にいる明と話しているときだけ、俺に笑顔があっただろう。

空と一緒に家に帰っている途中、空が「買い物行かなくちゃ！」と言い出した。

「俺も行くよ」

「いい！ 大地は先に帰ってて！」

そう言って、どこかへ行ってしまった。

俺は空の言葉に甘えて、家へと足を進めた。

そして、家の前に到着。

…。

と、到着したのはいいのだが、家の鍵を空に預けっぱなしだった。

「空に電話しようかな」

携帯を手に持って、空に電話…。

いや、せっかく買い物に行ってもらったんだし、気分悪くさせることを言う必要は無いか。

少し考えた後、俺は散歩に行くことに決めた。

向かう先は、あの川原。

10分もたっただろうか？ もうあの川原についていた。

「ここで…」

ここで、雫を助けたんだ。

あの時の俺は、荒れていたよな。

そう考えていると、何故か笑いがこみ上げてきた。

「ククク…」

「…何笑っているの？」

その声の持ち主は雫だった。

「雫！ どうして…ここに？」

そこには、制服、三つ編みモードの雫がいた。

「え？ そ、そんなことどうでもいいじゃない。大地は何故ここに？」

「俺？ 俺は…家の鍵が無くて」

そついうと、雫はボソツと「私と一緒にか。」とつぶやいた。

俺に聞こえないように言ったのかもしれないが、ちゃんと聞こえましたよ、雫ちゃん。

「へえ、雫も家の鍵がないんだ？」

クククと笑いながら言ってやった。

「ば、馬鹿！ 大地と一緒にしないでよ！ わ…私は、そう！ 散歩に來ただけよ！ 勘違いしないで」

「まあ、鍵ぐらい誰だつて忘れるさ」

「私の話聞いてないでしょ！」

「親はいつ帰ってくるんだ？」

雫は観念したのか、ひとつため息をついてこう答えた。

「今日は…夜遅いの。1時ぐらいかな」

「え？ 普通に遅いじゃん！ それまでどうする気だったんだよ」

「さ…散歩？」

馬鹿かこいつは。

「電話してみた？」

俺が聞くと、大きく頷いた。

「それで？」

「遠いところ行っているから、私たちが帰ってくるまでお友達の家
にでも居させてもらって。って…。朋子は今日、予定があって無理
とか言っていたから、どうしようかかって…」

…当てが無いってことね。

「…じゃあ、俺の家にくるか？」

…少しいやらしい言い方になったかもしれない。

#43 修学旅行前（後書き）

さて、題名どおり修学旅行前でしたw
修学旅行前は、皆さんはどうお過ごしでしたでしょうか？
私は極最近というのに、全く『修学旅行』のことを思い出せないですw

今回は、修学旅行前夜の です。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、
net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#44 修学旅行前夜の告白

「ただいまあ」

俺が雫を誘った後、川原で少し最近のことを話したりした。

…そんなに話は続かなかったけれども。

その辺は気にしたら負けなのだ。

そして家に帰るころには、空も家に帰っていて、家に入れた。

「おかえり！ 大地…と…？」

空が少し不思議そうな顔をしている。

それもそうだ。

俺の後ろには、あの雫がいるんだからな。

「ど、どうしたの？ 雫ちゃん」

「あゝ、なんか親が居なくて、家に入れならしいんだ。そこで、

たまたま散歩していた俺が雫を拾ったって訳」

「そうなんだあ」と、空は納得してくれたようだ。

「おじゃまします」

律儀に靴をそろえてから、俺の家に上がった。

前、俺の家に来たときはしなかったのに。

空が居るからか？

いい子に…見られたいのか？

もしかして雫は…

あゝ！ やめやめ！ 今は雫がいるんだ。少しでも楽しもう。

「雫ちゃん、ご飯食べていきなよ。親さんは何時頃に帰ってくるの？」

「１時ごろ」

「そつか。じゃあ、食べていきなよ。俺のご飯結構大地に評判なんだからあ」

ニシシと笑う空は、男の俺から見ても格好良かった。

なんか…悔しいな。

「じゃあ、俺の家にくるか？」

と聞いた後、雫は「えっ？」と少し困ったような顔をしたのだ。

この前、あんな事をしてしまったのだから、当たり前なのだろう。

けどなんだか悲しくなって…胸が熱くなった。

「ほら、空もいるから変なことはいないよ。安心して」

俺のその言葉で納得したのか、外でそこらの誰かに絡まれるより、俺のほうはまだ安全と思ったのかは分からないが、小さく一度だけ頷いた。

『空がいるから』ということでも頷いたのではないか…ということはあまり考えないようにしたのも事実だ。

雫が家に来てから少し時間が経ち、空と俺と雫でご飯を食べていた。

「雫ちゃんは、なんでカヌーにしたの？」

「え？」

「ほら、今日の朝言っていたよね？」

「なんか…面白そうだから」

「そっかあ。俺もカヌーにすればよかったなあ」

空と雫のその会話を聞いているだけで、なんだか辛い気持ちになってくる。

心臓がちくちくするような、そんな気分になってしまっから。

「だ…ち？　だ…い…ち！」

「うへ？」

「どうしたんだよ、ボーとしちゃって。大地は何にしたの？」

「俺？　カヌーだよ」

「カヌーかよ！！　俺と代わってくれよ。顔似ているんだし、バ
レないって」

「嫌だよ」

「けちっ！」

空には悪いが、俺は譲る気は無い。

だって俺は…雫が好きだから。

ご飯も食べ終わり、その後は結構楽しい時間をすごした。

家にあるゲームで雫と遊んだり、いつもよりたくさん色々話せたり、
空の質問のおかげで雫の事を色々知れた気がする。

好きな色とか、嫌いな食べ物とか、聞いたことも無かったからな。

そして、1時ごろになり、俺と空は雫を送っていくことに。

雫を見送ると、帰りは空と二人きり。

今日あったことや、楽しかったことを話していると、空がいきなり雫の話をし始めた。

「大地つてさ、俺が雫ちゃんを紹介する前から、雫ちゃんのこと知っていただろお？」

「え？」

「態度とか見れば分かるよお。その…大地は、雫ちゃんの事…好きなの？」

さっきまで笑っていた顔だった空の顔が真剣な顔になった。

その証拠に、足がぴたりと止まっている。

何故、その質問をする？

「そ、そんな…ことはないけど」

そついうと、空は俺に一度笑みを見せた。

「俺は、栗ちゃんのが好きだよ」

何故、俺に言う…？

#44 修学旅行前夜の告白（後書き）

これから、急展開の予感です。

「……………」、「い、い」

次回から、予定しているところでは最終章

もしかしたら、まだもう一章続くかもしれませんが。

修学旅行編スタートです。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言にくい人は、

net|toki|net@yahoo.co.jp にメールを送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailbox/form/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#45 修学旅行へ出発

「俺は、雫ちゃんが好きだよ」

その告白から、家に帰るまでは沈黙の時間が俺達の間にあった。

しかし、家に帰ってからというものの、空はそんなことも無かったかのように俺に接してくる。

…空は俺が雫の事をなんとも思っていないと思っっているんだもんな。

俺達は明日の準備を終え、布団へともぐりこんだ。

そして、朝がやってくる。

「だ〜い〜ちっ！」

ボン！ という音と共に、俺の体に痛みが走った。

「いつてえ！」

「やっと起きたあ」

この痛みの原因は、どうやら空が俺の体を布団越しに殴ってきたらしい。

布団越しでもこの痛さ。

さすがは俺の弟というべきだろうか。

「朝ごはん食べるから、早くリビングに来いよあ」

空はそういうと、鼻歌交じりで俺の部屋から出て行った。

俺はというと、未だに残っている痛みと眠気、両方と戦いながらベッドから降りていた。

着替えも終え、空の美味しいご飯が待つリビングへと足を運ぶ。

俺が行くころには、机の上には料理が並べられていた。

「やっぱ、空のご飯はうめえな」

「だろ？　だろ？　もっと褒めてえ！」

ニシシと笑うのがどうも空の癖らしい。

その笑顔が、女の子の心を掴むとも知らずに使っているのだろうか？

それとも、わざとなのだろうか？

いまいち、俺にはわからない。

ご飯も食べて、修学旅行に行く準備をして、いざ出発。

修学旅行へ。

集合場所は学校となっている。

どうやら、学校からバスで空港まで行くらしい。

目的地は北海道。

9月下旬のこの暑い時期に北海道とはなんともありがたい話なのだ。

いつものように電車に乗り、学校へと向かう。

次の駅では、いつもより大きい鞆を持った雫に会った。

「雫ちゃん！ おっはよお！」

いつも最初に挨拶するのは空と決まっている。

「おはよ」

そして、最近の俺はというと、雫に挨拶もしていないのだ。

挨拶できる雰囲気は空が作ってくれないというか、なんというか。

とりあえず、挨拶をしていない。

雫はいつものように、俺達のほうに一切見向きもしない。

空はそれでもかまわないかのように、一方的に話をしている。

たまに、雫から返事が返ってくる程度だ。

「雫」

電車を降りて、学校に向かっている最中、俺がふいに雫の名前を呼んだ。

「何？」

俺は何も言わず、雫が持っている鞆に手をかける。

「な、何よ!？」

「…持ってやる」

雫は、すんなりと手を離した。

やっぱり、重かったのだろう。

「お、落とさないでよ!」

「そこまで馬鹿じゃない」

しかし、俺の鞆ひとつと、雫の鞆…すっげえ重い。

思ったより、雫の鞆が重かったのだ。

よく、こんな重い鞆を持っていたな。

いったい何が入っているのか知りたいぐらいだ。

学校に着くと、空に雫の鞆を渡した。

「もってやれよ」というと、空は素直に頷いて、雫と一緒に3組の所へ行った。

雫が去り際に「ありがとう」と呟いたのは、気のせいではないと思っ
ておこつ。

#45 修学旅行へ出発へ（後書き）

修学旅行編スタートです。

一応、この章で終わりにしたいなあと思ってたりw
発展が急すぎてごめんなさい。

これから、少しどころとした小説になりますが、
どうぞよろしくおねがいします。

評価で言にくい人は、

net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/mlq
84s/mailboxform/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#46 修学旅行〜雪の隣〜

「寒くねえか…?」

「寒い」

修学旅行の行き先は北海道である。

9月の北海道というと、まだ暖かいのではないか？ と言う疑問を持つだろう。

しかし、雨が降っていて、凝るように寒い。

外の気温を掲示板で見ると、2度と表示されていた。

「雨、やばくねえか？」

「やばい」

こんな会話をしているのは、俺と明である。

外を見る限り、嵐がきているのではないか…と思うほどの大雨ぶり。

風も強くて、スカートであればパンツが見えるのではないかと

思っほどに。

雫はというと、空と一緒に楽しそう…とは見えないが、喋っている様子。

そんな姿を見て、俺は大きくため息ついた。

「嫉妬か？」

「ち、ちげえよ。そんなんじゃ…ねえって」

嫉妬…か。

「空って、雫ちゃんのこと好きなんだろう？」

「え！ 知っているのか!？」

「顔に書いてあるだろ」

空の顔をよく見てみる。

…顔には一切文字は書かれていない。

「どこにも書いてねえぞ？」

「そのボケはベタすぎる」

明がそういうと先生が「1組からバスに乘りますよ」と皆に言った。

俺達は先生の指示に従い、バスへと歩いていく。

雫は…まだ空と話していた。

バスの中では、みんな好き勝手にしている。

寝ているやつもいれば、トランプを出して遊んでいたり、カップル同士でイチャついていたり。

雫と離れている俺にとっては地獄のようである。

そのうち、目的地であろう場所でバスはぴたりと止まった。

「すつげえ！ 馬がいつぱい！」

クラス内の誰かがそう叫ぶ。

その言葉につられて、みんなは窓の外を覗いた。

俺はというと、明と一緒にバスを一番に降りる。

修学旅行のしおりに運よく書かれていて、運よく俺が持ってきたこの折り畳み傘を片手に持ち差した。

「これが自然の…においというのか」

「雨くせえだろ」

俺がせっかくこの自然に感動をしようとしていたのに、明が無駄なツツコミを入れてきた。

「…そうだな。」

まあ、否定はしないけれども。

俺達がバスを降りて数十秒後、雫の乗るバスが牧場に到着した。

ふと、そっちを見ると、バスの中で隣同士に座る雫と空。

…。

その光景を見た俺の心の中で、何かが暴れだしたのだった。

見つめていた先の光景に気付いた明が、無言で俺の肩をポンポンと叩いた。

俺は振り返り、歩き出した。

「くそっ！」

そして、牧場の後に行ったところでも、その次のところでも…雫の隣にはいつも空がいた。

近くにある壁を殴る。

彼女の姿を見ることが…嫌だ。

つらい。

苦しい。

そして、座り込む。

科学館の外だけでも、立ってはいられなかった。

霧のような雨が、風に乗って俺にぶつかってくる。

その雨が顔に当たると同時に、何かが俺の頬を辿り地面に落ちた。

この光景は、泣いているように見えるのか。

否。

…俺は泣いているのか。

人目を気にせず、俺の涙は外へと出てくる。

幸い、まだ学校の連中はこの科学館の中だ。

「大地…」

泣いていると、前方から明の声が。

名前を呼んだ後は、何も話さない。

俺はただ黙って下を向いた。

それでも、俺の涙は止まったりしなかった。

「うつ…うつ…」

俺の口から少し漏れる泣き声を、この雨の音で消し去ってくれないだろうか。

この辛い気持ちを、この雨水で洗い流してくれないだろうか。

#46 修学旅行〜零の隣〜（後書き）

さあてと

何故か大地が涙。

これから大発展よそうです。

評価で言にくい人は、

net|touki|net@yahoo.co.jp にメール
を送ってくださいるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/miq
84s/mailboxform/

で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#47 修学旅行、空の告白

あれから、皆が科学館の外に出てくるころには涙も止まってくれていた。

騒ぐ気分にもなれず、俺はバスへと向かう。

明は俺の後ろを心配そうな顔をしてついてきてくれた。

「大地…何かあったの？」

そう話しかけてきたのは、由梨だった。

「…なんでもねえよ。気にするな」

心配してくれる由梨の言葉を軽く流し、バスの中へと入っていった。バスの席に着くと、今更だが由梨の席が俺の後ろだということに気付く。

今まで気づかなかったのに、どうして今気付いたかって？

それは…由梨が話しかけてきたからだ。

「本当に大丈夫？ 体調が悪いなら薬もらってこようか」

「いらねえ。本当に大丈夫だから」

「でも…」

「大丈夫だって言っただろうが！！」

俺がそう叫ぶと、バスの中で好き勝手していた連中どもも静かになっ
ていた。

…何やってんだ俺。

八つ当たり？ だっせえ…。

心配してくれているのに、どうしてこんな態度をとってしまうんだ
ろう。

分かっているけれども、俺の心は今にも壊れそうなほど何かに締め
付けられていた。

最悪なことをしてしまったとは分かっている。だけど、由梨に謝る
ことはできなかった。

俺は明の隣で、ただ黙って外を見ることしか出来なかった。

しばらくすると、バスのエンジン音が消えた。

どうやらホテルに着いたようだ。

今日はこれで終わりということなのか。

俺はバスの中にある自分の荷物を持ち、ホテルへと入っていった。

中に入ると、先生がとりあえずクラスごとに整列をさせて、部屋別に鍵を渡していった。

二人部屋なので、俺はもちろんのこと明と同じ部屋を選択した。

鍵を受け取ると、俺と明は一番に部屋へと向かう。

先生が注意事項を言っているが気にしない。

どうせ分かりきっていることだ。

そんなことを言うなら、小学生相手にでもしてろ。

面倒なことをしていられるかつつの…

否。

違うんだ。

そんなことじゃない。

俺が、あの場所に居たくないのは…雫と空がいたから。

やっぱり二人を見ているのはやっぱり辛い。

「うわぁ！ 案外広いなぁ！」

部屋のドアを一番に開けたのは俺だ。

明に心配をかけさせないように、テンションを少し上げてみる。

「大地…」

「見てみるよ、あそこ！ 中庭なんてあるぜ。こういうホテルって飯も豪華なんだよな！ 7時だっけ？ 30分後だからホテル内を回ってから行くか」

出来るだけ笑顔で。

「そ、そうだな！　行くか！」

明もいつもと同じ笑顔を見せて賛同してくれた。

「じゃあ、荷物置いていくぞ！」

俺と明は荷物を置いて、部屋のドアを開けた。

部屋のドアが閉まると、ガチャっという音が聞こえる。

…どうやら

「オートロックかよ」

オートロックのようだ。

しかし、鍵は部屋の中。

「先生に頼んで、開けてもらうか」

俺がそういうと、明と俺は一緒に階段を下りて行くことに。

やっぱり、注意事項はしっかりと聞いておくべきだった。

男子の階は3階で、どうやら女子が2階のようだ。

俺達が2階から1階に降りようとするとき、そこに朋子と雫…そして雫の鞆を持った空がいた。

3人は楽しそうに会話をしながら、1階から階段をあがってくる姿がちらっと見えた。

俺は明と話しながら階段を降り始めても、どうしても雫達のほうに意識が向いてしまう。

重力に逆らわずにひとつ階段を下りるごとに、雫との距離がどんどん縮まっていく。

このまま行くと階段の中間地点で、俺達はすれ違う。

しかし、結局すれ違ったのは中間地点から7段ほど上の場所だった。

あきらかに、2階付近。

まだ3分の1も進んでいないであろう場所ですれ違った。

なぜならば、俺の足がそこで止まっていたから。

こんな会話が聞こえてきたら、止まらずにはいられない。

「空君って、ずっと雫と一緒に居るよね」

朋子がそう言うのと、空は「まあね」と女の子を惚れさせるような笑みを作っている。

「雫の事好きなんでしょお！」

「ちょ、朋子！ 何言い出すの！」

朋子がからかうような声と雫の慌てる声。

そして、次に空の声が聞こえてきた。

「雫ちゃんの事好きだよ？」

空がそういうと、雫はピタッと停止して、また息を吹き返したかのように歩き出した。

「そ、空も…何言ってるのよ」

恥ずかしそうにして顔を赤らめる。

…そして俺の思考すべてが停止した。

雫のその顔をみた瞬間ある確信を俺は持ってしまったから。

会話を聞かれていると知らずに、雫は恥ずかしそうに視線を空から背けていた。

背けた視線は俺のほうへと徐々に向き、最終的には目が合った。

「だ、大地…」

雫がそう呟いたのははつきりと覚えている。

そして、俺の横を走って通っていったのも覚えている。

しかし、後のことは全く記憶に無い。

いつの間にか俺は走り出して、ホテルを飛び出していた。

この寒い雨が降っている中、何も持たずに…。

#47 修学旅行の空の告白（後書き）

本気で大地をいじめています。

とても「コメディー」という枠からそれていきます…。
申し訳ない（ゝノゝゝ）ヌウ…

#48 修学旅行／心の崩壊／

「雫…」

外へ出ると、車の走る音と雨が地面とぶつかる音が聞こえてきた。

声にならないような声で『雫』と発音されている音は雨の音と車の走る音で消されていく。

「雫…」

もう一度名前を呼んだ。

名前を呼んだところで、何も変わらないのは分かっている。

俺に降りかかる雨は涙のように体全体にへばりついていく。

そして傷がついた俺の心の中へと入り込んで、俺に痛みを味合わせてた。

その痛みを負けて、涙がどんどんとあふれ出てくる。

「馬鹿野郎」

その声は後ろのほうから聞こえてきた。

声に反応して後ろを振り向くころには俺に降りかかる雨はなくなっている。

「あ…明」

「風邪引くぞ？」

明は持ってきた傘を俺の頭上で差す。

「う…ん」

「ほら、部屋に戻るぞ？ 鍵ももらっただし」

そんな優しさを持っている明に俺は従うしかなかった。

涙は押さえ切れないまま、声は出さないようにして部屋へと戻っていった。

途中、先生に心配されたが、明がなんとか誤魔化してくれたようだ。俺は逃げるように部屋へと戻ったから、どうやって誤魔化したかは知らないけれども。

明はドアの奥で倒れている俺に「シャワー浴びろよ」とせかす。

俺は立つ気がしなかったが、明に半ば強制的に立たされ服を脱ぎ風呂場へと行った。

シャワーヘッドから温水が俺に降りかかる。

さっきの冷たい雨とは違い、どこか俺を癒してくれる要素があった。

シャワーから出る水の水圧に耐えられなくなった訳ではないが、俺はその場へと座り込んでしまった。

暖かい水が俺の顔に降りかかる。

そのまま少しボーとしていると、風呂場のドアが開いた。

「飯…食いに行くか？」

当然そこにいるのは明だ。

心配そうな目をしている。

俺は無言で首を横に振った。

「わかった」

ドアが閉まると俺は息を吹き返したかのように、その場にたった。

そしてシャワーの水を止め、体を軽く拭き服を着てベッドへと足を進めた。

部屋全体を見渡しても明がない。

どうやらご飯を食べに行ったようだ。

ベッドの上でうつ伏せの状態になると、部屋のチャイムがピーンポーンと鳴り響いた。

けど今の俺にはそのインターホンを鳴らす主と会話をするなどの余力は残っていない。

しかし、次に聞こえてきた声で俺は不意に立ち上がった。

「私」

俺はドアの前に立ち、ドア越しで返事をする。

「何？」

「大地、ごめん」

謝るな。

「別に…悪くない」

「だとしても…」

「大丈夫だから」

ドアの向こうにいる人は少し黙った後、こういった。

「顔見て話したい」

それは困る。

今、お前の顔を見たら抱きついてしまう。

そんなことしたら…

「駄目…だよな」

悲しそうな声が、ドア越しに聞こえてきた。

「俺に好きな人いるの…分かってるよね？」

「…うん」

知っていると思ったた。

彼女は昔から、俺の感情のことは一番に気付くから。

「分かってるなら、一人に…してほしい」

その場から離れようとする「大地！」と呼ぶ声が聞こえた。

「私がいるじゃない…」

「由梨…」

そうドアの向こうにいる由梨なのだ。

雲じゃない。

もはや、彼女の声は泣いているように聞こえる。

どうしても放っておけなくて、俺はとうとうドアを開けてしまった。

そして、その場に倒れこんでいる由梨を俺は抱きしめてしまった。

その光景を雫に見られていたということを知るのは、もう少し後の話。

#48 修学旅行〜心の崩壊〜（後書き）

本当に、申し訳ない。

こんな展開になってしまつて…。

もう少し、辛抱のほどよろしく願います。

#49 修学旅行の二人の夜

「ごめん…」

抱きついた後、俺が最初に言葉を発した。

「抱きついて、ごめん」

由梨は涙を流しながら驚いた表情で顔を横に振っているけど、やっぱり駄目なものは駄目なのだ。

…けど、抱きついたことによって、なぜか心が少し軽くなった気がする。

少し沈黙をおき、俺は話し始めた。

「俺、好きな人いるんだ…」

だから由梨とは、もう戻ることは出来ない。

そう言おうとしたとき、由梨の言葉が俺の言葉を遮った。

「石上雫ちゃん…でしょ？ 3組の」

そこまで知っていたのか。

… なんていう情報収集能力だ。

「… 昔から大地は顔に出やすいの。」

涙も止まったのか、ニコツと由梨は笑った。

「だけど、私は… 諦めたくない。大地の事が好きだから」

俺は何も言えず、ただ黙って由梨の言葉を聞いていた。

「… 心配だったの。今日ずっと大地おかしかったから」

「由梨…」

「余計なお世話だね。ごめん…」

そう言って、下を向いてしまった。

悪くない。

由梨は悪くないんだ。

「謝るなよ……」

「うん」と頷いて由梨は無理やりニコツと笑いながら俺に「元氣出してね!」というと、走り去って行ってしまった。

ドアを閉め、俺はベッドの上で寝転んだ。

しばらくすると、ドアの開く音がした。

どうやら明が帰ってきたようだ。

「大地、起きてるか?」

「おう」

俺が返事をする「そうか」と呟いて、何かを机の上に置いた。

「飯、少し無理言っただけで持ってきてもらった。ちよつとは食べ。元氣でねえぞ?」

「ありがとう」

素直にお礼を言って、ご飯にありついた。

「大地、雫ちゃんだけだな…」

「大丈夫だから」

雫の事は聞きたくない。

せつかく、心が少し軽くなったというのに。

「大地…」

「そ、それよりも、ご飯やっぱり豪華だったな！ うめえ。持ってきてくれてありがとう」

俺はできるだけ笑みを作って明にそういった。

しかし、明は真剣な表情で俺を見ている。

「何があっただんだよ？」

「いや…その…」

明、唐突過ぎるぞ。

少しは前置きというものを持ってこようよ。

「なんで、お前は黙ってんだよ…俺達、心友って言ったじゃねえか」

「明…」

拳にグツと力をいれて、明は腕を振り上げた。

殴られる。

そう思って、俺は目をつぶった。

コッソ。

その音は、明が俺の頭を殴った音。

いや、つついた音といったほうが正しいか。

「正直に話せ、この野郎が」

ニコツと笑う明は、いつもの明だ。

「あのさ…」

俺は、空が俺に告白してくる話から、さっきの空が雫に告白するところまでを順を追って話した。

「そっか…」

大体的内容を理解したであろう明が一番初めに発したのはこの言葉だった。

そして、続ける。

「けど、その話だとまだ雫ちゃんは返事をしてないんじゃないか？」

「でも！ …でも、あの表情は…」

あの表情は、恋をしている顔だった…。

「大地、少し落ち着け。雫ちゃんは空に好きだと言ったか？ お前のことを嫌いと言ったか？ もし、お前の言うとおり、雫が空を好きだとしても、奪い取るうとは思わないのか？ そんなネガティブな思いを捨てて、一回しっかりと雫ちゃんと話してみろ。今日の飯の時だって、わざわざ雫ちゃんが俺に『大地、大丈夫？』って心配

して聞きにきたんだぞ？ 望みを捨てるなよ」

明は素晴らしい終わると、俺が食べ終わったご飯の皿を手を取った。

「明日は、イベントがあるんだ。雫ちゃんと一緒に力ヌーを選択したんだろ。この関係を打開するいい機会じゃねえか」

ニツと笑った明に俺は「ありがとう…」と呟いた。

#50 修学旅行く断固無視く

修学旅行2日目の朝。

昨日とはうって変わって、雲ひとつ無い晴れ晴れとした空になった。気温もそこそこ暖かくて、カヌーをするにはちょうど良いぐらいだろう。

俺達はホテルを出る準備を終え、バスに乗り込んだ。

バスはクラスごとに乗るのではなく、イベント事に分かれて乗ることになっている。

パツと見る限り、俺が乗るカヌー組みのバスには20人ほど乗っているようだ。

中には雫の姿もあった。

「あ、大地君！ 明君！」

そう叫ぶのは、雫の隣に座っている朋子だ。

人目を気にせず、手をブンブン振っている。

不良として恐れられている俺達の名前、しかも『君』で呼ぶ朋子に

バスの中の人たちの視線が集まった。

そんなことを気にせず、朋子は俺達に話しかける。

「私たちの前に座りなよお！　ね？」

いつもどおり朋子はテンションが高そうだ。

しかし、隣にいる雫は…どことなく元気が無い様子。

気のせいかな？

…いや、俺と会うことが気まずいのだろう。

「おっはよ、朋子ちゃん、雫ちゃん」

雫たちの前の席に着くと、明がいつもの爽やかスマイルで挨拶をする。

「おはよう！　明君！」

「おはよ」

朋子が返事をし、その後に雫が挨拶をする。

俺も…挨拶を。

「おはよう…雲」

俺は、何故か雲限定だ。

「……」

どうやら、今回は無視のようだ。

前までは、朝の挨拶を無視されることは多々あったが、最近では挨拶をしてれていた。

なのに、今日は挨拶をしてくれない。

悲しいぞ！

俺はそのあと、何も問わず明が座った席の隣に腰を下ろす。

後ろにいるのは雲だ。

どうしても、神経が後ろのほうに行っちゃって、なかなか心拍数が下がらない。

つまり、緊張しているのだ。

らしくない。

そのまま、目的地に着くまで俺は無言のままだった。

「あゝ！」

バスを降りると、明が誰よりも早く声をあげた。

そこは自然という言葉がぴったりあいそうな川と森が見える。

どうやら、ここでカヌーをするらしい。

バスを降りたところから少し進むと、カヌーらしきものが見えてきた。

そこで名前順で整列をさせられて、カヌーを教えてくれる先生の話
を聞くことに。

そうすると『イケヤマ』の俺と『イシガミ』の雫。

つまり前後になるわけだ。

前に居るしずくがどうしても気になる。

そんなことを考えていると、先生がよからぬことを言い出した。

「今回は二人一組でのつてもらいます！ いちいち決めるのが面倒なので、前後の子で乗ってもらうことにしましょうか」

言っのを忘れていたけれども、雫の前には先生しかない。

つまり、一番前に座っているということだ。

ということは…俺と雫が乗るわけ

「で…ええ！？」

俺がいきなり発したこの意味不明な言葉により、みんなの注目が先生から俺へと変わる。

「どうしました？」

「な、なんでもねえよ」

俺は恥ずかしくなって、顔を背けた。

先生の説明も終え、実際に乗ることになった。

雫は前に、俺は後ろに。

危険だからと、熱心に先生があれこれ教えてくれた。

まあ、前にいる雫が気になって、半分も頭に入っていなかったが。

「じゃあ行くよ」

そう言つて、先生がボートを押していく。

そして、少し川の流れに乗ると、手に持っているパドルで水をかき始めた。

この川は普段から水の流れが非常に遅く、学生たちがやるのにはうつてつけの場所だという。

気を抜いたら、すぐボチャンらしいが。

無言のまま漕ぎ始めて10分ほどがたったのだろうか？

この沈黙に耐えれず、俺はやっと口を開くことが出来た。

「し、栗…カヌー面白い？」

「……」

「…栗？」

どうやら無視らしい。

この状況で緊張のあまり、昇天しそうな俺にこの扱いはひどいものだ。

勇気を出して話したというのに。

その後も少し話しかけたが、全てスルー。

結局、今日は一言も話してはくれなかった。

…どうして？

無視をするんだ？

空を好きになったから？

やっぱり…やっぱり、俺のことが嫌いになったのか。

俺は、ホテルの布団の中、明にバレないように声を出さないように泣きながらその日の夜をすごした。

#50 修学旅行〜断固無視〜（後書き）

最近、大地が泣きまわってます。
すいません。
男の涙は…ね。

#51 修学旅行く口喧嘩く

修学旅行3日目。

予定では、山登りをするらしい。

この山登りの時間も、自由時間と一緒に、明と朋子の計らいのもと、雫と一緒に行動が出来るようにしてもらった。

そのことを最初に聞いたときは、明と朋子が神様に見えたのだが、今の俺にとっちゃ余計なお世話である。

『雫と顔を合わしたくない』これが俺の本音。

正常でいられる気がしない。

雫だって同じだろう。嫌いな俺と一緒に居ることを好まないはず。

いつそのこと…空と変わってもらおうか。

そんなことを考えていると、明に引つ張り起こされた。

「いつまで寝てんだ」

「今日：休む」

明は大きくそこでため息をついた。

「昨日、雫ちゃんに無視されたことが、そんなにショックだったのか？」

ギクッ。

いきなり核心をついてくるところが明らしい。

というか、何で明は知っているんだ？

「そんなことで諦めるほど、お前の恋心は弱いものだったのか？」

「あ、明に：何が分かるんだよ」

俺は意地になって、言い返してしまった。

明は悪くないのに、心配をしてくれているだけなのに。

下を向くと同時ぐらいに、俺の頬に何かがぶつかる感触が。

いや、これは殴られたのだ。

「いつて!!」

「目、覚めたか？」

明の目を見ると、本気で起こっている模様。

「覚めてるよ...」

「じゃあ、服着て出発するぞ。もう一度殴られたかったら、そのままでもいいが」

「わ、わかったよ」

俺は嫌々ながらも服を着て、ホテルを出発した。

本日の山登りのスタート地点は、どうやらこのホテルの傍にあるらしい。

そこまで歩きで向かうというわけだ。

山で死ぬほど歩かなければいけないのに、こんなところで体力を消費させるのか。この学校は。

そして、数分が立つ。

歩くのが飽きてきたなと思うところに、山登りスタート地点であろう場所に着いた。

やばい。

そろそろ雫と顔を合わす。

少し、憂鬱になってきた。

俺はなんとか、雫がいるであろう場所を見ないようにして、俺は先生の説明を聞いている。

その説明も全く、頭に入っていないが。

「じゃあ、この前分けたグループで山登りをするからね！　まずグループごとに集まってちょうだい」

先生がそついうと、ざわざわ騒がしくなって、みんなが動き出す。

俺はその場に座ったままでいると、俺のグループであろう3人が集まってきた。

大地、朋子、そして…雫。

「大地、いくぞ？」

明に思いっきり引つ張られ、無理やり立たされる。

そして、先生の下へ。

どうやら、出発をする前に点呼をとらなければいけないらしい。

「気をつけて行って来い。何かあったら、すぐ近くの先生に言うんだぞ」

先生のその言葉に明が「はあい」と答えて歩きだした。

先頭を歩くのは、いつもと同じ明。

気を利かせてか、なんだか分からないが、その隣に朋子がいる。

つまり、その二人の後ろにいるのは俺と雫というわけで。

ありがた迷惑というか、なんというか。

俺も雫も一緒に居たくないのに。

本当に、勘弁してくれ。

「だ、大地…そのごめんね？」

雫がいきなり話しかけてきた。

何を「ごめん」なんだ。

俺を昨日避けたことか？

嫌いになったことか？

それとも、俺の気持ちに答えられないことを？

「別に」

俺はぶっきらぼうに答えた。

別に、今更…。

空と雫なら幸せにやっていけるだろう。

「そ、そういえば空がね！」

空の話題か…。

そのあと、雫が何かを話しているが、俺の耳には入ってこない。

いや、入らないようにした。

だって、馴れ初め話なんて聞きたくない。

「大地？」

「何？」

「話、聞いてる？」

聞いてない。

そう言おうとしたけど、言葉にならなかった。

そのまま喋らないまま無視状態に。

そうすると、雫も黙り込むような形になった。

「この辺で、お昼食べようか」

明がそういうと、俺たち4人は足を止める。

俺は、鞆から先生に渡されたお弁当を取り出した。

そうすると、明が持ってきただろうシートを広げて、3人が座っていることに気付く。

その輪にどうしても入ることが出来なくて、少し離れた所で俺は弁当を食べ終わった。

そして、再び4人で歩き出す。

しばらくすると、頂上らしき場所に着いた。

「おーっ！」

明がこの光景を見て、叫びだした。

いつもの俺なら、ああやって叫んでいるんだろうな。

「すごいねえ……」

その次に朋子が言葉を発した。

雫は、朋子の隣で楽しそうに話をしている。

俺は、その光景を後ろでじっと眺めているだけ。

はあ、早く帰りたい。

そんなことを思いながら数十分。

頂上にいる先生に点呼をうけ、そのまま山を下ることになった。

帰り道。

いつもより、積極的に雫が話しかけてくる。

しかし、俺の返事はほとんど無に等しい。

返したとしても「そう」など、いつもの雫バージョンだ。

そうだ。

そんなことをしていると、雫が再び黙りだした。

そうしてる。

お前は、俺じゃなく空と楽しく話すべきなんだ。

「だっ、大地の馬鹿っ！」

いきなり、雫が叫んだ。

「そうか」

「何で…何でそんな態度なの！？　せっかく私が話かけてるのに！」

『せっかく？』

その言葉に俺の思考回路の何かがちぎれた。

「別に、誰も頼んでいねえだろ！ 雫は空と楽しく話していればいいだろ！」

「なんで、空が出てくるのよ！ 大地なんか…大地なんか、由梨さんと仲良くしてればいいじゃない！」

「な…お前こそ、何で由梨を出すんだよ！ 意味わかんねえ」

「だっ、抱きしめてたじゃない！」

雫のその言葉に俺の思考回路は一瞬停止した。

何で…知っている？

あの日の夜のことを。

「お、お前…覗き見してたのか？」

「違うわよ！ み、見えただけよ。もう…大地なんて知らない！」

雫はそう言って、来た道へと戻って行ってしまった。

「お、おい、大地！」

「…俺は帰る」

俺は、追いかけることもせず、そのまま山を下りはじめた。

#51 修学旅行く口喧嘩く(後書き)

さて、そろそろ終盤も見えてきました。
あと6話? 7話? ぐらいで終了予定です。
もう少し短くなるかもしれません。

#52 修学旅行く行方不明く

山を下り終え、俺はホテルのベッドで寝転んでいた。

なんだよ。

なんなんだよ。

山で妙に話しかけてくれていたのは、『空と付き合っから、諦めて
って言うタイミングでも伺っていたんだろっ。』

…そんな話、今更俺には関係ない話だよ。

あんな奴…もう知るもんか。

空と、仲良くしていれば良いんだ。

俺を…放っておいて。

「クソッ！」

そう叫ぶと同時に、ドン！ という鈍い音が響いた。

俺が右手の拳でベッドを殴ったのだ。

「知らねえよ……」

その右手をそつと目の前まで持つてきて、視野を隠した。

どんどんと、手の平が濡れてくるのが分かる。

また、俺は泣いているのか。

「だっせえ……」

どうやら、こつという状況になると、独り言が多くなるらしい。

そんなことを考えていると、勢いよく部屋のドアが開いた。

「大地!!」

明だ。

息が荒い。

どうやら慌ててここへ来たらしい。

「なんだ？」

「栗ちゃんが…」

「栗が…どうした？」

ハア、と大きく息を吸うと明は真剣な目でこう言った。

「居なくなった」

い、居なくなった？

どういう意味だよ。

「え？」

俺が聞き返すと、明はもう一度息を整えて

「居なくなった。…行方不明なんだ。あの後、少し一人にさせてやろって俺が言わなかったら…」

そう言って明は座り込む。

明、何が言いたいんだ？

「お、おい！ 何があつたんだよ！ 分かりやすく言え！」

「大地と雫ちゃんが喧嘩して、雫ちゃんが無処かへ行っただろ？
あの後、俺が少し一人にさせてやろうって朋子ちゃんに言つて、あの場所で待機していたんだ。いくら待つても雫ちゃんが戻つてこないから、下ってくる奴等に、雫ちゃんを見かけなかったかつて聞いたんだけど……」

「誰も見ていないってオチか」

そんなこと、あるのかよ。

遭難なんてものは、アニメやドラマの中だけにしてくれ。

「とりあえず俺は、雫を……」

…探してくる？

俺じゃなく、空に頼めば良いだろう。

もし『運命』というものがあるのなら、空が見つけるはずだ。

だけど…それでいいのか？

ここで探しにいかなくて、後悔をしないのか？

たとえ、遭難者が雫じゃなくても、探しにいくべきじゃないのか？

「…雫を探してくる。明はそのことを先生と空に言ってきてくれ」

明の「分かった」の言葉を聞いた後、俺は猛スピードで部屋を飛び出していった。

どうか無事であってくれと心の中で祈りながら。

山登りスタート地点にとりあえず俺は向かった。

そこに立っている先生に聞くと、どうやら雫はまだ降りてきていないらしい。

『何があつたんだ？』と聞かれたが、こんなどうしようも無さそうな先生に説明する暇が惜しい。

「明に聞いてくれ！」

そう言つて、俺は自分が降りてきたルートを再び走り出した。

人目を恥ずかしがらず、俺は大声で雫の名前を呼んだ。

しかし、返ってくる言葉は無い。

こんな状況になつても、無視するほどあいつも馬鹿じゃないだろう。

「雫、いねえのかよ！」

探し始めて、もうそろそろ2時間が経過しようとしていた。

その時ふと足元を見ると、人気のないほうへ進んでいっている足跡を見つけた。

どうやら、一昨日の雨のおかげで陰になっている部分の地面がまだ水に濡れているようだ。

しかも、この足の大きさは…。

「雫かもしれない」

俺はそう呟いた後、その道を進んだ。

その中を進むごとに、どんどん道が狭くなっていく。

「おっと！」

進んでいると、いきなり足場が無くなる場所があった。

どうやら急な坂になっているらしい。

「あつぶね」

そう呟いて、下を覗くと人影がちらつと見えた気がした。

まさか、雫？

そう思い、雫の前を叫ぶ。

すると、反応があった。

「大地？」

その声の持ち主は、確かに雫だった。

#52 修学旅行（行方不明）（後書き）

ベタベタの展開です。

もう少しで最終話となっておりますので、最後までお付き合いをお願いします。

#53 修学旅行、強制連行、

「雫か!?!」

俺はそういいながら、急な坂をゆっくりと下りていった。

一番下まで行くと、少し大きな石に腰をおろしている雫がいた。

「大地!」

「雫!」

そう叫んで、俺はギュッと雫を抱き寄せた。

「大丈夫か?」

「う…」

その反応からすると、どうやらどこか怪我をしているらしい。

「どこだ?」

雫はもう一度石に腰を下ろし、そっと右足のズボンを少し上げて、足首を俺に見せてきた。

「ひでえな」

そつとう腫れている。

骨折とまでは行かないが、どうやら捻挫をしているらしい。

「だ、大丈夫！」

そつ言う雫の足をギュッと握ってやると、小さく『痛ッ』と呟いた。

「馬鹿か。無理するな。今、助け呼んでやるからな」

そう言って、俺は右ポケットに手を突っ込んだ。

…あれ？

「無い」

確かに朝の山登りの時には入っていた携帯が、ポケットから消えていたのだ。

「馬鹿じゃないの」

どうやら、俺が携帯を忘れてきたことに気付いたらしい。

「せっかく助けてやったのに、馬鹿よばわりは無いだろっが」

「別に、助けてなんて言っていないせん」

そう言っつて雫はそっぽを向いた。

こんの…。

「そうかい、そうかい！　じゃあ俺は一人で帰りますよ！　空でも呼んで、この人目につかない場所でイチヤイチヤしていればいいだろうが」

「だ・か・ら・なんで、大地はいつも空の名前を出すのよ！　大地なんか、早く由梨さんの下へ帰ってあげたほうがいいんじゃないの！？」

「そうさせてもらいますよ！」

そう言って、俺は立ち上がって去っていかうとした。

その時、再び雫の『痛ッ』という言葉が耳に入った。

くそっ。

なんてお人よしなんだ、俺は。

「早く、乗れ」

俺は再び雫の下へ寄って、腰を下ろしおんぶが出来る格好になった。

「ば、馬鹿じゃないの！？ 恥ずかしいじゃない！」

「恥ずかしいのか、ここで死ぬのかどっちがいい？」

「死ぬほうがマシよ！」

はあ、この女はどこまでも…。

俺は雫の手を持って、強制的におんぶの格好になった。

「な、何するの！ 降ろして！」

「却下」

「も、もう……」

諦めたのか、俺の腰の上で暴れるのをやめた。

とりあえず、この急な坂を上るしかないのか。

一歩踏み出してみる。

…なんか無理そうだぞ。雨でドロドロになった地面に足がとられそうだ。

俺は別ルートが無いか探してみる。

…無い。

はぁ、と大きく息を吐いて俺は意を決した。

急な坂に挑戦だ。

雪の重さプラス地面の不安定な坂を、この強靱な太ももでなんとか上りきった。

そして、あたりを見渡すと真っ暗になっていることに今更気付く。

周りで何も足音がしないということは、どうやら搜索をしていないようだ。

そのまま正規ルートに戻り、俺はもう一度雫を背負い直した。

「大地……」

俺の背中で何か言おうとしている。

「……何？」

「あ……」

「何だよ」

俺がもう一度聞くと、大きく息を吐いて「ありがとうね」と呟いた。

この言葉を聞けるのも、あと何度あることか。

こいつをホテルまで連れて行ったら、多分保険の先生が雫の面倒を見るのだろう。

そして、そのあとは今までと同じ、空のもとへと行ってしまふ。

…今度から学校へ行くときは、電車の時間を変えなきゃ駄目だな。

俺はそんなことを考えながら「気にするな」と答えた。

そして、雫を背負って歩くこと1時間、なんとかホテルまで着いた。

そこには、先生と明、朋子、そして空が立っていた。

「雫ちゃん！ 大地！」

そう叫んで一番に、俺達に近寄ったのは空だった。

「大丈夫？」

そう聞くのは空。

雫は小さく頷く。

その光景が、なんとも羨ましくて…まぶしくて。

「空、雫を保健室に連れて行ってやってくれ」

俺はそう言って、雫をそつとおろした。

空は大きく頷いて、雫に肩を貸し歩いていく。

それに朋子はついていった。

俺はというと、雫の姿が見えなくなった後、その場にどつと座り込んだ。

#53 修学旅行、強制連行、（後書き）

さて、最終話まであとこれを除き3話となりました。
最後までお付き合いお願いします。

#55 修学旅行、最終確認

しばらく座り込んだ後、俺は明に肩を貸してもらいながら、自分の部屋へと戻っていきこうとしていた。

「大地」

3階へと上がろうとする階段手前。

そこには、俺の名前を呼ぶ声の持ち主は空だった。

「雫はどうだった？」

いたって普通に。

心の傷を負っていることを気付かれないように、雫の事を聞いた。

「今は疲れて寝てる。ちょっとした捻挫だってさ。一週間もすれば歩けると思うって言ってたよ」

「そうか。ありがとう」

空は小さく首を横に振った。

「大地…」

何か言いたそうな顔で俺を見つめる。

「何？ なにかあったか？」

「…本当に、俺：雫ちゃんとうちやうよ？」

え？

「大地、それでもいいの？」

雫を空に取られる？

…いや、今更何を考えているんだ。

雫は空が好きで、空は雫が好き。

俺が諦めればいいだけの話。

難しい話じゃない。

難しい話じゃないけど…。

俺が何も言えずに、その場に立っていると、先に空が口を開いた。

「明日、俺は雫ちゃんにはつきり好きと言う。そこで何が何でも雫ちゃんを手に入れるから！」

空の顔はいつもと違って、真剣な表情だった。

この街に戻ってきてから、こんな真剣な表情を見るのは初めてかもしれない。

「そ、空…」

俺が言葉につまっていると、空は階段を上がっていく。

立ち止まっている俺を見かねて、隣にいる明が「行くぞ」と呟いて歩き出した。

部屋に着くと、さっきまでの疲れがどっと押し寄せてきて、さっきの会話を気にする余裕も無いぐらい、俺は睡魔という悪魔に未知の世界へと引きずり込まれた。

そこは見慣れた町並み。

人がぞろぞろと歩いている中心に俺は立っていた。

立ち止まっているというのに、誰一人として、俺を気にも止めようとしな。

なぜだ？ どうしてだ？

そんな中、俺は周りを見渡していると、ある建造物の柱の隣に一人の少女がいた。

その容姿は完璧で、百人中百人が見ても可愛いというだろう。

俺は、その可愛さのあまり、とっさに話しかけようとする。

「おい、君！」

俺がそういうと、ふとこっちを向いて彼女はニコツと笑った。

しかし…その笑みは俺に向けられているものではなかった。

気がつくと、俺の隣には、俺…いや…これは空か？

その空の顔を見るのをやめ、もう一度女の子の顔を見る。

そこには美人モードの雫が立っていた。

何かを楽しそうに話している。

そして、雫と空は手をつないで俺の下から去って…

「うわぁ！」

俺は飛び起きた。

「ゆ…夢かよ」

けど、この夢もそのうち現実になるんだろうな。

「どうした…？」

どうやら明が俺の声で起きてしまったらしい。

「わりい、起こしちゃったか」

ふと俺は近くにある時計に目をやる。

5時半。

普通の俺なら、もう一眠りするところなのだが、目が覚めてしまったようだ。

もう一度、明のほうに目を向けると、どうやら寝てしまったらしい。

ここにいてもすることが無いから、俺はそつとドアを開けて一階のロビーへと向かってみた。

階段を一段一段下りることに、太ももに痛みが走る。

どうやら、昨日の出来事で筋肉痛になったようだ。

そんなことを考えていると、ロビーに着いた。

そこには、椅子にゆったりと腰を下ろしている雫の姿があった。

「大地……」

先に声を出したのは雫。

雫の言葉の後に俺は「足、大丈夫か？」と聞いた。

「うん。だいぶ腫れも引いて、全然大丈夫だよ」

ん？

空の話だと、全治一週間じゃなかったのか？

「そうか。よかったな」

「大地…その、ありがとう」

「…おう」

なんだか気まずい雰囲気の流れてしまった。

「今日、行けないんだ」

「え？」

「今日の自由行動。足を捻挫しちゃったでしょ？ だから、今日はホテルで大人しくしておきなさいって先生が」

そうだったのか。

「そっか。ゆっくりしておけ。土産買ってきてやるよ」

ありがとう、と微笑む雫を見て俺は心に何か染みるもの感じた。そして、もう俺に向けられることは無いんだよなと考えると、悲しみがこみ上げてきた。

だけど、これを表情に出すわけにはいかない。

「あ、もう皆が起きる時間だね。部屋に戻らなきゃ」

そういうと、雫は一人で立って、捻挫した足を少しかばいながら戻っていった。

俺は、その姿を眺めた後、明が待っているであろう部屋へと足を進ませた。

#55 修学旅行、最終確認（後書き）

夢の世界のようなものを、書くのは初めてで、かなり困惑しました。かなり分かりにくいかもしれませんが、そのところはお許しください。

次回はちょっとかわった書き方をしました。

#55・5 修学旅行へ決意・告白へ

「そ…ら？」

俺は立花 空。

大地の双子の弟であり、恋のライバル相手でもある。

そんな俺は雫ちゃんがいる保健室…じゃなくて、保険の先生の部屋に俺はやってきた。

保険の先生の部屋と言っても、先生は別の用事で今はいないのだが。

「はあい！ 雫ちゃん元気い？」

俺がドアを開けて話しかけると、雫ちゃんは驚いた表情で俺の顔を凝視した。

理由は、何故か分かっているけれど。

「…自由行動行は？」

「風邪引いたって言って、休ましてもらったあ」

「風邪!？」

心配そうな顔をする三つ網の彼女の顔を見て、俺はニコツと笑う。
なんとも、その表情が可愛いのだ。

「でも、安心して！ 仮病だからさあ」

ニシシと笑ってやると、心配の表情が、呆れた表情に変わっていく。

「コラ、サボりはよくない」

「でもね、理由がちゃんとあるんだ」

「サボりに理由も何もない。今なら間に合うから、行っておいで」

ぶっきらぼうに返事をする彼女が、また愛おしく思う俺を誰が責める。

「駄目なんだ」

「何故？」

雫ちゃんは不思議そうな顔をして、一瞬だけこっちを見た。

その後は、窓の外へと視線を移す。

この前、俺に「好き」って言われたことなんて、「冗談と思っているんだろうな。

「それは…雫ちゃんに、ちょっと言いたいことがあって」

「私？ 何？」

そう返事する彼女の意識は、もはや俺を見ていなかった。

窓の外にいる俺達の学校の連中を見ている。

いや、複数形はおかしいか。

…大地を見ている。

俺は知っている。

大地が、俺に嫉妬していることを。

それによって、雫ちゃんとの関係が悪くなっていることも。

雫ちゃんが、大地と由梨さんが好き同士だと勘違いしているということも。

俺は知っているんだ。

知っている上でこのような行動をしている。

俺は、最悪な男だ。

「雫ちゃん、真剣な話なんだ。こっちを見てくれないかなあ?」

俺がそういうと、雫ちゃんは素直にこっちを向いてくれた。

そして再び「何?」と俺に聞く。

本当に何も分かっていないんだよな、この子は。

「雫ちゃん、俺好きだよぉ！ 雫ちゃんのこと」

「なっ、いきなり何言い出すのよ。…私も好きだけど？ 空のこと」

…ここは素直に喜ぶところなのだろうか？

「大切な友達と思ってる。これからよろしく」

雫ちゃんがそう言った瞬間に、俺は吉 興業も驚くようなずっこけぶりをみせた。

…そういうオチだとは思っていたけど、やっぱり期待するじゃないか。

ああ、少しでも期待した俺を笑ってくれ。

「ちがう」

「え？」

何が違うの？ のような、顔をしている。

本当の馬鹿だ、雫ちゃんは。

「そうじゃない、俺と雫ちゃんは根本的なことが違うんだ」

「当たり前。男と女なんだから」

…こんな調子じゃ告白できそうもない。

「…いい？ 聞いて」

俺が真剣にそういうと、雫ちゃんはすこし真剣な顔をしてくれた。

「何？」

俺は大きく息を吸って、その空気をどつと吐いた。

こんなことを言うのは、生まれてこの方初めてだ。

心臓が今にも爆発しそうなほど、バクバク動いている。

回りもあまり見えていない気がする。

俺が見ているのは雫ちゃんだけ。

「俺、雫ちゃんのことを大好きだ。雫ちゃんのいう『お友達』感覚じゃない。俺は一人の女として雫ちゃんが好きだ。大好きなんだ。…好きなんだよ」

「そ、空…」

雫ちゃんは動揺して、目をキョロキョロしている。

もう一押し。

彼女の心は今傷ついている。

あと少し押せば確実に雫ちゃんは俺の物になる。

そうすれば、大地も完璧に諦めてくれるだろう。

雫ちゃんも俺しか見ないだろう。

大地の事を思い出してくれるの…だろう。

だけど、なぜだ？

俺は今、何を言おうとしている。

もう、止めようと思ったときには口が動いていた。

「…でも、雫ちゃんは大地の事が好きなんだよね。今から大地のところに…行っておいでよ。俺なら大丈夫だから」

「す、好きなんかじゃ…ないわよ」

大地と由梨さんのことを考えたのか、雫ちゃんの瞳から涙がこぼれてきた。

俺は雫ちゃんをそっと引き寄せて、ぎゅっと抱きしめた。

「雫ちゃん、少し素直になったほうがいい。もう一度大地と話をしておいで」

涙声を出す彼女の背中をさする。

彼女は小さく頷いた。

とりあえず、俺は少し雫ちゃんと距離をあける。

「空、ごめん…私」

それ以上言わないでくれ。

「分かったから。ほら、いっておいで。早くしないといつちやうよ？」

パンツと背中を押して、俺はいつもの笑顔で雫ちゃんに言った。

雫ちゃんは大きく頷く。

そうすると、捻挫している足をかばいながら立ち上がった。

足を痛めながらも、彼女はドアのほうへ走っていく。

本当は痛いくせに、大地に会いたいからって。

雫ちゃんがドアを開けて、大地の下へ走っていくのを見届けると、さっきまで雫ちゃんが座っていたベッドの上に俺は体を寝転ばせた。少しの間だったけど、雫ちゃんとの日々を俺は忘れることは出来ないよ。

ここまで好きになったんだから。

自分がよければ、それでいい。そんな考えだったのに。

今回は少し違ったようだ。

雫ちゃんの幸せを願ってしまった。

今、彼女を本当の幸せに出来るのは大地しかない。

「あゝ、本当の馬鹿はこの俺か…」

そんなことを呟きながら、俺の人生最大の恋ははかなく散っていった。

#55・5 修学旅行へ決意・告白へ（後書き）

空視点です。

本当は、大地目線オンリーで書こうとしたのですが、どうしても、この話を書きたくて。
はい。

もう、明日最終話です。

最後まで、お付き合いのほうよろしく願います。

最終話 修学旅行、雫との日々

雫とロビーで話してから、俺は部屋に戻った。

その後は、着替えを済ませ、ホテル内で用意されている朝御飯を食べに行く。

その朝御飯が用意されている場所には、雫の姿は見当たらなかった。どうやら、捻挫しているために、保健の先生がいる部屋でご飯を食べるようだ。

俺はご飯を食べ終え、朝の集合場所である中庭に足を進めた。

今日は、自由行動をする日。

雫がいないから、事実3人で行動することになる。

明と一緒に向かうと、集合場所にはもう朋子がいた。

「明君！ 大地君！」

そう言って、いつものように手をブンブン振る朋子。

多分、これからあんな感じで俺達と呼ばれるのだろう。

「雫は今日、来れないんだってさ」

朋子は悲しそうな声で、そのことを俺達に告げた。

明も「そうなんだ」と言つて、少し落ち込む様子を見せる。

俺は、そのことを多分、誰よりも早く雫から今日の朝聞いたのだが、あえてこの場所では言わない。

なぜかって？

深い意味は特に無い。

「空君も、今日風邪でホテルに残るらしいし」

…空もホテルに残るのか。

風邪なんて、どうせ仮病だろう。

その理由は多分、雫に告白するため。

こんな機会、もう他にないからな。

そして、雫がOKを返す。

…想像すると、少し胸が痛くなったが、これくらい我慢しなきゃ、これからはもたない。

空と雫が二人で並んでいるところを、毎日見なくてはいけない日々になってしまうのだから。

そう、あの夢のような。

今までの日々は本当に楽しかった。

最初は雫が俺にぶつかってきたことから始まったんだっけ。

そういえば、あの時はどうして美人モードの雫だったのだろう？

…考えても意味ないか。

もう、終わったことだ。

三つ編みモードの雫を見つけて、本当にびっくりしたのも覚えている。

雫があの時、定期を落とさなければ、もう話すこともなかっただろ

う。

だって、美人モードの雫に会うことなんて、もう無いじゃん？

そして、不良にからまれているのを助けたり、そのお礼をかねてデートをしたり、隆一のグループと喧嘩したり、俺が雫に気持ちを伝えたり…。

色々あったよな。

雫との日々を俺は思い出していると、心がとても痛くなった。

泣くな俺。

こんな人前で、泣いては駄目だ。

「大地？」

明の声で、俺の正常心が戻ってきた。

「お、おう。どうした？」

「お前こそどうした？ そんな…顔して」

心配そうな顔をしている。

何もないと言っても、明には通用しないんだろうな、多分…。

「まあ、気にするなよ」

俺はできるだけ笑顔で明に答えた。

これで誤魔化せないことは百も承知。

そんな俺の心境を察知してくれたのか、明は「そっか」と言ってくれた。

そして、先生がタイミングよく、出発の合図の言葉をかけた。

生徒たちは、その先生の指示に従って、バスのほうへと歩いていく。

今、雫は何をしているだろうか。

空の告白をつけて喜んでるところかな。

……。

もう、諦めよう。

そう、思ったときだった。

俺の目に、捻挫した足を少しかばいながら走ってくる三つ網モードの雫の姿が飛び込んできた。

顔は痛みをこらえている表情をしている。

雫、どうした？

お前は、ここにいてはいけない。

空のところへと帰るべきだ。

何をしている…。

「大地！」

そう叫んだのは、まさしく雫だった。

「し、雫…」

しかも、ここは今年3年全員が集まっている場所である。

大声で叫んでは、注目されてしまうぞ？

雫、嫌がっていたじゃないか。俺と関わりあることが、他の皆には
れてしまうことを。

それなのに何で、俺の名前を叫ぶ。

「大地！」

さっきより近い場所で、もう一度雫は俺の名前を叫んだ。

周りから注目されているのを知らないのか、知っているが気にして
ないのかは知らないが、俺の下へと声を張り上げて走りよってきた。

朋子が走ってきた雫に「大丈夫？」と聞いても、息を整えながら「
大丈夫」と答えるだけ。

そして、雫は俺の顔を睨んだ。

「な、何してんだよ、雫」

「べ、別に…その、皆を送りにきただけよ」

そういう彼女の目は、めずらしく俺の目をしっかりと捉えていた。

「空のところ、行かなくていいのかよ？ 多分、あいつ待ってるぜ？」

その言葉にびっくりしたのが、雫は目をはっと開かせた。

「なっ、な、なんでよ」

「だって、その…空の事好きなんだろう？」

自分で、何言ってるんだか。

せつかく、俺達を送りに来てくれたと言うのに、こんな事を言うなんて。

ありがとう。のひとつ言えればいいのにさ。

素直になれないな、俺って。

ほら、俺がそんなことを言うもんだから、下を向いて雫はじっと黙ってしまったじゃないか。

申し訳ないとか、そういう感情を俺に持たないでくれ。

俺は、お前が幸せならそれでいい。

諦めがつく。

俺は、今まで見せたことの無いような満面の笑みで雫に「送ってくれてありがとう」と言った。

すると、彼女は下を見ながら首を横に振る。

俺はぐるっと振り返って、バスの方向へと足を進める。

そういえば、祭りの雫は可愛かったな、とか想像しつつ、今までのことをそっと思い出しながら。

5歩ぐらい歩いただろうか。

聞き覚えのある叫び声が再び俺の背後から聞こえた。

「大地!」と。

俺はその声に反応して、振り返る。

そこにいるのは、さっきの雫とは違った。

いや、雫は雫なのだが、また違った雫だった。

そう、美人モードの雫。

あれほど、俺と朋子以外に見せたがらなかったその姿を、この2年生全員がいるであろう場所でその姿を現した。

「し、雫！」

俺は着ている上着を脱ぎながら、雫の下へと走りよった。

そして、上着を雫の頭からバサッとかける。

「な、何してんだ！ その姿見られると、またストーカーとか…現れるかもしれないぞ？」

雫はそっと、頭にかかっている俺の上着をどけて、またしっかりと俺の目をしっかりと見ている。

「だったら、私を守ってよ！」

え？ 今なんて？

雫は人目を全くと言っていいほど気にせず、俺にいきなり抱きついてきた。

「私、大地のこと好きだよ」

「え…え？」

「だから、私は池山大地が好きなの！ 分かった！？」

俺に抱きつきながら、少し頬を赤らめた顔だけ上に向いている雫の姿は、世界で一番可愛いと思った。

これは嘘じゃない。

「し、雫？」

俺が雫の名前を呼ぶと、そっと雫は一歩二歩と俺から離れていった。

「…でも、大地は由梨さんが好き…なんだよね」

「…は？」

不覚にも声が裏返ってしまった。

「し、雫、何を言って…」

「わかってる。もう、諦めるから」

俺が最後まで言う前に、雫は俺の言葉を遮って後ろをむいた。

「ちょっと待てよ!」

俺はそう言って、雫の肩をぎゅっと握る。

「お前、勘違いしてる」

俺に肩を握られ、雫はこっちを向くと、今にも泣きそうな顔をしていた。

「俺の気持ちは…雫と出会った、あの時から、何ひとつ変わっちゃいない」

「そ、それって…」

いつ俺の目を見るのをやめてしまつか分からない雫の目をしっかり見ながら、笑って言っていた。

最高の言葉ってやつを。

「俺は、雫をこの世で一番愛してるよ」

雫の瞳に溜まっていた涙が、いつきにあふれ出す。

そんな雫を、そつと俺は抱き寄せた。

雫との日々を思いながら。

End .

最終話 修学旅行〱零との日々（後書き）

これにて『君との日々』本編完結とさせていただきます。

最後まで付き合ってくださった人や、ちよつとでもこの話を見てくださった皆様に心から感謝します。

本当に、ありがとうございました。

最終話まで56話と長々としちゃいましたが（本当は30話ほどで終了予定だった）

完結できてよかったと思います。

当初の予定であった、毎日更新も実行できたことだし…。

途中、自分の文章力の無さに書く気をたびたび失っていましたが、メールや、メッセージ、評価等を送ってくださったおかげで、最後まで書くことが出来たと思います。

そして、この小説が一応、小説家になろうデビュー作というわけです。

今度書く小説は、私自身本当の小説書きデビュー作です。

いつ公開するなどは全く決めていませんが、遠い未来に公開というわけではどうもなさそうです。

この後に、大地のあとがきがあります。
基本、大地の独り言ですので…。

気が向いた人は、見ていつてあげてください。

最後に、もう一度…

この小説を見てくださった皆様、本当にありがとうございました。

大地からのあとがき

読者の皆様！ 最後まで俺に付き合っていていただいてありがとうございます！
いました！

一応、主人公の池山大地です。

作者情報によると、次に書く小説も決まっているらしいぞ。

…俺達はどうなるのって話だな。

そして、この場を借りて、作者に言いたいことがある。

こんなボロクソな小説の書き方をしたせいで、俺の不良という設定が台無しじゃねえか！

…まあ、こんなところで俺がキレても仕方ないのだけだな。

作者にはもっと上手く書いて欲しい所だった。

それで……って、あんなところに雫がいるじゃないか！

しかも、美人モード！　って、あの劇的な告白以来ずっと三つ編みモードにしてないんだけど。

その分、俺がしっかりと守ってあげてますよ。

あ、雫がどこか行きそうなんで、すみません。雫のところへ行ってきますね。」

「おい、雫！」

「何？」

「何してるんだよ、こんなところで？」

「少し、空を眺めてた」

「え？ 空？ どこにいるんだよ」

「はぁ…、そっちの空じゃないわよ。上にあるでしょ？ 空」

「…そっちかよ」

「あ、そういえば大地」

「どうした？」

「あのテストの時の約束覚えてる？」

「テスト…ああ、負けたほうが、何でも言うことを聞くっていう約束？」

「それ。まだ大地に言ってなかったよね」

「そうだな…あの後も、色々あったし」

「そ、それでね、今決めたの」

「何だよ？」

「あのね、その…いつ、一生…わ、私の傍にいて…ね？ 絶対だよ！」

あらら、それだけ言って雫はどこかに行っちゃいました。

とりあえず、恥ずかしいところをお見せしてすみません。

いくら、読者様でもこんな可愛い雫は渡さないからな！

これ以上、長話すると雫を見失っちゃうから、そろそろ俺は雫を追いかけてきます。

また、この作者が書いている小説を見かけたら、読んでやってください。

では、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160d/>

君との日々

2010年10月10日10時49分発行